

栗林遺跡発掘調査報告書

平成 8 年度特定環境保全公共下水道事業
高丘終末処理場建設に伴う埋蔵文化財調査

— 1997 —

中野市
中野市教育委員会

栗林遺跡発掘調査報告書

平成 8 年度特定環境保全公共下水道事業
高丘終末処理場建設に伴う埋蔵文化財調査

— 1997 —

中野市
中野市教育委員会

刊行にあたって

本報告書は平成8年度特定環境保全公共下水道事業高丘終末処理場建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

高丘地区には多くの遺跡が分布しており、上信越自動車道や県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査が実施され、多大な成果を納めたことは記憶に新しいところである。

調査の対象となった栗林遺跡は中部高地の弥生時代中期後半を代表する遺跡の一つである。栗林遺跡研究の歴史は長く、すでに何度かの調査も実施されてはいるが、遺跡の規模が大変大きく、その概要が少しずつわかりはじめたのは、最近のことである。

調査地点は広い栗林遺跡の南端に位置し、耕地として利用された地域でもあるため、遺跡の遺存状況は良くないだろうと考えていた。調査の結果、一部はそうした状況が認められたものの、弥生時代の住居跡20数軒、土坑60基、出土土器片数はコンテナ100箱近くなるという思いがけない結果となった。

そして、これまで中期で衰退すると考えられていた栗林遺跡が弥生後期前葉まで存続することや、県下でははじめての発見である排水溝付竪穴住居跡を検出し、栗林遺跡研究に新たな知見を加えることができ、大きな成果を得ることができたと考えている。

また、こうした埋蔵文化財が関係諸機関や市民の理解と協力により、事前調査が実施され、その成果を報告書として上奏できることを誇りに思うとともに、関係各位に篤く感謝の意を表したい。

平成9年3月20日

中野市教育委員会

教育長 小林 治己

例　　言

1. 本書は平成8年度特定公共下水道事業高丘終末処理場建設に伴う埋蔵文化財の調査報告書である。
2. 調査は中野市教育委員会が実施した。
3. 造構図は整穴住居1/60、土坑は1/40の縮尺とした。
4. 土器の実測図は1/4に統一してある。
5. 発掘調査及び報告書の執筆は中野市教育委員会学芸員と調査員関武が中心となって行った。

目 次

第1章 地 形	16
第1節 地 形	17
第2節 栗林遺跡の広がりと周辺遺跡	17
第3節 調査区の立地地形	18
第2章 弥生時代の遺構	18
第1節 住 居	18
1 住居の種類	18
2 竪穴住居平面形態の変遷	18
3 竪穴住居の規模	18
4 竪穴住居の柱穴の配置	18
5 竪穴住居の壁際に並ぶピット	18
6 竪穴住居の分布	18
7 竪穴住居の排水溝	18
8 竪穴住居の施設として利用された土器	19
9 住居内における土器の配置	19
10 挖立柱建物	19
11 平地式住居	19
12 各 説	20
(1) 竪穴住居	20
第1号竪穴住居	20
第2号竪穴住居	20
第3号竪穴住居	20
第4号竪穴住居	20
第5号竪穴住居	20
第6号竪穴住居	20
第7号竪穴住居	20
第8号竪穴住居	20
第9号竪穴住居	20
第10号竪穴住居	20
第11号竪穴住居	20
第12号竪穴住居	20
第13号竪穴住居	20
第14号竪穴住居	20
第15号竪穴住居	20
(2) 挖立柱建物	20
第1号挖立柱建物	20
第2号挖立柱建物	20
第3号挖立柱建物	20
(3) 平地式住居	20
第1号平地式住居	20
第2号平地式住居	20
第3号平地式住居	20
第4号平地式住居	20
第5号平地式住居	20
第6号平地式住居	20
第2節 土 坑	20
1 形態分類	20
2 A類土坑の土層堆積状況	20
3 A類土坑の分布	20
4 土器が埋設された土坑	20
5 各 説	20
(1) A類	20
第1号土坑	20
第2号土坑	20
第3号土坑	20
第4号土坑	20
第5号土坑	20
第6号土坑	20
第7号土坑	20
第8号土坑	20
第9号土坑	20
第10号土坑	20
第11号土坑	20
第12号土坑	20
第13号土坑	20

第14号土坑	37	第50号土坑	41
第15号土坑	37	第51号土坑	41
第16号土坑	37	第52号土坑	41
第17号土坑	37	第53号土坑	41
第18号土坑	37	第54号土坑	41
第19号土坑	37	第55号土坑	41
第20号土坑	37	第56号土坑	41
第21号土坑	38	第57号土坑	41
第22号土坑	38	第58号土坑	42
第23号土坑	38	(4) D 類	42
第24号土坑	38	第59号土坑	42
第25号土坑	38	第60号土坑	42
第26号土坑	38	第61号土坑	42
第27号土坑	38	第62号土坑	42
第28号土坑	38	第63号土坑	42
第29号土坑	39	(5) E 類	42
第30号土坑	39	第64号土坑	42
第31号土坑	39	第65号土坑	42
第32号土坑	39	第66号土坑	42
第33号土坑	39	第3節 溝	42
第34号土坑	39	第3章 弥生時代遺物	48
第35号土坑	39	第1節 土 器	48
第36号土坑	39	1 分 類	48
第37号土坑	39	2 壺形土器の分類	48
第38号土坑	40	3 壺形土器の変化	52
第39号土坑	40	4 豊形土器の分類	52
第40号土坑	40	5 豊形土器の変化	54
第41号土坑	40	第2節 各 説	55
第42号土坑	40	1 中期後半の土器	55
(2) B 類	40	(1) 穫穴住居出土の土器	55
第43号土坑	40	第1号 穫穴住居出土土器	55
第44号土坑	40	第2号 穫穴住居出土土器	56
第45号土坑	40	第3号 穫穴住居出土土器	56
第46号土坑	41	第4号 穫穴住居出土土器	56
第47号土坑	41	第5号 穫穴住居出土土器	56
第48号土坑	41	第6号 穫穴住居出土土器	56
(3) C 類	41	第7号 穫穴住居出土土器	57
第49号土坑	41		

図版目次

第23号竪穴住居出土土器	57	第1図 遺跡の位置(1)
(2) 土坑出土の土器	57	第2図 遺跡の位置(2)
第40号土坑出土の土器	57	第3図 栗林遺跡の広がり
第42号土坑出土の土器	57	第4図 竪穴住居平面形態の変遷
第1号土器集中の土器	57	第5図 竪穴住居の規模
第44号土坑出土の土器	57	第6図 柱穴の配置
第31号土坑出土の土器	57	第7図 竪穴住居の壁際に並ぶピット
第167号土坑出土の土器	57	第8図 竪穴住居の分布
第31号土坑出土の土器	57	第9図 竪穴住居の排水溝
第25号土坑出土の土器	57	第10図 第8号竪穴住居 土器出土状況
第34号土坑出土の土器	57	第11図 平地式住居の規模
第11号土坑出土の土器	57	第12図 第1号、第2号竪穴住居
第25号土坑出土の土器	58	第13図 第3号、第4号竪穴住居
第36号土坑出土の土器	58	第14図 第5号、第6号竪穴住居
第2号土器集中の土器	58	第15図 第7号、第8号竪穴住居
2 後期前葉	58	第16図 第9号、第10号竪穴住居
第21号竪穴住居出土土器	58	第17図 第11号、第12号竪穴住居
第9号竪穴住居出土土器	58	第18図 第13号、第14号竪穴住居
第8号竪穴住居出土土器	59	第19図 第15号、第16号竪穴住居
第13号竪穴住居出土土器	59	第20図 第17号、第18号竪穴住居
第14号竪穴住居出土土器	59	第21図 第19号、第20号竪穴住居
第15号竪穴住居出土土器	59	第22図 第21号竪穴住居
第16号竪穴住居出土土器	59	第23図 第22号竪穴住居
第17号竪穴住居出土土器	59	第24図 第23号竪穴住居、第1号、第2号掘建柱建物
第18号竪穴住居出土土器	59	第25図 第3号掘建柱建物、平地式住居
第22号竪穴住居出土土器	59	第26図 土坑の法量分布
第20号竪穴住居出土土器	60	第27図 A類土坑の土層堆積状況
第3節 石 器	60	第28図 土器が埋設された土坑
1 石 器	60	第29図 土 坑(1)
第4章 ま と め	74	第30図 土 坑(2)
第1節 弥生土器編年	74	第31図 土 坑(3)
1 段階区分	74	第32図 土 坑(4)
第2節 栗林遺跡における集落の階層的構造	77	第33図 土 坑(5)
		第34図 壺形土器分類表
		第35図 風形土器分類表

第36図 弥生土器の器形変遷図（模式）

第37図 弥生土器(1)

第38図 弥生土器(2)

第39図 弥生土器(3)

第40図 弥生土器(4)

第41図 弥生土器(5)

第42図 弥生土器(6)

第43図 弥生土器(7)

第44図 弥生土器(8)

第45図 弥生土器(9)

第46図 弥生土器(10)

第47図 弥生土器(11)

第48図 弥生土器(12)

第49図 弥生土器(13)

第50図 弥生中期遺構出土の土器

第51図 弥生後期遺構出土の土器

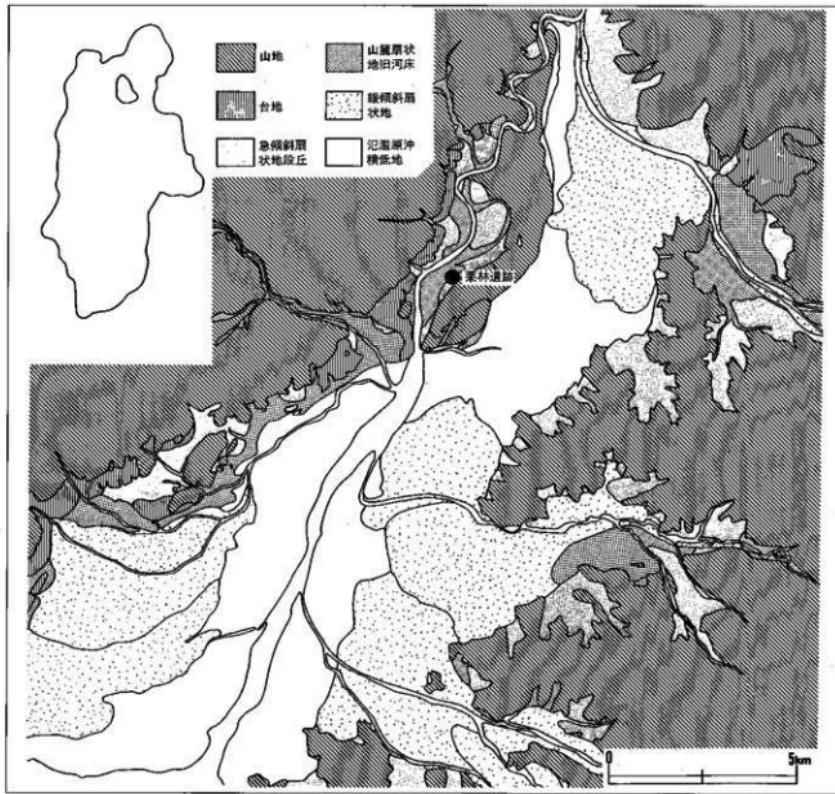
第1章 地形

第1節 地形

栗林遺跡は長野県中野市栗林地籍に所在する。中野市は長野盆地の最北端に位置し、長野盆地の北側に位置する飯山盆地と隣接する。長野盆地は中部高地最大の盆地で、南北に長い紡錘形状を呈し、ほぼ中央を千曲川（信濃川）が北流する。盆地の東西を画する山地は西部山地、河東山地と呼ばれ、新潟、

群馬県との県境となっている。盆地の低地部には自然堤防と東西の山地から流入する河川が形成する扇状地が発達する。中野市は長野盆地の最も北に位置する典型的な扇状地地形上（中野扇状地）に位置している。

中野市の地形は大きく山地、扇状地、盆地底部、丘陵に区分され、東の河東山地から流入する夜間瀬川が形成した扇状地地形が市域の大半を占め、河東山地から広がる扇状地の先端は西部山地の裾部に形成された高丘・長丘丘陵に接する。高丘・長丘丘陵と西部山地の間に千曲川がかん入し、西部山地と高



第1図 遺跡の位置(I)



第2図 遺跡の位置(2)

丘・長丘丘陵を南北に切り離している。

栗林遺跡はこの中野市の西端、高丘・長丘丘陵に位置している。

高丘・長丘丘陵は西部山地の間に千曲川を挟み南北に延びる細長い丘陵で、標高が高く険しい北側部分と標高が低く平坦な地形をなす南端部からなり、

南端部分は高丘丘陵と呼ばれる。丘陵の東側と西側では異なる地形環境が形成されている。すなわちは、西側は千曲川と面し河岸段丘が発達し緩やかな地形をなし、東側は急な斜面を形成しながら盆地底部の扇状地と接している。

栗林遺跡は河岸段丘地形が発達する丘陵の西側に



第3図 栗林遺跡の広がり

位置している。

遺跡周辺の高丘丘陵には四つの段丘面が認められ、1-1、1-2面と呼ばれる（渡部・1994）。それぞれ盆地底部との比高70~90m、40~60m、10~30m、10m未満を測り、遺跡は最も下位の五面上に位置している。

栗林遺跡は幅約300mで南北に約4kmほど延びる細長い河岸段丘面上の北端から、約1.5kmほどの地点まで広がっていると思われる。段丘面は浅い谷で所々分断される。場合によっては後背湿地状を呈する部分も認められ、緩やかに起伏する。

第2節 栗林遺跡の広がりと周辺遺跡

幅約300m、段丘の北端から約1.5kmの段丘面上が栗林遺跡の範囲と考えられている。今回の調査区は遺跡の南端部分に近いと思われるが、遺跡の南限は明らかではない。

これまで、栗林遺跡は何度か調査され、徐々に遺跡の様相が明らかにされてきているが、調査がすすむにつれ、栗林遺跡全体の構成に新たな検討課題が生じている。

これまでの調査から遺構の分布状況を観察すると、全面的な調査が行われていない現時点では推測の域を脱しないが、遺構は遺跡の範囲全体に満遍なく分布するのではなく、遺構が集中する部分と、その間に遺構の分布密度がうすい地域が交互に存在していると考えられる。

竪穴住居が集中して発見された地点が今回の調査区も含めて3箇所ある。最も北にある松原地籍、県史跡に指定されている北原地籍、そして今回の梨ノ木地籍である。

松原地籍では弥生中期栗林式期段階の竪穴住居と後期稻清水式期の竪穴住居が分布域を異にして発見され、南に隣接する調査区からは柱穴群が検出されている。

北原地籍では栗林期竪穴住居が分布する地区と掘立柱建物群の分布する地区から構成されている。ま

た竪穴住居が分布する地区の西端には大きな溝が確認されている。

同様に今回調査した梨ノ木地区においても、栗林期の竪穴住居群と掘立柱建物群の分布は分離している。

いずれの地区もこれまでの考古学的な常識からいえば、全体像は明らかではないが、一集落の単位と考えてよく、中野市遺跡分布地図上での栗林遺跡は三つ以上の集落から構成されていると考えられるのである。

3地点とも土器型式編年上は共存していた段階があったと考えられる。

さらに、隣接する牛出遺跡、安源寺遺跡でも、数は少ないとはいえ、栗林式土器や栗林期の造構が発見されている。こうした点を考慮すると弥生中期造構や遺物が分布する領域はさらに拡大することになる。

また、これまで栗林遺跡は栗林式期で衰退してしまったと考えていたが、今回の調査では弥生後期初頭の吉田式期の集落の存在が確認され、栗林遺跡は後期段階まで営まれることが明らかになり、隣接する安源寺遺跡との関係が注意される。

栗林遺跡は弥生中期、安源寺遺跡は弥生後期の遺跡として独立した存在だと考えてきたが、今回の吉田式期の集落の発見は栗林遺跡と安源寺遺跡が連続的営まれた可能性や栗林遺跡と安源寺遺跡が同じ歴史的コンテクストを有した可能性が示唆され、栗林遺跡、安源寺遺跡一帯の遺跡のあり方を大きな視点から見直す必要があろう。

第3節 調査区の立地地形

次に調査区周辺の微地形について観察しておきたい。

調査地点は千曲川の下位段丘面であり、約300mの幅ではほぼ東西にのびる段丘面の中程よりも北側、千曲川との段丘崖間にあり、県史跡栗林遺跡である北原地籍の弥生集落は東へ約500mの距離にある。

北原地籍の集落と本調査区の間、調査区から東へ約100mの位置で小河川が段丘面を分断している。この小河川は北原地籍よりやや東の地点から、高位段丘崖下を東から西に向かって流れ、やや方向を北にかえて段丘面を分断する。

北原地籍では段丘崖に沿うように自然堤防と後背湿地状の地形が観察されるが、本調査区の周辺は区画整理事業が行われ、本来の微地形が観察できず、北原地籍のような微地形が存在したかどうか明らかではないが、その微地形はほぼ北原地籍と同じと考えて良いであろう。

こうした集落の立地に関連して、水田が存在するとすれば、何処に位置するのか問題になろう。ちなみに、北原地籍では段丘に沿った微高地が集落域、その背後の窪地が水田域として考えられていたが、発掘調査では確認されていない。

栗林遺跡周辺の段丘面は灌漑用水が充備されるまでは水田が少ない地帯であり、おそらくその事情は弥生時代でも変わらないものと想像される。

したがって、現時点では水田域がどこにあったか推測さえできない状況にある。今後、栗林遺跡の構造を考えるうえで重要な課題となろう。

第2章 弥生時代の遺構

第1節 住居

1 住居の種類

竪穴住居23、平地式住居6、掘建柱建物3が発見された。平地式住居は幅約30~40cmの溝が直径約4~6mの円形に巡るもので、内部には炉や柱穴を確認することはできなかったが、類例を考慮し、本報告では平地式住居と認識しておく。

竪穴住居は円形と長方形の平面プランを持つものがあり、前者は栗林式期、後者は吉田式期のものである。一般に栗林式の住居は検出面からの掘り込みが浅く、反対に吉田式期のものは深く壁の立ち上がりも良好であった。吉田式期の長方形プランの例には16m×7mの平均値を遙かに越える大型住居2基が含まれている。

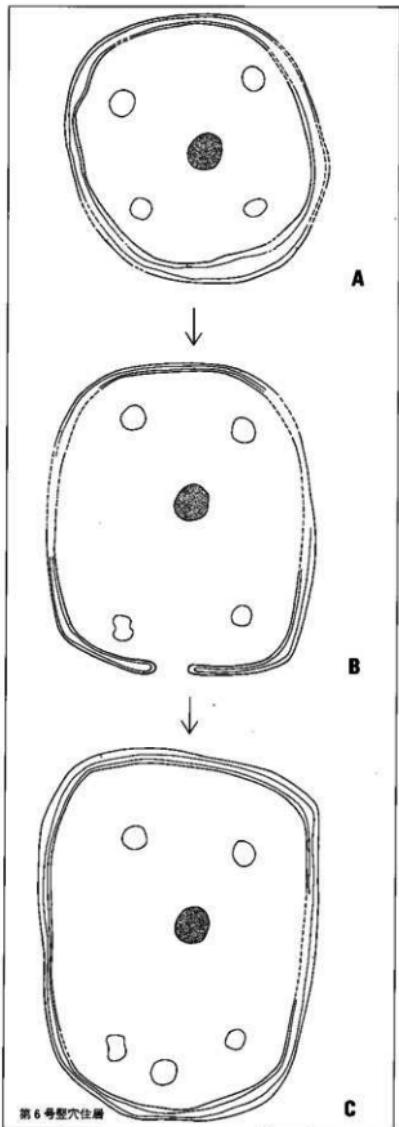
平地式住居、掘建柱建物についてはその時期を明確に限定する決定的なデータはない。平地式住居は吉田式期の住居と切り合いが認められる例があり、その所見では住居の方が新しい。したがって、これらは栗林式期に属するものではないかと考えている。

2 竪穴住居平面形態の変遷

竪穴住居の平面形態は(1)円形、(2)方形、(3)長方形の三者に分類できる。伴った土器の型式から、住居の形態が円形から長方形に移行することは明らかであるが、その移行のあり方を検討しておきたい。

今回は調査では円形の住居が長方形に拡張された第6号竪穴住居例がある。この住居では合計3回の拡張が行われている。なお、切り合いではなく、拡張と判断した理由は周溝の共有関係が認められるからである。

第6号竪穴住居ではまず、円形のA号住居が作られ、次に方形に近いB号住居に拡張され、最後に長方形のC号住居が造られたものと思われる。この間、炉は移動していない。



第4図 壇穴住居平面形態の変遷

この事例は円形の住居から長方形の住居への切り替えが、異なる人々によってなされたのではなく、同一の人々によってなされたことを暗示している。また、形態的な変化も連続的であり、一気に長方形プランに変化したのではないことを示す事例であると考える。

3 壇穴住居の規模

壇穴住居の規模についてまとめておく。第5図は発見した住居の規模を平面プランごとに並べたものである。円形と方形に比して、長方形の壇穴住居は全体として大きくなっていること、長方形のものは大きさにバリエーションがあることがわかる。

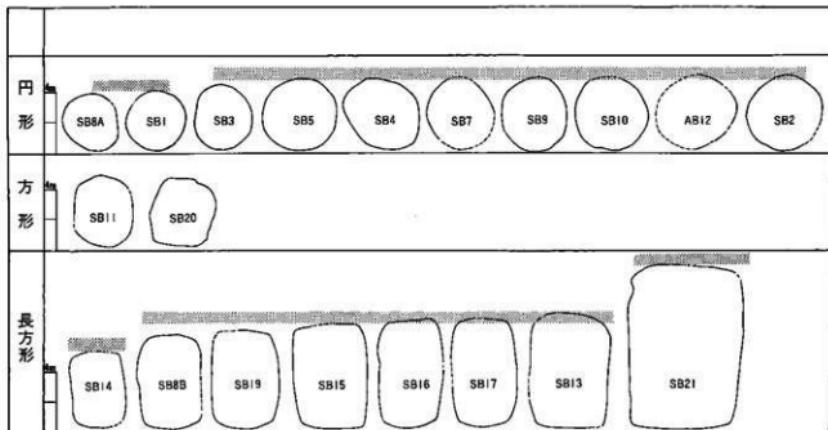
長方形の壇穴住居の規模を小型、中型、大型に区分することができよう。小型に区分できるのは1例であるが、円形や方形に壇穴住居とはほぼ同様の規模である。中型は本調査区では標準的なものであり、円形や方形のものよりやや大きい規模となっている。大型は2例認められる。その規模は明らかに特異である。

壇穴住居の規模がどのような事象を反映したものであるかは定かではないが、栗林式期の円形住居のあり方が等質的であるのに対して、吉田式期の長方形の壇穴住居の規模に差異が認められることは確かであり、住居の平面形態の変化を考えあわせると栗林式期と吉田式期の間に何らかの変化が生じていることが予測されよう。

4 壇穴住居の柱穴の配置

円形の壇穴住居：主柱穴の配置が明確なものはほとんどない。県埋文センターが調査した松原地区の壇穴住居でも同様のことが指摘できる。今回の調査でもこの点について注意したが多くの柱穴状のピットが床面で検出され、どのピットが住居に伴うか判然としなかった（第6図）。

図示したものは比較的配置が読み取れるものであるが、第6号壇穴住居例の四本柱以外は主柱穴がはっきりせず、アトランダムに配置されている。第5



第5図 竪穴住居の規模

号豎穴住居例は大きめのピットが五角形ないし四角形に配置されている。また、第4号豎穴住居は細めのピットが壁にそって円形に配置されてはいるが明確ではない。

方形の豎穴住居：方形の豎穴住居は2例と数は少ないが、主柱穴の配置は比較的明瞭である。第20号豎穴住居は4本、第11号豎穴住居は5本の主柱穴が確認できる。

長方形の住居：円形や方形のものと比較すると長方形の住居の主柱穴の配置は極めて良く整っている。四本柱のものが4例、六本柱の例が5例ある。

5 豊穴住居の壁際に並ぶピット

長方形豎穴住居の短い辺の壁際に、主柱穴とは別に、2個のピットが配列されている例が4例（第15号豎穴住居、第17号豎穴住居、第22号豎穴住居、第13号豎穴住居）ある。4例とも位置関係が良く似ており、何らかの施設と結び付けられるのではないかと思われる（第7図）。

第15号豎穴住居ではピットは壁方向からやや斜めに掘りこまれたという所見がある。第17号豎穴住居のように主柱穴が六角形を呈しているものにも認められることや対になるピットが対面する壁側から発

見されていない。第13号豎穴住居では五角形に配置された主柱穴の底辺にあたる壁際に検出されているが、別に柱穴が用意されていると思われ、やはり別の用途に供されたピットであると考える。壁際に近いことやピット間の距離が幅約80cm程度であり、住居の入り口に関する何らかの施設に関係していると考えられないだろうか。

6 豊穴住居の分布

住居は調査区全体に分布するではなく、調査区の北側半分に偏っている。おそらく、住居の分布する地点の南側を東西に延びる溝が住居空間の境界を造っているのではないかと考えられる。したがって、居住空間は溝より北側に広がるものと推測される。

しかし、調査区の北側40m前後に下位面との段丘崖がせまっており、居住空間として利用できる空間は限定されている。仮に、溝が南側に移動していれば、より広い居住空間が設定可能となる。なぜ、段丘崖側に近づいて居住空間が設定されるのであろうか。同様な居住空間の設定は北原地籍の集落にも伺われ、自然堤防と後背湿地の関係で捉えられた。本調査区の場合も同様な理由によるものだろうか。

次に調査区内の分布のあり方にふれておきたい。

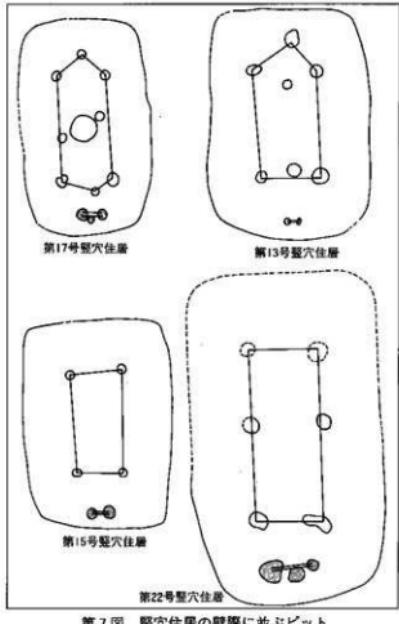
円形			
方形			
長方形			
大形住居			

第6図 柱穴の配置

吉田式期の隅丸長方形の竪穴住居の分布と軸の方向に注意すると、四つのグループに分類できることに気付く。それぞれのグループを西からAからDと呼ぶ。Dグループは2軒、AからCグループは3軒の竪穴住居から構成され、その軸の方向がほぼ一致

する。

Aグループは大型住居2軒（第22号竪穴住居、第21号竪穴住居）とやや小さめな住居1軒（第8号竪穴住居）からなる。第8号竪穴住居は栗林期の住居と切り合い、前二者とは軸の方向がやや異なる。



第7図 竪穴住居の壁際に並ぶピット

Bグループは第17号竪穴住居、第8号竪穴住居、第1号竪穴住居からなる。第1号竪穴住居の検出状況が悪いため若干の問題が残るが、3軒ともほぼ同じ軸方向である。

Cグループは第14号竪穴住居、第13号竪穴住居、第15号竪穴住居からなり、第14号竪穴住居はやや小型である。3軒とも軸の方向がほぼ一致する。なお、第13号竪穴住居と第15号竪穴住居の排水溝が切り合いで、同時に存在していたとは考えにくい。

Dグループは第16号竪穴住居、第19号竪穴住居から構成されるが、軸の方向はやや異なる。

このようにAからDグループは軸の方向や切り合いでから2軒から構成されていることが理解される。

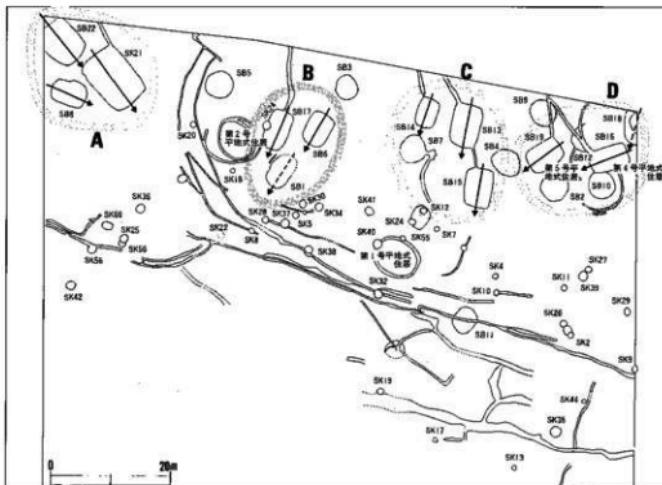
7 竪穴住居の排水溝

周溝からトンネルを介して屋外に延びる溝が伴う住居が10例確認されている。いずれも、長方形の竪穴住居例で、コーナーから外に延びるもの9例、短い壁から外に延びるもの1例ある（第9図）。

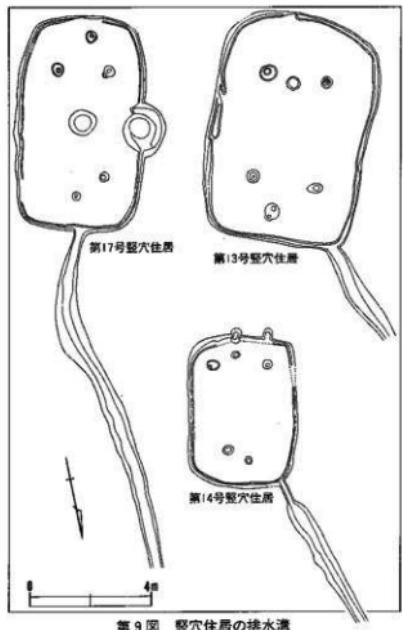
トンネルは周溝底レベルよりやや低い位置からは水平に屋外に向かって掘られ、その断面は直径約20cmの円形をなし、長さ約80cmほど延び、屋外の溝に連結する。

屋外の溝は幅約60cm、深さ60cmを計測し、いずれも斜面に直交する方向で調査区の外に延びている。

周溝底よりやや下がる位置から掘りこまれ、斜面に直交する溝に連結するという2点から排水施設と考えた。これまで、



第8図 竪穴住居の分布



第9図 竪穴住居の排水溝

周溝の性格については様々な考え方があったが、本遺跡例では排水の為の施設であるすることができよう。

8 竪穴住居の施設として利用された土器

土器が器の機能を失い、別の土器を固定する台として利用された例が第8号竪穴住居で確認されている（第10図）。

第8号竪穴住居は長軸が南北となる長方形の竪穴住居で、焼消住家である。固定台として再利用された土器は西壁のはば中央よりや北側の壁際に検出された。固定台として利用された土器は2例あり、いずれも壺形土器の頸部以上の口縁部の破片で、隣接して並べられ、逆位に床面に設置されていた。設置された土器の下位面はわずかに窪み、土器が床面に埋め込まれて固定されていた様子がうかがわれた。

逆位におかれたり形土器の口縁部の上に小型の甕

形土器がのせられたままの状況で出土し、2例が土器の固定台として利用されていたことは明らかである。

また、第17号竪穴住居では土器のおかれていた様子がうかがえる出土状況が確認された。第17号竪穴住居は長軸が南北をむく長方形の住居であり、口縁部を下にした逆位の形で完形の壺形土器が2例並ぶように（北壁際に）検出された。

検出された位置は第8号竪穴住居と同様に短い壁側である。また、数も一致しており単なる偶然と考えてよいのであろうか。

9 住居内における土器の配置

第8号竪穴住居は覆土内に大量の焼土が堆積しており、焼失住居であると考えられる。先程述べたように土器の固定台が使用されていた状況を残したもので検出され、土器が使用時の原位置を保っている可能性が高いと考えられる。

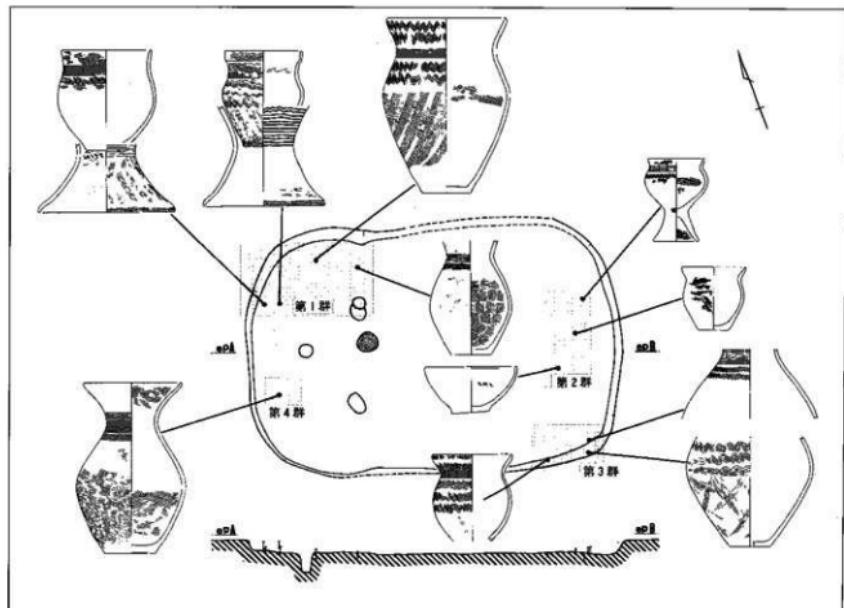
そこで、第8号竪穴住居の土器の出土状況について分析し、竪穴住居使用時の土器の配置が読み取れないか検討しておきたい。

実測可能な土器は14個体ある。そのうち、ほぼ完形に復元された土器は8個体、固定台として利用された土器が2個体、固定台の上のにせられていた土器が2個体ある。

その組成は壺形土器6個体、甕形土器5個体、台付甕形土器2個体、鉢形土器1個体から構成される。

壺形土器は、固定台に利用されているものが2個体、大型壺の頸部部分の破片が2個体、小型壺の完形品が1個体、口縁部を欠損するものが1個体ある。甕形土器は固定台の上のにせられていた中型の完形品が2個体、完形の大型甕が1個体、大型甕形土器の破片が1個体、完形の小型甕形土器が1例という構成になっている。台付甕形土器は完形品1個体、脚部を欠損するものが1個体ある。鉢形土器は完形品である。

出土位置は第10図に示すように4箇所にグレーピングできる。第1群は北西コーナーを中心とするも



第10図 第8号竪穴住居 土器出土状況

ので、固定台と固定台にのせられた變形土器が2個体、大型の變形土器が1個体、口縁部を欠く小型の変形土器から構成される。第2群は東壁の中央部分に位置するもので、小型の變形土器1個体、台付き變形土器1個体、鉢形土器1個体からなる。第3群は南東コーナーに位置し、大型の変形土器1個体、大型の變形土器1個体、台付變形土器1個体からなるが、いずれも破片である。第4群は西壁やや南側に位置する小型壺である。

第1群は煮沸形態である變形土器を中心に構成され調理との結びつきの強い土器によって構成される。第2群は食器の用途を推測させる土器によって構成される。第3群はいずれも大型破片であり、壁際直下に位置する。第4群は1点のみであるが、貯蔵具とされる壺からなる。

こうした土器の配置（出土状況）はおぼろげながら、竪穴住居内の機能空間のあり方を示していると

することができよう。

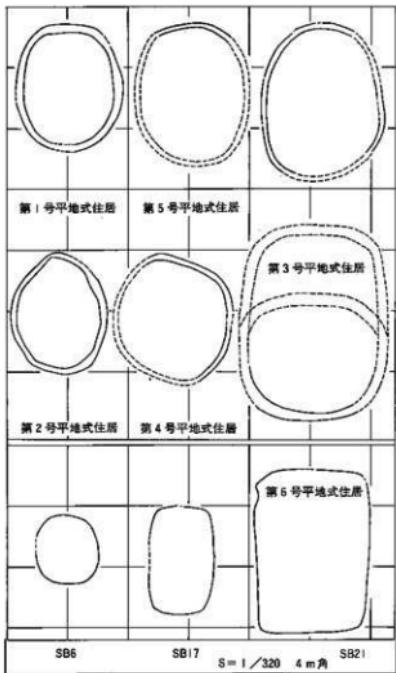
10 挖立柱建物

掘建柱建物は3基発見された。 1×3 間のものと 1×4 間の二者がある。明確に確認できたのは僅かであったが、調査区には無数のピットが検出されている。これらは掘建柱建物の痕跡と考えられ、相当数の掘建柱建物が存在していたと考えている。

11 平地式住居

先述したように平地式住居は7例を検出した。第1号平地式住居以外はその全形を明確に知ることができないが、溝は正円形ではなく、やや長円形（小判形）を呈している。先述したように、溝に囲まれた部分を精査したが、炉跡や柱穴を検出することはできなかった。

第11図は平地式住居の規模と形態を模式的に示し



第11図 平地式住居の規模

たものである。長軸約8m前後のものが5例ある。第3号平地式住居は二通りに推定復元されるが、長軸8m前後に復元するのが適当であろう。

規則的には円形であり、平均的な長方形の竪穴住居規模よりも遙かに大きい。

時期については明らかではないが、第4号平地式住居が吉田式期の第16号竪穴住居にきられており、栗林式期のものと見てよいのではなかろうか。

仮に栗林式期のものであるとすれば、竪穴住居(小)と平地式住居(大)の構造的な対置関係が考えられるのかも知れない。

また、この溝の性格を考えるうえで、第10号竪穴住居と第4号平地式住居の位置関係は重視されなければならないのかもしれない。第10号竪穴住居は丁度第4号平地式住居の中心に位置している。両者と

も栗林式期のものであり、偶然の配置と思えない部分もあり、今後注意しなければならないであろう。

12 各説

(1) 竪穴住居

第1号住居 (SB33) (第12図)

位置: J・K, 17・18グリッド。

検出: 壁の立ち上がりはほとんど確認できず、周溝と柱穴を検出したのみである。

平面形態: 直径約4mの不整円形。周溝が全周する。

柱穴の配置: 床面にはいくつかのピットが確認されたが、主柱穴や柱の配置を特定することは難しい。平面図では主柱穴を想定してみたが、確実なものではない。

炉: 検出できなかった。

第2号竪穴住居 (SB42) (第12図)

位置: K・L, 5・6グリッド。

検出: 検出面から掘りこみが浅いこと、他の遺構との切り合うことなど、明瞭に確認できなかった。

平面形態: 直径約4.5mの円形

柱穴の配置: 不明。

備考: 住居でない可能性もある。

第3号竪穴住居 (SB35) (第13図)

位置: F・G, 14・15グリッド。

検出: 落ち込みは確認できたが、壁の立ち上がりは不明瞭であった。壁直下に周溝が存在することから、周溝を頼りに検出を行った。そのため、周溝のない部分については検出が困難であった。周溝は西側部分でとぎれる。また、わずかであるが、内側にもう1本の周溝を確認している。

平面形態: 直径約4mの不整円形を呈しているが、先述したように周溝の内部分の壁の立ち上がりの検出が難しかった点を考慮すれば、ほぼ円形であったとしてよいであろう。

柱穴の配置: 床面に検出されたピットの径は小さく、

柱穴とするには無理があるようにも思える。

備考：

第4号竪穴住居（SB41）（第13図）

位置：J・K、7・8グリッド。

検出：検出は土器の集中に注意したことに始まる。土器の集中する部分の周辺を精査したところ、円形の落ち込みが確認できた。しかし、掘り下げたところ、壁の立ち上がりは僅かであり、周溝も確認できなかった。

平面形態：直径約5.4mの不整円形を呈する。

柱穴の配置：床面にピットを幾つか確認しているが、本住居に伴うものかどうか判然としない。

遺物出土状況：住居の南東部分の覆土に土器が大量に検出された。いずれも破片であったが、その密度は極めて高く、分布範囲も限定される。通常の覆土内の遺物出土状況と異なり、別の遺構が存在することも考えたが確認できなかった。

住居が廃絶された後に何らかの行為が行われた可能性もある。

備考：ほぼ中央に長軸80cm、短軸50cm、深さ20cmの土坑が検出された。

第5号竪穴住居（SB34）（第14図）

位置：F・G、20・21グリッド。

検出：検出面からの壁の立ち上がりは僅かであった。周溝は西側部分がとぎれるほかは全周する。柱穴の検出は比較的容易であったが、どれが主柱穴を形成するのか判然としない。

平面形態：直径約4.8mの不整円形。

柱穴の配置：どれが主柱穴を構成するのか判然としないが、主なものを結ぶと五本柱となろうか。

備考：ほぼ中央に径約50cm、深さ約20cmの土坑が検出されている。

第6A号竪穴住居（SB24）（第14図）

位置：H・I、15・16グリッド。J、16グリッド。

検出：検出面にて明瞭な落ち込みが確認できた。検

出面では、平安時代の考えられる土坑の他には住居（遺構）の重複は確認できなかった。覆土を床面ちかくまで掘り下げたところ、壁より内側に、床面に僅かな段差と周溝を確認し、住居が重複していることが確認された。検出面での所管と周溝が共有されていることから拡張されたものと判断した。

平面形態：直径約5mの円形を呈する。周溝が全周する。

柱穴の配置：図示した4本の柱穴が主柱穴であろうと推定した。

炉：ほぼ中央に径約50cm程度土坑状の炉が確認されている。ただし、炉をピットが切っていた。

備考：拡張住居をそれぞれA、B、Cと呼ぶ。

第6B号竪穴住居（SB24B）（第14図）

位置：第6A号と同じ。

検出：第6A号と同じ。

平面形態：長軸5m、短軸4.4mの長方形。A、Cの住居と周溝を共有し、南側部分では一部周溝がされている。

柱穴の配置：4本の主柱穴が想定される。

炉：6A号の炉をそのまま踏襲していると考えられる。

第6C号竪穴住居（SB24C）（第14図）

位置：6A号と同じ。

検出：6A号と同じ。

平面形態：長軸約6m、短軸4.4mの隅丸長方形。周溝が全周する。

柱穴の配置：6本の主柱穴を想定した。

炉：6A号をそのまま踏襲している。

備考：本住居は平面形態から考えると後期初頭のものと考えるべきであるが、出土遺物は栗林式土器であり、完形に近いものである。

この栗林式土器は住居の北西側の床面から纏まって検出された。出土状況としては特殊であると考えている。拡張住居であること炉跡が踏襲されづづけることなど遺構の側面からも他の住居との違いを指

摘できる。

第7号竪穴住居（SB20）（第15図）

位置：I・J, 11・12グリッド。

検出：円形の落ち込みが確認し掘り下げたが、壁の立ち上がりは不明瞭で、周溝も検出できなかった。

平面形態：直径約4.2mの不整円形。

柱穴の配置：床面より柱穴を検出したが、その配置は明らかではない。

備考：炭化材が住居のはば中央を中心に放射状に検出され、焼失住居と考えられる。ただし、床面直上部分から検出したため遺物との関係とうについては不明である。また、柱穴内に柱材が炭化したもののが検出されており、柱は抜き取られてはいないと思われる。

第8A号竪穴住居（SB28A）（第17図）

位置：G・H, 26・27グリッド。G, 28グリッド。

検出：焼失住居第8B号住居の下面から検出された。覆土内には焼土は混入しない。おそらく、埋め戻されたものと思われる。基盤層が黄色であったため、壁の立ち上がりは極めて良好に検出することができた。床面のピットも容易に検出できる状況にあったが、柱穴の配置は不明瞭である。

平面形態：直径約3.6mの円形。周溝は認められない。

柱穴の配置：先述したように不明瞭である。

第8B号竪穴住居（SB28B）（第17図）

位置：G・H, 26・27グリッド。

検出：黒褐色土壤中に幅5cm程度の焼土がベルト状をなして、長方形に分布していた。平面形態から住居と考え、試掘トレンチを設定し、断面観察を行い、住居と確認した。黒褐色の基盤に黒褐色の覆土が堆積していた。そこで住居の検出は壁及び床に堆積していた焼土を目安に行った。

なお、試掘トレンチを設定した際に床面の焼土より下面に住居（第8A号）を確認した。

平面形態：長軸6m、短軸4mの長方形（隅丸）を呈する。南東隅にわずかに周溝を確認した。

柱穴の配置：東側が第8A号住と切り合うため、西側部分しか確認できなかつたが、六角形をなす配置をであると推測される。柱穴の直径は約20cmと小さい。

炉：中央よりやや西に偏った部分に地床炉が検出されている。

遺物出土状況：覆土内からは小破片が検出されているが数は少ない。床面から14個体の実測可能な土器が出土した。その組成は壺形土器6、甕形土器5、台付き壺2、鉢形土器1個体である。

壁の北西隅には壺形土器の頸部以上の破損品2個体がが口縁部を下に並ぶように設置され、その上に甕形土器の完形品がのせられた状況で検出され、そのやや西側から完形の甕形土器1個体とともに縁部を欠いただけの壺形土器1個体が検出された。

壺形土器の頸部以上の破片は床面をやや掘りくぼめた状況で逆位に設置されていた。また、頸部の破損部分は水平である。甕形土器の底部が壺形土器の頸部中に落ち込むように検出された。こうした検出状況から逆位に設置された二つの壺形土器の破損品は土器の固定台として利用されたことは疑いない事実であろう。

こうしたあり方からみて、本住居床面から出土した土器はほぼ原位置を保ったものと判断してよいと考える。

西壁中央部分の床面からは台付き甕形土器、小型の甕形土器、鉢形土器が纏まって、それぞれ1個体づつ検出されている。いずれも、完形品であった。

また、南東隅の壁にかかる部分には壺形土器、甕形土器、壺形土器の大型破片が検出されている。

さらに、西壁中央よりやや南側の床面からは横に倒れたように壺形土器の完形品が1個体検出されている。

焼土の堆積状況：焼土層は大きく二つに分層することができる。一つは壁際や床面が被熱して変質したと思われる層で住居の輪郭を形成している。他方は

壁から内側に向かって、いわゆる三角土堆積状に分層できる焼土ブロックを含む層である。しかし、この層はより内側に堆積している覆土と明確に分層できず、徐々に焼土ブロックや粒子が減少する形で連続している。焼土ブロックや粒子の混入の度合は一定ではなく、西側が顕著である。

後者の土層堆積は住居が焼け落ちた後に自然に堆積したと考えると焼土ブロックや粒子の混入をうまく説明できないのではないだろうか。むしろ、近年報告されている屋根を覆うようにおかれた土と考えるのが妥当ではなかろうか。ただし、西側と東側部分の焼土ブロックや粒子の混入の度合が異なる理由についてはうまく説明できない。

また、柱穴の中に焼土層が確認された。これは柱の抜き取りを示す可能性があり、もし焼土ブロックを含む層が屋根を覆う土とすることと、柱の抜き取りとの前後関係が問題となろう。

しかし、いずれにしろ焼失住居の覆土堆積はこうした側面からの観察も必要となろう。

第9号竪穴住居 (Sx41) (第16図)

位置: G・H・I, 5・6グリッド。

検出: 落ち込みが浅く、壁の立ち上がりは不明瞭である。わずかに周溝が巡ることから住居と判断した。

平面形態: 径約4.5mの不整円形

柱穴の配置: 柱穴状のピットは確認されているが、主柱穴や配置は不明。

第10号竪穴住居 (SB43) (第16図)

位置: K, 2~4グリッド。L, 3グリッド。

検出: 第4号平地式住居の内側に納まるように、周溝と柱穴が検出された。比較的検出しやすい条件を備えた地点ではあったが、壁の立ち上がりは検出できなかった。北側部分をSB36に切られている。

平面形態: 直径約4.8mの円形を呈す。

柱穴の配置: 床面にピットを検出したが、その数は少なく配置は不明である。

備考: ほぼ中央に長軸70cm、短軸約30cm、深さ約30

cmの土坑が検出された。焼土は確認されなかった。

第11号竪穴住居 (SB6) (第17図)

位置: Q, 9・10グリッド。R, 9グリッド。

検出: 遺物が円形に集中することから住居跡と考え精査したが、壁の立ち上がりはほとんど確認できず、床面と周溝、柱穴を検出したのみである。住居のはば中央を溝が横切る。新旧関係は確認できなかった。平面形態: 1辺約3.6mの円形に近い方形を呈する。周溝が全周する。

柱穴の配置: 5本の主柱穴がほぼ五角形に配置される。

備考: 平面プランを円形とするか方形とするか判断に迷うが、第6A号住に類例を求めることができ、方形に近い円形の住居では柱の配置が明瞭になるようと思われる。後期段階に位置付けられる長方形の住居では柱の配置が明瞭になる傾向が強い。この円形に近い方形のプランは円形から長方形の過渡的な形態ではないかと推測する。

第12号竪穴住居 (SB44) (第17図)

位置: I・J, 4グリッド。

検出: 一部を検出したに留まる。確認した西側部分の壁の立ち上がりも不明瞭であった。

平面形態: 直径約5.4mの円形か。

柱穴の配置: 確認できなかった。

備考: 本例も含め、円形の住居（栗林期）の住居は検出面からの掘り込が浅いのが常であり、柱の配置も不明確である。

第13号竪穴住居 (SB40) (第18図)

位置: H・I, 8~10グリッド。J, 9グリッド。

平面形態: 7.6×5.4mの隅丸長方形を呈し、周溝が全周する。東壁の北よりに土坑状に遺構が切り合う。排水溝: 北西隅に周溝から延びる排水溝が付帯する。排水溝は周溝底から径約20cmのトンネルを経て、住居外の排水溝に連なる。

柱穴の配置: いくつかのピットが検出されたが、六

本柱による六角形に配置と考えられる。

また、南壁中央部の床面に径約20cmのピットが40cmの間隔をおいて並んでいる。

備考：磨製石鎌3点と縁泥片岩のコア、フレイクが出土している。特に、東側部分の中央からフレイクが纏まとった状況で検出された。

第14A号竪穴住居（SB38A）（第18図）

位置：H・I、11・12グリッド。

検出：第14B号住を検出する際に、第14B号住と切り合って確認されたが、落ち込みは不明瞭で周溝の検出されなかた部分の壁の立ち上がりは特に不鮮明であった。

平面形態：直径約4.8mの円形。

柱穴の配置：柱穴状のピットは確認されたが、その配置は第14号住で切られているため不明である。

備考：掘り込みが浅く、僅かの土器片が出土下にすぎない。住居跡でない可能性もある。

第14号B竪穴住居（SB38B）（第18図）

位置：G～I、10～11グリッド。

検出：平面プランが不明瞭で、当初複数の住居の切り合いと考え、セクション観察のトレーナーを設定した結果、二つの住居の切り合いが判明した。第14B号の覆土に焼土が含まれ、焼失住居と判明した。

床面直上に炭化材、焼土が確認できた。

平面形態：5×3.6mの隅丸長方形。周溝が全周する。住居のはば中央の床面に90×30cmの楕円形に焼土がある。

排水溝：北西隅に排水溝が確認された。周溝より北方向に径20cm、長さ70cmにトンネルが掘られ、住居外の排水溝に連続する。排水溝は調査区の外側に延びる。

柱穴の配置：柱穴状のピットが検出されたが、配置を確認できない。

第15号竪穴住居（SB39）（第19図）

位置：J～L、8～9グリッド。

検出：検出面からの掘りこみが深く、壁の立ち上がりも明瞭に検出できた。内側にやや床面が深め検出され、一回り小さな住居が拡張された可能性がある。排水溝は第14B号住と切り合うが新旧関係は確認できなかった。

平面形態：6.8×4.8mの隅丸長方形。周溝が全周する。

排水溝：北壁やや西よりの周溝から北方向に直径約30cmのトンネルが約80cm掘られ、住居外の排水溝と接続する。排水溝は北に向かって延び、SB14B号住と切り合う。切りあった後の排水溝は確認できなかつた。

柱穴の配置：柱穴は4本確認され、長方形に配置される。

また、南壁のほぼ中央に径約30cmのピットが約60cmの間隔をおいて並んでいた。ピットは北に向かって斜めに掘られている。

第16号竪穴住居（SB36）（第19図）

位置：I・J、2・3グリッド。J、4グリッド。K、3グリッド。

検出：検出面では薄い層がかぶり、平面プランの検出が難しかったが、掘りこみは深く、壁の立ち上がりも良好であった。

平面形態：7×4.1mの隅丸長方形。周溝が全周する。

排水溝：北西隅から北方向に直径約20cm、長約70cmのトンネルが掘られ、住居外部の排水溝に連なる。トンネルには白色の砂交じり粘土が詰まっていた。

柱穴の配置：主柱穴と考えられる柱穴が6箇所に検出され、六角形の配置となっている。

遺物の出土状況：東壁と南壁のほぼ中央、周溝縁にそれぞれ1個体分程度の破片を検出した。床面よりもやや浮いた状況であった。

備考：第10号住居と第4、5平地式住居と切り合う。本住居がこれらの遺構を切っている。

第17号竪穴住居（SB29）（第20図）

位置：H～J, 17・18グリッド

検出：住居の北側の部分を除いて平面プランは比較的容易に確認できた。

形態：7×10mの隅丸長方形。周溝は南壁のはば中央を除いて巡っている。西壁周溝内に小さなピットがほぼ等間隔に並ぶ。

排水溝：北壁の中央やや東よりに排水溝が確認されている。周溝よりトンネルを経て、外部の排水溝に連なる。

柱穴の配置：主柱穴が6本検出され、六角形に配置されている。

炉：住居のはば中央に直径約80cm、深さ約30cmの皿状の土坑が検出された。覆土内に焼土が確認されたが、土坑の壁は被熱された痕跡は認められなかった。

また、南壁の中央、壁より約60cm離れた位置に直径約30cm程のピットが二つ、並行して検出された。

二つのピットの間に小さなピットが位置している。

遺物出土状況：遺物出土は少なかったが、北壁中央西よりの壁際に2個体の壺型土器が口縁部を下に床面におかれたように検出された。

備考：本住居では南壁中央付近の並列した二つのピット、北壁中央やや西側の並列した逆位の壺と排水溝が検出されている。

仮に、並列する南壁中央付近のピットが入り口の施設と関連するとすれば、逆位の壺の出土はその傍証とはなりえないであろうか。

第18A・B号竪穴住居（SB45）（第20図）

位置：H・I, 2グリッド。

検出：黒色土柱に掘りこまれているため、周溝のみが検出された。

平面形態：隅丸長方形と推測する。

備考：拡張された住居と考える。

第19号竪穴住居（SB37）（第21図）

位置：I～K, 5・6グリッド。

検出：検出面でのプラン確認は不明瞭であったが、

掘り込が深く、壁の立ち上がりをおうことで、検出した。

平面形態：6.4×4.5mの隅丸長方形。

排水溝：北東隅に排水溝が確認された。一部を土壁によって切られているが、直径約20cmほどのトンネルによって外部の排水溝と連続する。

柱穴の配置：主柱穴は4本と考えられるが、主柱穴間にやや僅の小さい柱穴が3箇所に認められる。

第20号竪穴住居（SB21）（第21図）

位置：J・K, 16・17グリッド。

検出：ある程度の面積をもつ落ち込みとして検出され住居と思われたが、検出は難しかった。確認された平面プランから住居と判断したが、周溝のあり方など、不明瞭な部分がある。

平面形態：4.4×4mの方形にちかい隅丸長方形。周溝は3/4程めぐる。南東壁側は確認できなかった。

柱穴の配置：柱穴は確認されたが、どれが主柱穴となるか不明。

第21号竪穴住居（SX36）（第22図）

位置：E, 25・26グリッド。G, 23～26グリッド。

F, 24～26グリッド。H, 24・25グリッド。

検出：検出当初、落ち込みとして確認された際には、その面積が大きく、輪郭が不明瞭なことなどから自然の窪地と考えられたが、一部直線的な部分もあり、性格不明造構として調査を開始した。取り敢えず、造構の床面まで掘り下げ、壁の立ち上がりに注意しながら掘り広げたところ、壁が急角度に立ち上がり、ほぼ隅丸長方形の平面プランを呈することが明らかになった。また一部分的には周溝も確認できた。

平面形態：10×7mを計測する大型の隅丸長方形。北壁と西壁に部分的に周溝が確認されている。床面精査の際に削りすぎたのかもしれない。

排水溝：北東隅に排水溝が検出された。トンネルを介して排水溝に接続したかどうかは確認できなかつた。

柱穴の配置：6本の主柱穴が検出され、六角形に配置されている。

第22号竪穴住居（SB32）（第23図）

位置：D～F, 26～28グリッド。

検出：明瞭な落ち込みえあったが、大きいことから、二つ以上の住居の切り合いと考えた。しかし、実際に調査を行うと、周溝がめぐり、壁の立ち上がりも明瞭であり、大型の住居であることが明らかになった。

T度調査区の外れにあり、雨水切りのトレンチにかかるなどし、全体を調査していない。

平面形態：(10) × 6 mを計測する隅丸長方形。

柱穴の配置：4本の主柱穴が検出されているが、本来は六本柱のものと思われる。

(2) 挖建柱建物

第1号掘建柱建物（SB16）（第24図）

位置：P, 6・7グリッド。

規模：1×3間、280×320cm。

柱間：160、180、280cmの三者がある。

方向：長軸の方向は東西である。

柱穴：径約60cm、深さ約50cm前後あり、しっかりとしている。

第2号掘建柱建物（SB17）（第24図）

位置：P・Q, 6・7グリッド。

規模：1×4間、240×400cm。

柱間：横（長軸）方向の柱間の距離は120～140cmを計測するが、ほぼ等しい。縦方向の柱間は240cmを計測する。

方向：長軸は東西方向

柱穴：径40～60cm、深さ50cmを測り、しっかりとしている。

第3号掘建柱建物（SB15）（第25図）

位置：O, 6グリッド。

規模：1×3間、220×280cm。

柱間：横方向120と140cm、縦方向220cmを計測する。

方向：長軸は東西方向。

(3) 平地式住居

第1号平地式住居（SD58）（第25図）

位置：N・O, 11～13グリッド。

検出状況：溝の掘り込みはしっかりしており、その全形を検出できた。西側部分にA類の土坑が切り合った。新旧関係は明確ではなかったが、土坑が新しいと思われる。

平面形態：長軸約8.4m、短軸約7mの長円形。

溝：全周囲をめぐる、溝幅約60cm、深さ約30cm。

備考：全周する溝の内側に、この遺構に関連すると思われる柱穴や炉跡は確認できなかった。

第2号平地式住居（SD154）（第25図）

位置：H・I, 19・20グリッド。J, 18～20グリッド。

検出状況：第3号平地式住居と一部切り合いをもつが、新旧関係は確認できなかった。検出面での溝の確認は色調が薄く難しかったが、ほぼ全形を確認した。

平面形態：長軸約7m、短軸約6.4mを測る長円形であるが、北側部分は不整形である。

溝：全周を巡るがやや不明瞭な壁の立ち上がりは不明瞭な部分があった。おそらく、遺構の掘りこみ面のレベルが上位にあり、検出したのは溝底にちかいためであろう。溝幅約40cm、深さ約30cm。

備考：溝で区画されている内部を精査したが、確實に伴うと思われる柱穴や炉は確認できなかった。

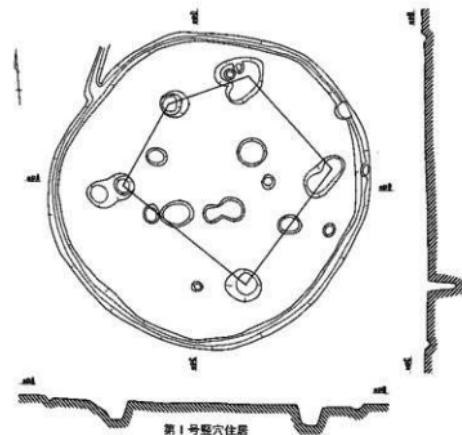
第3号平地式住居（SD155）（第25図）

位置：H, 19・20グリッド。I, 21グリッド。

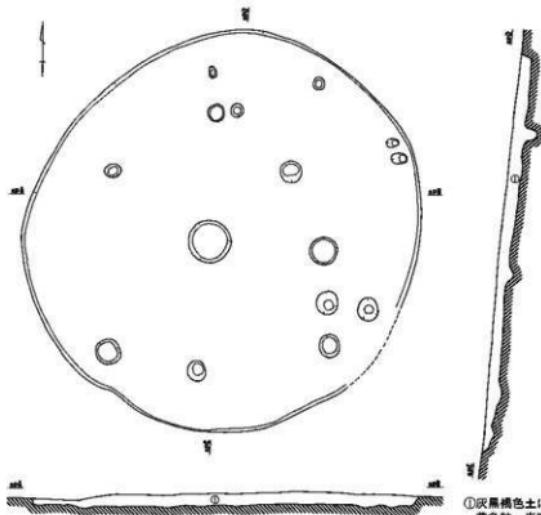
J, 18～21グリッド。

検出状況：第2号平地式住居の外側を巡るように検出された。第2号平地式住居と同様に検出は難しく、溝の一部は検出できなかった。

平面形態：長軸約10m、短軸約8mを計測する長円

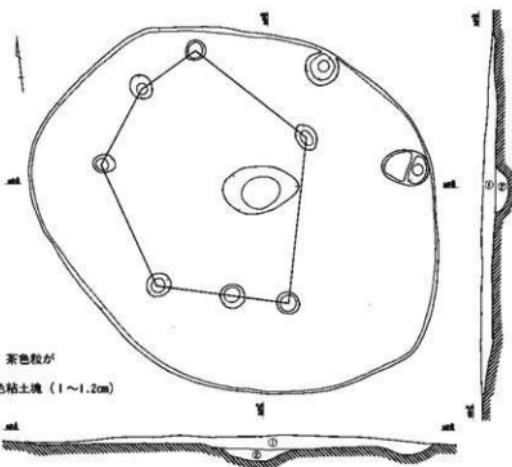
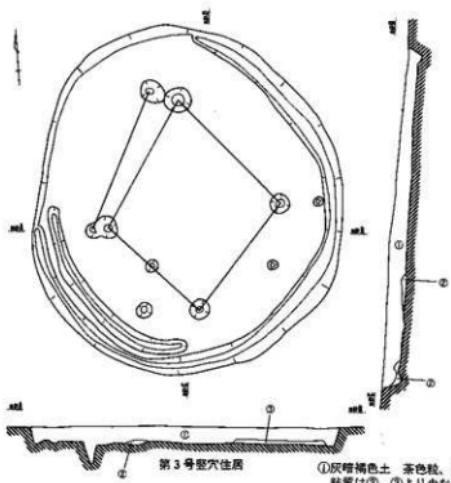


第1号竪穴住居

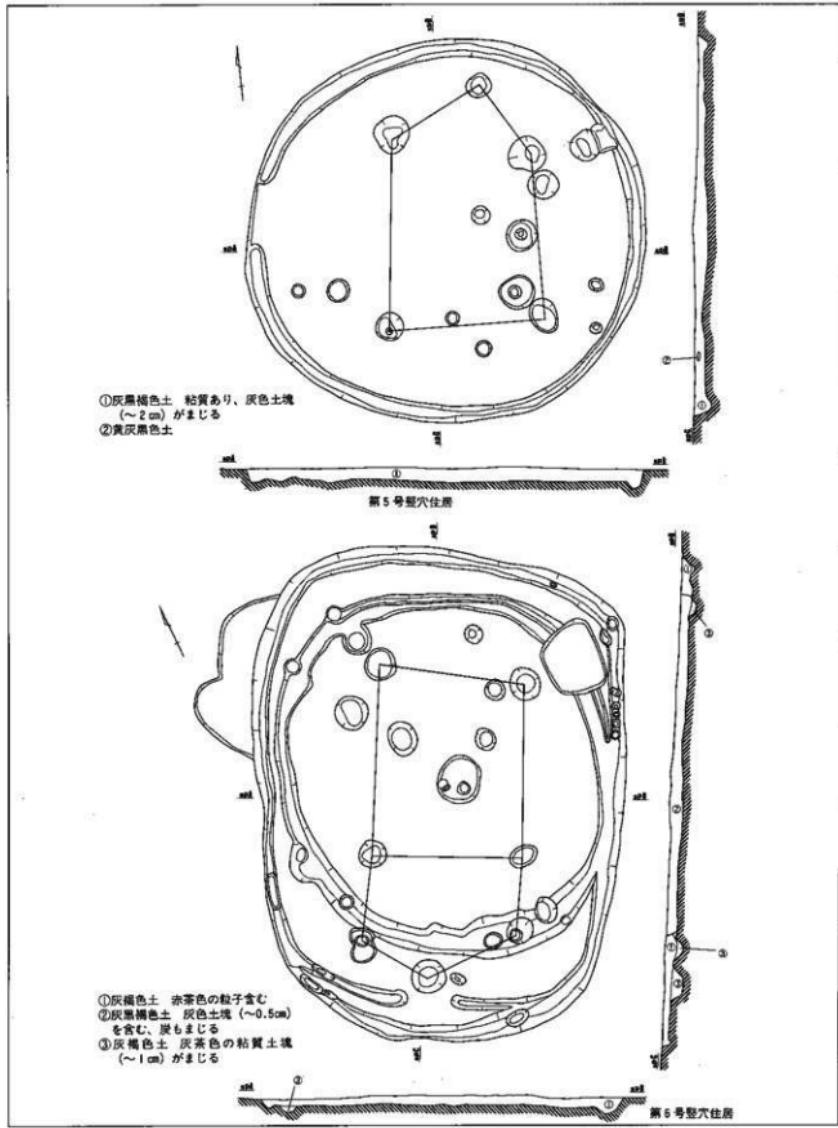


◎灰褐色土に灰色土壤(～1cm)
黄色粒、炭粒が混合

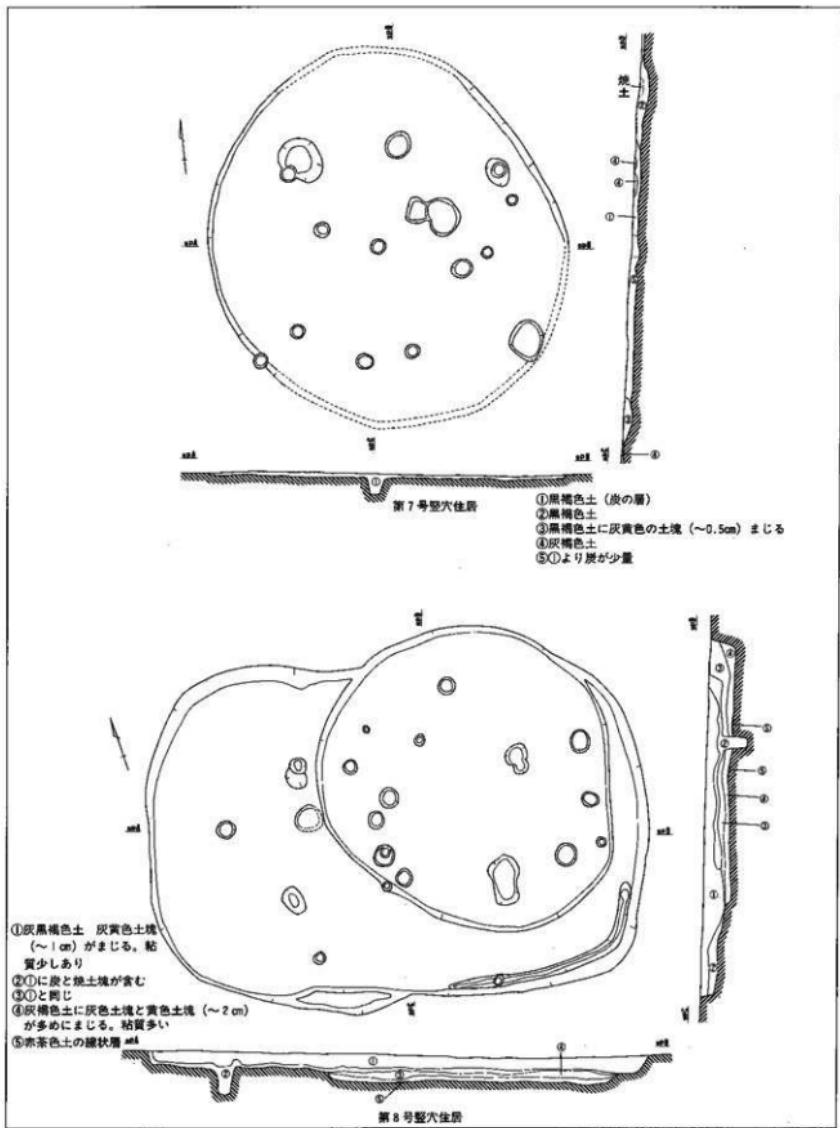
第12図 第1号、第2号竪穴住居



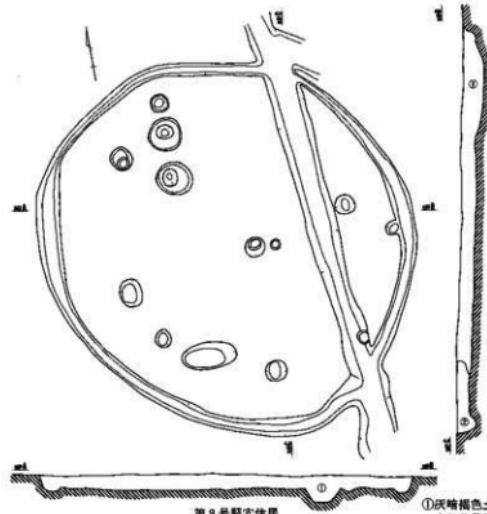
第13図 第3号、第4号整穴住居



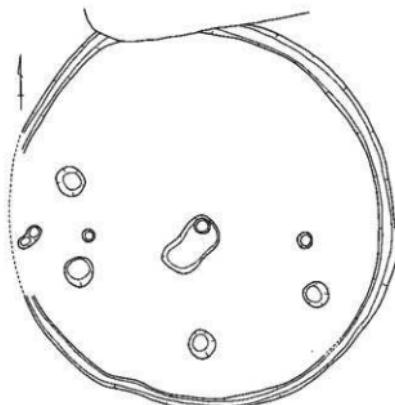
第14図 第5号、第6号竪穴住居



第15図 第7号、第8号竪穴住居

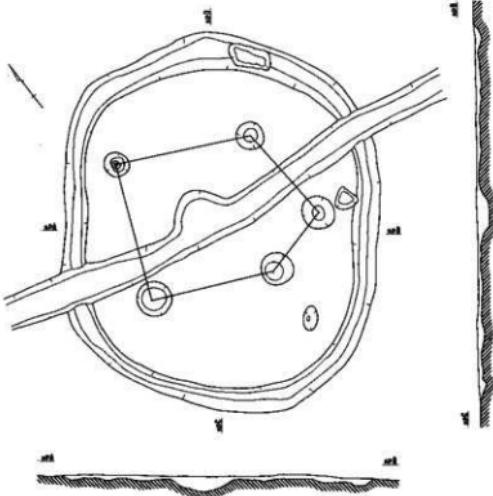


- ①床地褐色土、茶色粒子（～0.5mm）が
まじる黄灰色の粘土塊がまじる
- ②①より黄色土塊が多目に含む

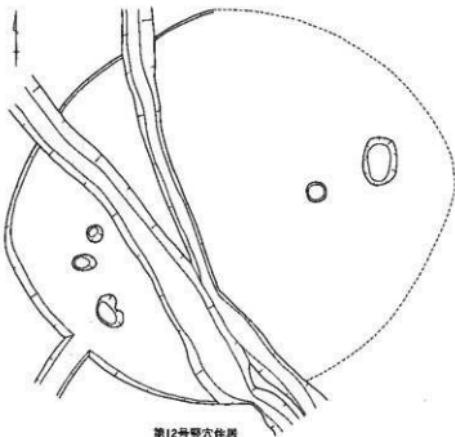


第10号竪穴住居

第16図 第9号、第10号竪穴住居

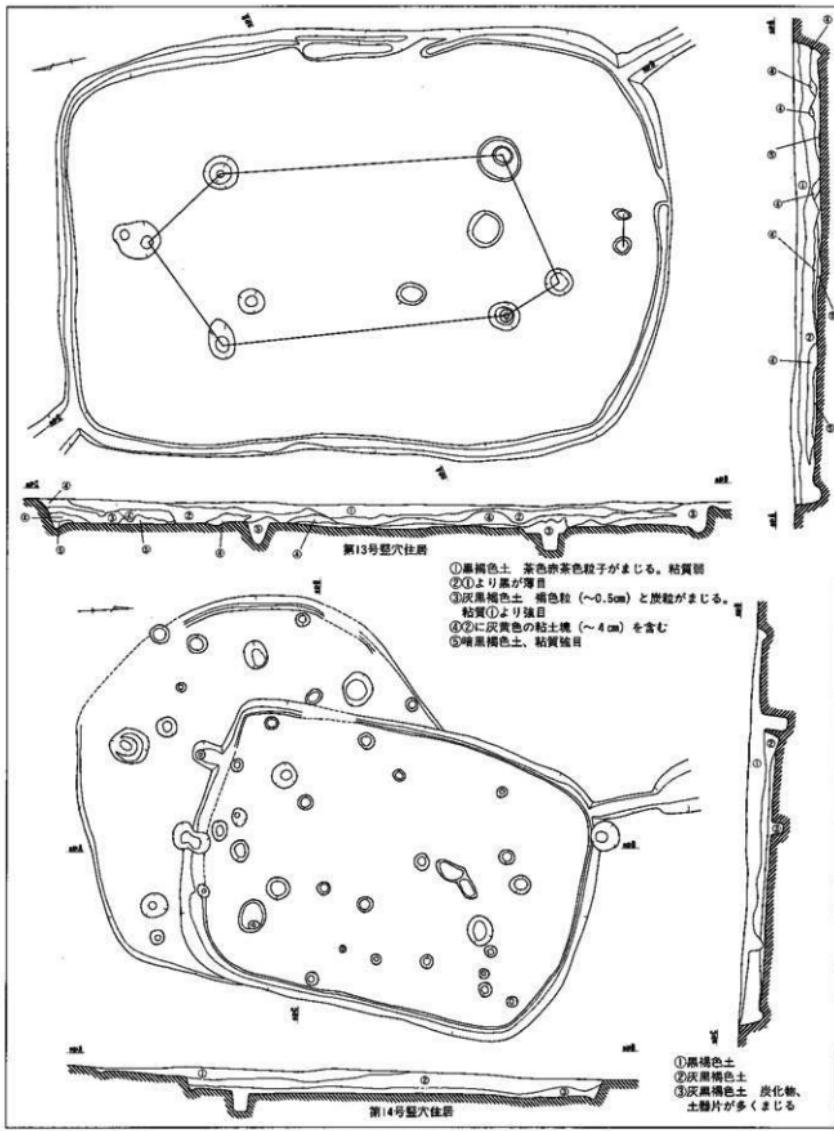


第11号空穴住居

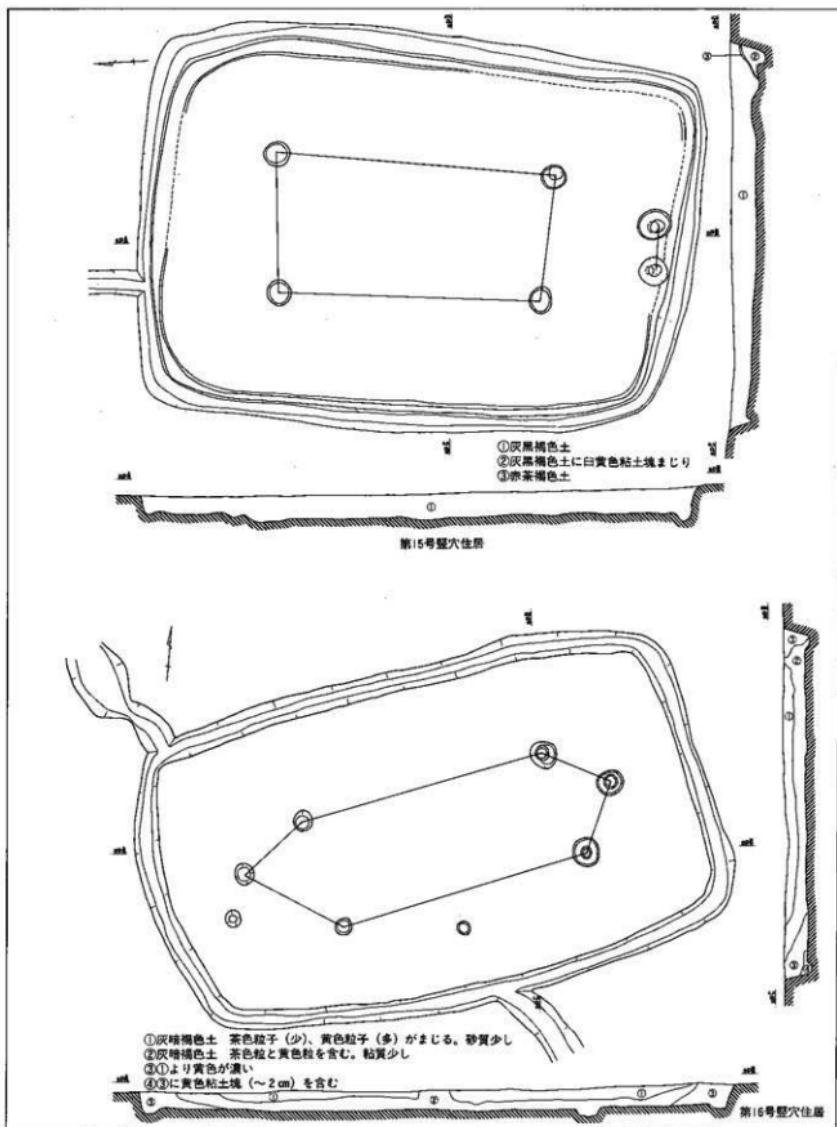


第12号空穴住居

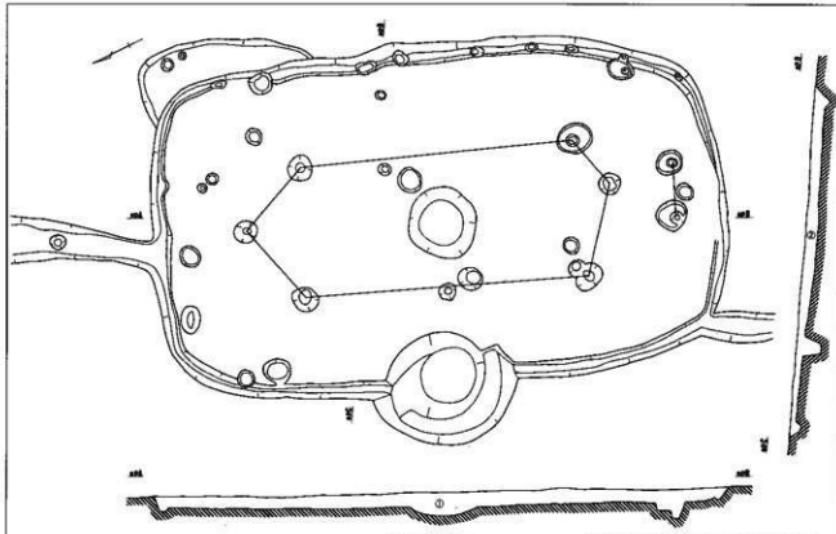
第17圖 第11號、第12號空穴住居



第18圖 第13号、第14号竪穴住居

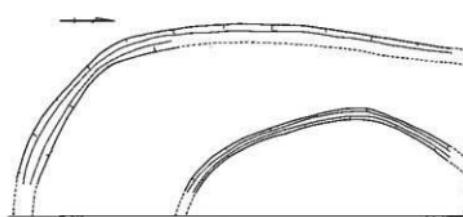


第19図 第15号、第16号竪穴住居



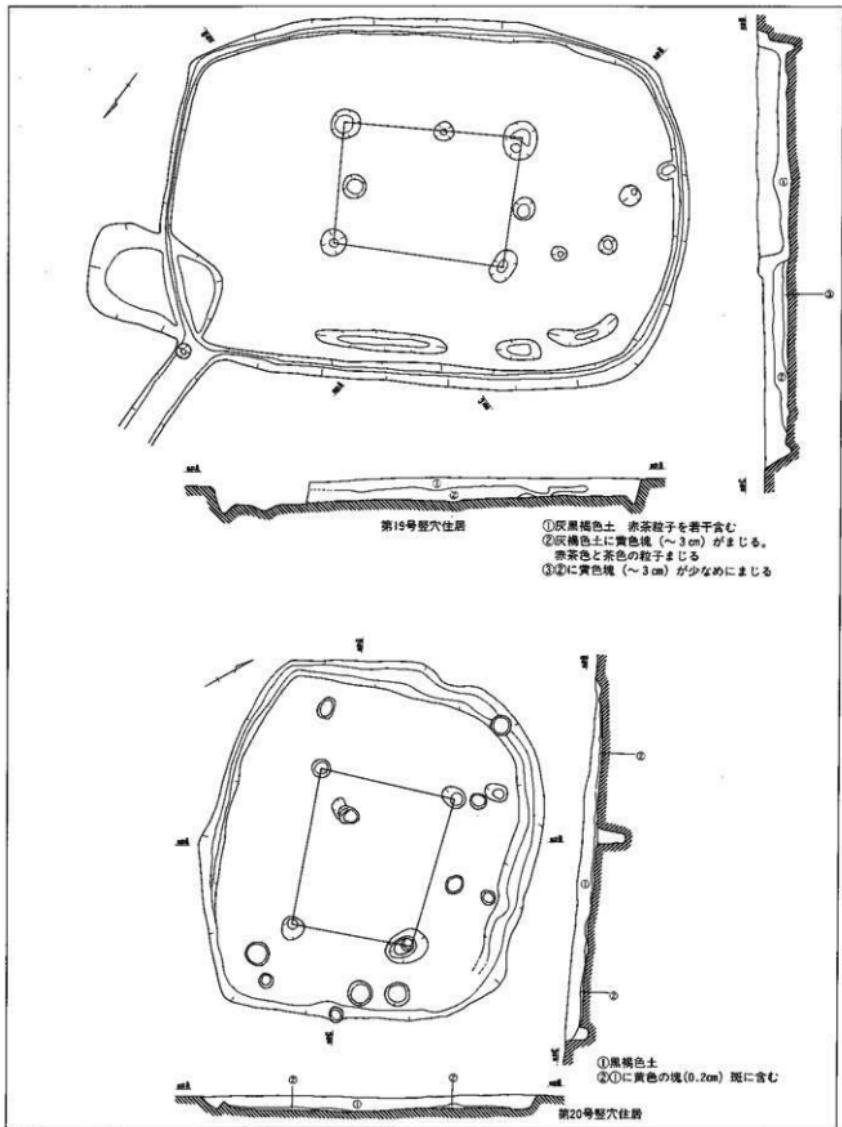
第17号竪穴住居

①灰黒褐色土に赤茶色の粒子が多少まじる。

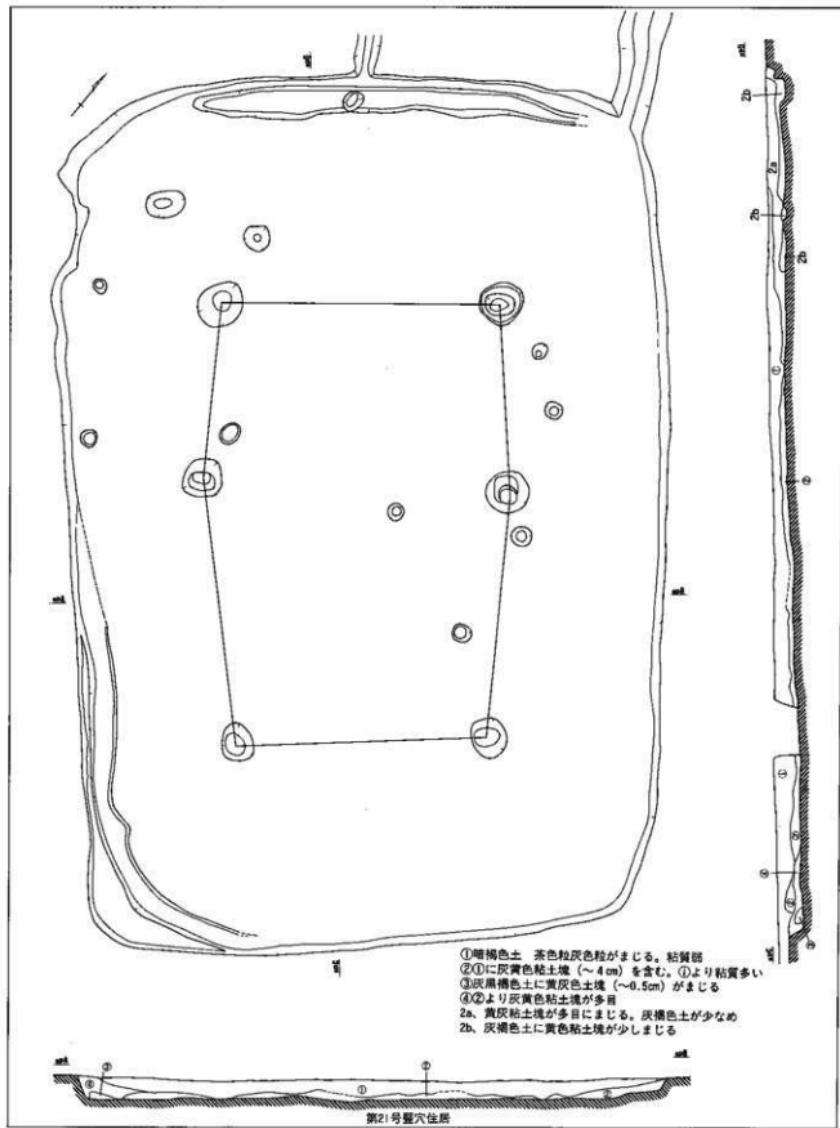


第18号竪穴住居

第20図 第17号、第18号竪穴住居

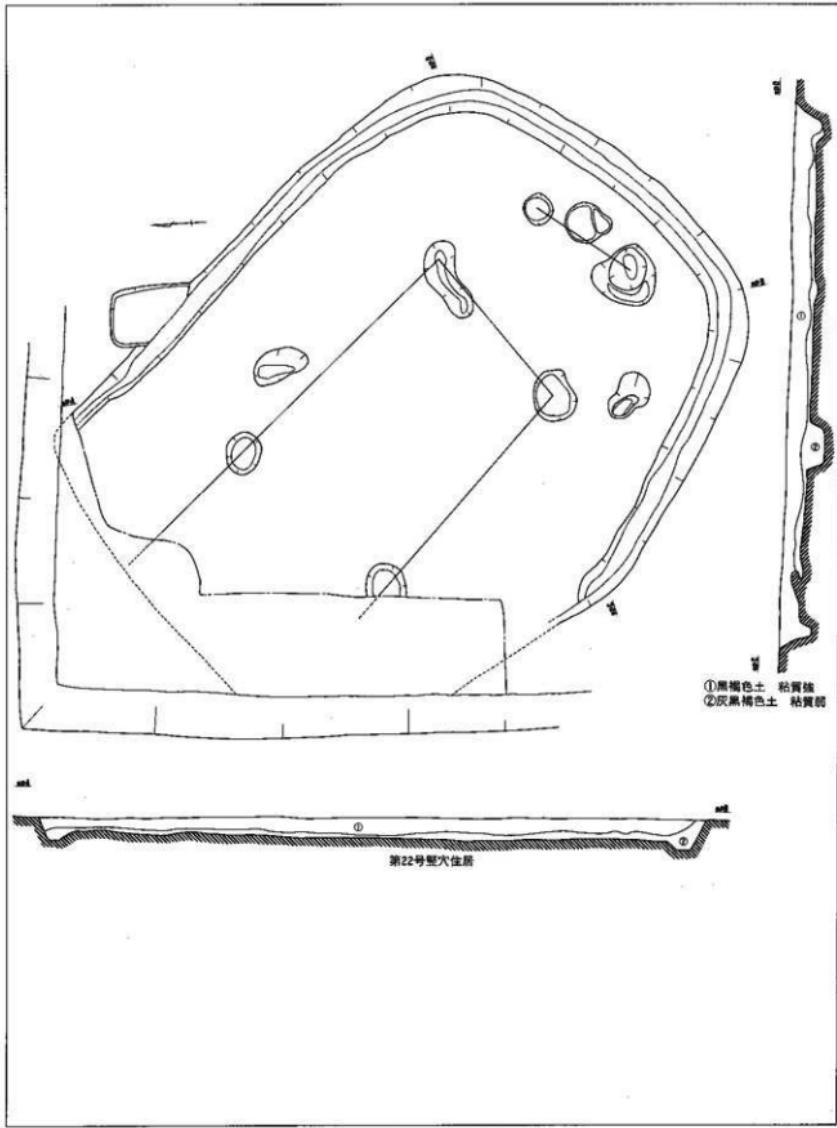


第21図 第19号、第20号竪穴住居

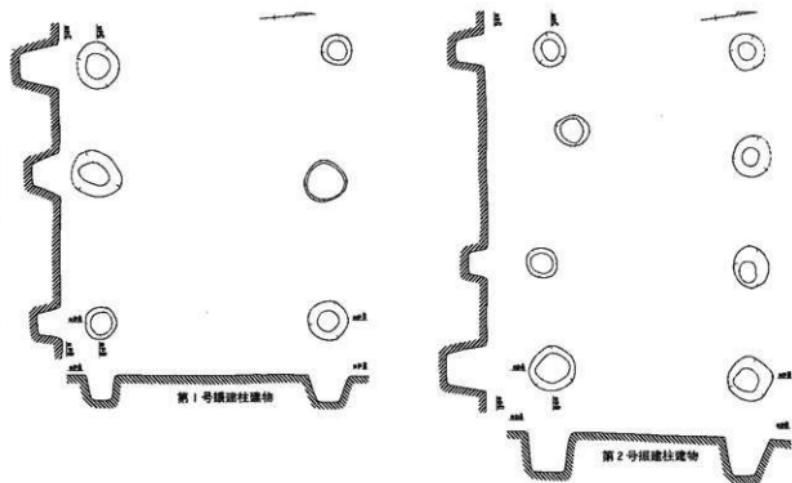
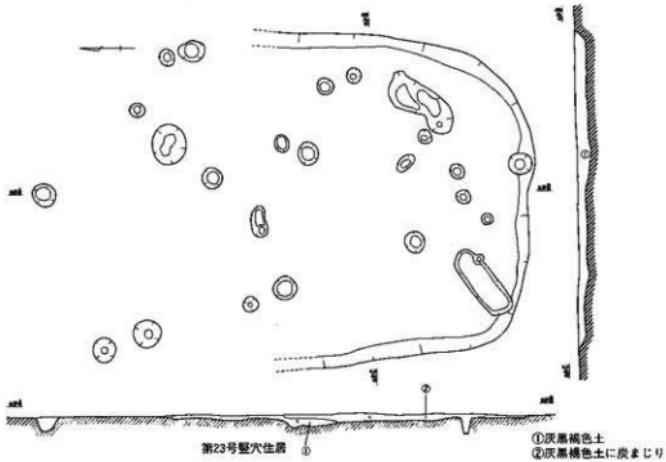


第21号竪穴住居

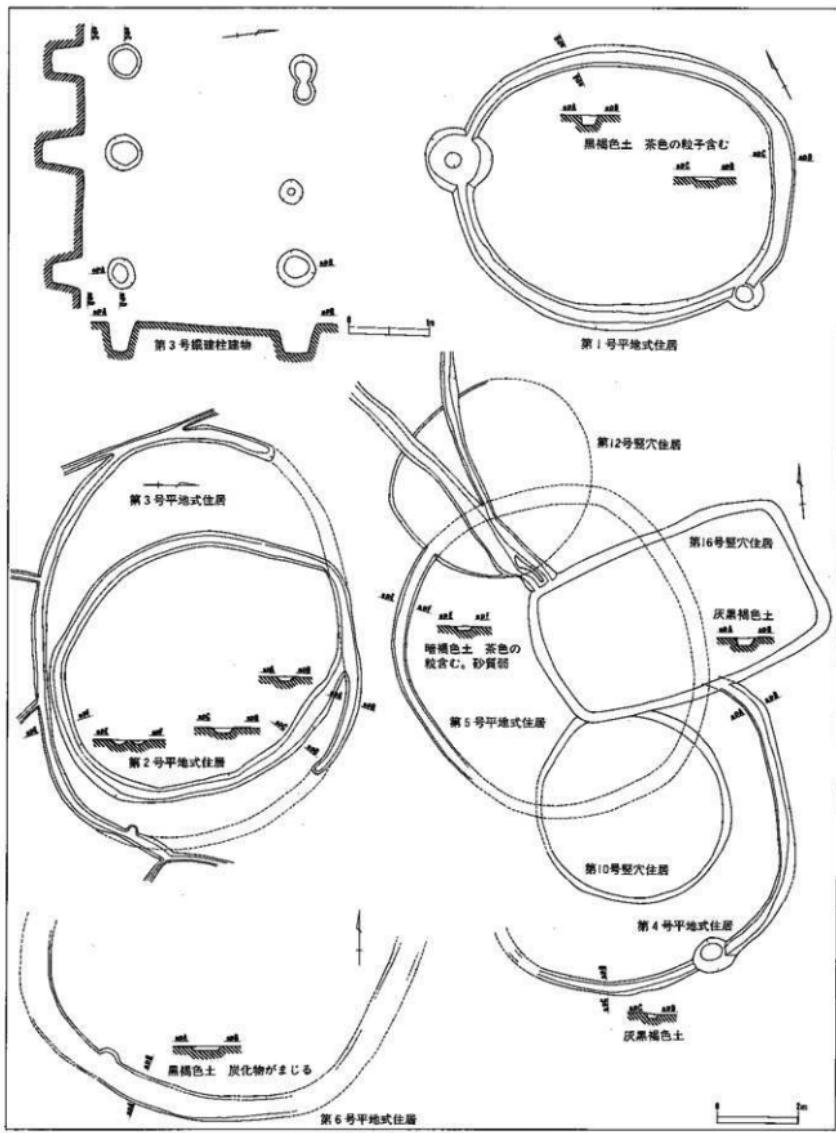
第22図 第21号竪穴住居



第23図 第22号堅穴住居



第24図 第23号竪穴住居、第1号、第2号竪穴建物



第25図 第3号掘建柱建物、平地式住居

形。

溝：溝幅約40cm、深さ約30cmを計測する。

備考：溝の検出に注意をはらったが全周するように検出できなかった。

第4号平地式住居 (SD181) (第25図)

位置：J・K、2グリッド。L、2~4グリッド。

検出状況：ほぼ1/2を検出したにとどまる。第10号竪穴住居の周囲を取り囲むように検出され、第16号竪穴住居と切り会う。第16号竪穴住居が本遺構を切っていると考える。

平面形態：長軸約8m、短軸約7.2mの長円形を呈すると考えられる

溝：溝幅約20~40cm、深さ約20cmを計測する。

第5号平地式住居 (SD183) (第25図)

位置：J・K、4グリッド。

検出状況：確認された湾曲する溝から推測した。第5号竪穴住居、第16号竪穴住居、第12号竪穴住居と切り会うものと考えられるが、検出された部分がわずかであり、確かなことは分かららない。

平面形態：おそらく長円形を呈するものと思われる。

溝：溝幅約20~40cm、深さ約30cmを計測する。

備考：全形を想定した時、今回検出した部分は僅かであり、平地式住居としたが、そうでない可能性も否定できない。

第6号平地式住居 (SD83) (第25図)

位置：N、4・5グリッド。

検出状況：湾曲した溝の一部を検出している。周間にピット群が集中し、断片的に検出したのみである。

平面形態：おそらく、長円形を呈するものと思われる。

溝：溝幅約70cm、深さ約20cmを計測する。

壁の立ち上がりが不鮮明であり、溝の断面形状もやや異なる。

備考：溝の断面形状が他の例と異なることや一部を検出したにとどまり、平地式住居でない可能性もある。

第2節 土 坑

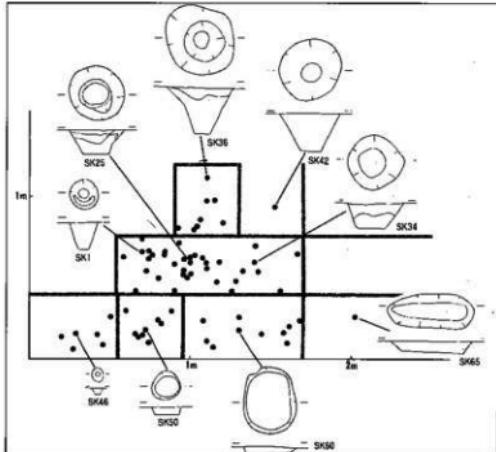
1 形態分類

土坑の形態は大きく、A~E類に分類することができよう。しかし、それは明確なものではなく、中間的な様相を持つものがあり、どちらの類に編入すべきなのか、判断にまようものがあり、厳密な意味での分類とはならない。

A類：土坑の径と深さが約1m前後の円形を呈するものを典型とする。かって、井戸状土坑とよばれたことがある。

この類の土坑は菴林遺跡の集落には比較的普遍的な存在のよう、県埋蔵文化財センターが調査した松原地締、北原地締でも認められている。特に北原地締では掘建柱建物群と相關関係を持つように検出され、注意される。

B類：直径約50cm以下の円形土坑である。柱穴の可能性も否定できない。



第26図 土坑の法量分布

1	A		●	●
	B		●	●
	C		●	●
2	A		●	●
	B		●	●
			●	●
3	A		●	●
	B		●	●
	C		●	●

第27図 A類土坑の土層堆積状況

C類：直径約1m以内の円形土坑で深さが約30cm以下のもの。

D類：約1m以上の大さきで、深さが約30cm以下のもの。円形ないしやや方形の平面プランを有する。

E類：長軸1m以上で長円形を呈する土坑。深さは30cm以下である。

これらの土坑のうち、A類及びE類の一部を除いては掘り込みが浅く、検出が困難であり、土坑と認定するかどうか判断に迷うものが多い。しかし、C類の形態をした第47号土坑のように土器が設置されている例、E類に属する土坑のように、木棺墓と推定される例があるが、断定できないため、ここでは土坑として記載しておく。

2 A類土坑の土層堆積状況

類は本調査区を特徴づける土坑である。井戸状土坑とよばれた類のもである。その覆土の堆積状況は次のように類型化化することができる。

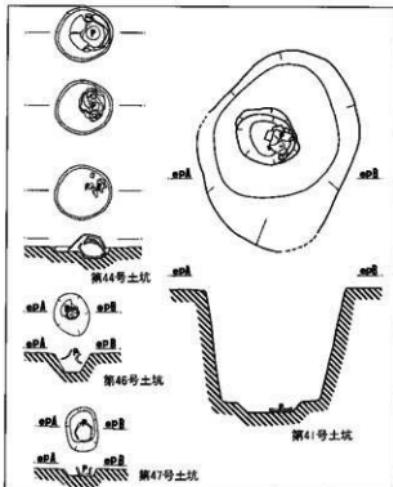
1類：覆土が単層のもの。住居などの覆土と同様な黒色の埋土（A）と基盤となる粘土層をブロック状に含むものを埋土（B）とするもの、薄い上層が分層されるが大半は単層のもの（C）とに細分できる。

第2類：覆土が大きく上下に二分されるもの。下層にやや黒味の強い覆土を有するもの（A類）と基盤層をブロック状に含む埋土が認められるもの（B類）に細分することができる。

第3類：覆土が大きく三層に分層できるもの。中間の土層に特徴がある。灰や焼土を炭化物を含む層が互層に堆積しているもの（A類）、基盤層のブロックを含む土層のもの（B類）、前二者が認められるものの（C類）に細分することができる。

1類に相当するものが13例、2類に相当するものが5例、3類に相当するものが、12例ある。

こうした埋土の堆積はこの土坑が廃棄あるいはそ



第28図 土器が埋設された土坑

の用途を失ったとき、開口した状態で放置されなかつたことを示していよう。故意に埋め戻された可能性が考えられよう。埋め戻しが土坑の機能に關係する事柄なのか、廃棄に關係する事柄なのかは明らかにすることはできなかった。

覆土内には土器片も大量に含まれている。また、3類の堆積には灰や焼土、炭化物層が認められる。さらに、2類に分類される第19号土坑では土坑底に焼成あるいは第二次焼成を受けて大きく変形した栗林式土器がつめこまれたように大量に堆積していた。

これらの土坑には何らかの目的の火の使用との関連性が強く認められると考えている。

3 A類土坑の分布

A類土坑は弥生時代中期後半栗林期のものである。その分布はかなり広いものの、調査区のはば中央、溝の集中する部分に集中して分布する傾向がある。全体には溝の方向と同じ方向に幅約20から40m幅でベルト状の分布を見せる。

小群に細分できると思われる部分もあるが、明瞭ではない。

4 土器が埋設された土坑

数は少ないが、土器の埋設された土坑がある。敢えて、B類・C類とした土坑は掘り込みが浅く、極端にその径が小さかったり、ある意味で壁の立ち上がりも不明瞭なものあり、造構として積極的に認定できないというのが調査時の所見である。

しかし、一方では第28図に図示したように、土器が埋設された土坑がある。第44号土坑、第46号土坑はB類に分類した土坑であるが、第46号土坑には大型破片が埋設されているし、第44号土坑では大きな底部破片と完形の變形土器が出土している。

先述したようにB類、C類あるいはD類に分類した土坑については積極的に造構と認定することはできないと考えていた。僅かではあるがこうした事例が存在することから土坑としておく。また、B類についても住居あるいは掘建柱建物の柱の可能性

もある。

また、A類土坑には坑底に浅い小土坑を伴うものがある。ここに図示したSK174は小土坑内に土器片が集中していた。埋設したものか、堆積過程で偶然生じたものは明らかではない。

5 各 説

(1) A類

第1号土坑 (SK172) (第29図)

位置：M, 10・11グリッド。

平面形態：径約70cmの円形。

断面形態：深さ約60cmを測るすり鉢状。

覆土：1-A類。

遺物出土状況：土坑底部からやや浮いて遺物の集中する部分が認められた。

第2号土坑 (SK78) (第29図)

位置：R, 4グリッド。

平面形態：直径約96cmの円形。

断面形態：深さ約72cmを測るすり鉢状。

覆土：3-A類で、2層は灰、炭化物、黒色の強い土壌から構成され、自然堆積とは考えにくい。

遺物出土状況：遺物は上層（1層）中に多く見られ、それより下位の層には少ない。

第3号土坑 (SK242) (第29図)

位置：L, 2・3グリッド。

平面形態：直径約96cmの円形。

断面形態：深さ約64cm、上半分はすり鉢状、下半部は筒状を呈する。

第4号土坑 (SK136) (第29図)

位置：O, 8グリッド。

平面形態：直径約98cmの円形。

断面形態：深さ約54cmのすり鉢状。

遺物出土状況：覆土中より出土したが量は少ない。

備考：セクション図を作成できなかったが、3-B類のものであった。

程まで遺物が含まれ、それより下位は希であった。

第5号土坑（SK49）（第29図）

位置：L・M, 16・17グリッド。

平面形態：直径約115cmの円形。

断面形態：深さ約87cmのすり鉢状。

遺物出土状況：遺物は2層の中程まで見られ、レンズ状の堆積をしていた。2層の中位に土器1個体分の破片が集中していた。これより下位には土器片は含まれなかつた。

第6号土坑（SK89）（第29図）

位置：N・O, 10・11グリッド。

平面形態：直径約80cmの円形。

断面形態：深さ約50cmの筒状。

覆土：3層に細分されるが、大局的に見れば2-A類に相当すると考えられる。

第7号土坑（SK171）（第29図）

位置：M, 10グリッド。

平面形態：直径約80cmの円形。

断面形態：深さ約66cmのすり鉢状を呈し、土坑底面に径約50cmの円形に掘り下げられている。

覆土：薄くブロック状に2層が認められるが原則的には単層と考えられ、覆土地盤は1-A類に相当する。

遺物出土状況：遺物は検出されず、礫が1点出土下のみであった。

備考：遺物が検出されていないため、時期が明らかではないが、検出面や形状から弥生期のものと判断した。

第8号土坑（SK46）（第29図）

位置：M, 18・19グリッド。

平面形態：直径約100cmの円形。

断面形態：深さ約73cmのすり鉢状。

覆土：2層に分割される。1層下部（1-b）は炭化粒子を大量に含み、3-B類に相当する。

遺物出土状況：主に土坑の中心部、1から2層の中

第9号土坑（SK82）（第29図）

位置：S, 1・2グリッド。

平面形態：直径約100cmの円形。

断面形態：深さ約78cmのすり鉢状。

第10号土坑（SK141）（第29図）

位置：P, 8グリッド。

平面形態：直径約100cmの円形。

断面形態：深さ約53cmのすり鉢状。

遺物出土状況：遺物は1から3層に集中し、4層は希であった。

第11号土坑（SK73）（第29図）

位置：O・P, 4・5グリッド。

平面形態：直径約110cm、深さ約64cmの円形を呈する部分と、長軸約200、短軸約110cm、深さ約8cmの長円形の部分からなる。

断面形態：円形部は深さ約64cmのすり鉢状を呈し、長円部は深さ約8cmの平坦な底部となる。

遺物出土状況：遺物は2及び3層に集中する。

第12号土坑（SK195）（第29図）

位置：L, 11グリッド。

平面形態：直径約110cmの円形を呈す。

断面形態：深さ約60cmのすり鉢状。

覆土：複雑に分層されるが、これは埋め戻されたためではないかと考える。

遺物出土状況：遺物は出土しなかった。

備考：住居と思われる遺構（SX28）の床面下位より検出した。

第13号土坑（SK22）（第29図）

位置：X, 7グリッド。

平面形態：直径約90cmの円形を呈す。

断面形態：深さ約66cmの筒状。

覆土：上下2層に分層でき、下層は粘土層であった。

遺物出土状況：土器片が底部に積み重なるように堆積していた。注目すべきことに、この土坑から出土した土器片は表面が発泡するほど強く加熱されると同時に著しく変形していた。変形は極端で焼成時の変形とは考えられず、焼成以前に変形された土器が強く加熱されたのではないかと考える。

備考：本例は特徴的な例で、下層の粘土層や土器は人為的に埋められたものと考えられ、A類とした土坑の用途を考えるうえで重要なと考える。

第14号土坑（SK190）（第29図）

位置：P, 2 グリッド。
平面形態：直径約70cmの円形を呈す。
断面形態：深さ約60cmのすり鉢状。底部径が小さく、他の例とやや印象が異なる。
遺物出土状況：覆土中から土器片が4片検出されたのみであった。
備考：規模も小さく、断面形状も他の例と異なる。A類の範疇から逸脱しているかもしれない。

第15号土坑（SK189）（第29図）

位置：P, 2 グリッド。
平面形態：直径約75cmの円形。
断面形態：深さ約54cmのすり鉢状。
遺物出土状況：覆土に数点の土器が含まれていたのみである。

第16号土坑（SK53）（第30図）

位置：M, 15 グリッド。
平面形態：直径約110cmの円形を呈す。
断面形態：深さ約66cmのすり鉢状。
遺物出土状況：遺物の出土は少なく、上層と底部にわずかに見られた程度である。
備考：覆土の土層図を実測しなかったが、3層に細分され、中層は基盤となっている白色粘土のブロックを含む土層で、3-B類の堆積である。

第17号土坑（SK147）（第30図）

位置：V・W, 10 グリッド。
平面形態：直径約100cmの円形。
断面形態：深さ約60cmのすり鉢状を呈す。
覆土：4層に分割される。1～3層は黄色味が強く、4層は黒色味が強い。おそらく、埋め戻されたのではないかと思われる。
遺物出土状況：1層と2・3層の上面に土器が集中して検出された。4層に含まれる土器片は僅かであるが、拳大の礫が目立った。

第18号土坑（SK223）（第30図）

位置：K, 19・20 グリッド。
平面形態：直径約78cmの円形。
断面形態：深さ約65cmのすり鉢状を呈す。
遺物出土状況：覆土中からわずかに土器片が検出されたのみである。

第19号土坑（SK20）（第30図）

位置：T, 13 グリッド。
平面形態：直径約100cmの円形。
断面形態：深さ約80cmのすり鉢状。
覆土：上、中、下層に細分され、上層は粘土ブロックを大量に含む土層、中層は薄いが粘土層で全面に広がり、下層は黒色土層となっている。中層の粘土層は土坑底と思ったほどであり、土坑に粘土で蓋をしたかのようである。3-B類。
遺物出土状況：遺物の出土量は少ない。

第20号土坑（SK220）（第30図）

位置：H・I, 21 グリッド。
平面形態：直径約100cmの円形。
断面形態：深さ約60cmのすり鉢状。
覆土：3層に分類される。中層の2層には粘土ブロックが含まれ、3-B類に相当する。
遺物出土状況：上層に多く含まれていた。

第21号土坑（SK155）（第30図）

位置：N, 9グリッド。

平面形態：直径約100cmの円形。

断面形態：深さ約50cmのすり鉢状。

覆土：粘土ブロックを含む单層であり、1-B類である。

遺物出土状況：わずかに出土した。

備考：埋め戻されたという印象が強い土層堆積であった。

第22号土坑（SK25）（第30図）

位置：M・N, 20グリッド。

平面形態：直径約110cmの円形。

断面形態：深さ約85cmのすり鉢状を呈す。

覆土：3層に区分される。中層である3層は炭化粒子を含む黒色味の強い土層、灰層などの互層からなり、3-A類に相当する。

遺物出土状況：3層上面、土坑底部に集中する傾向があった。

備考：3層は炭化粒子や灰層からなり、焚き火で生じた灰や燃え残りと思える。

第23号土坑（SK212）（第30図）

位置：J, 14グリッド。

平面形態：直径約100cmの円形。

断面形態：深さ約60cmの筒状。

覆土：ブロック状に細分されるが单層であると考えられ、1-B類である。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

第24号土坑（SK169）（第30図）

位置：M, 11・12グリッド。

平面形態：直径約60cmの円形。

断面形態：深さ約85cmのすり鉢状を呈し、土坑底がさらに円形に掘りこまれ、坑底が二段になっている。覆土：3層に分層され、中層の2層は黄色味の強い土層であり、3-B類である。

遺物出土状況：土器は1層下部に集中しており、2

層以下からの遺物の出土は少ない。

坑底に埋めこまれるように拳大の礫が検出された。

第25号土坑（SK27）（第30図）

位置：M・N, 24グリッド。

平面形態：直径約135cmの円形。

断面形態：深さ約60cmのすり鉢状。

覆土：3層に分層された。2層は粘土層と黒色土層の互層から構成され、3-B類に分類される。

遺物出土状況：土器片は大きめで、3層上面に集中していた。

備考：平安時代の土坑と切り合う。

第26号土坑（SK77）（第30図）

位置：Q, 5グリッド。

平面形態：直径約120cmの円形を呈す。

断面形態：深さ約100cmのすり鉢状。

覆土：粘土ブロックを含む黒褐色土の单層で1-B類に分類される。

遺物出土状況：覆土全体から出土している。

第27号土坑（SK64）（第30図）

位置：O, 3・4グリッド。

平面形態：直径約100cmの円形。

断面形態：深さ約60cmのすり鉢状。

覆土：2層に分割できるが、1-A類に分類される。

第28号土坑（SK45）（第30図）

位置：M, 18グリッド。

平面形態：直径約120cmの円形。

断面形態：深さ約65cmのすり鉢状。

覆土：薄い1層と覆土の大半を占める2層に分層され、1-C類に分類される。

遺物出土状況：遺物は覆土全体から出土した。土坑底部から20cm程浮いて人頭大の礫が検出されている。

備考：SD57と切り合い関係の観察から、溝より新しいことを確認した。

第29号土坑（SK80）（第30図）

位置：Q， 2グリッド。

平面形態：直径約110cmの円形。

断面形態：深さ約65cmのすり鉢状。

遺物出土状況：土坑底に1個体にちかい土器が1点出土した。

第30号土坑（SK99）（第31図）

位置：L， 16グリッド。

平面形態：直径約120cmの円形。

断面形態：深さ約60cmのすり鉢状。

覆土：3層に区分され、中層の2層は粘土ブロックを含む。やや変則的だが3-B類に分類する。

遺物出土状況：1層と土坑底部に遺物が集中していた。

第31号土坑（SK175）（第31図）

位置：L， 14グリッド。

平面形態：直径約110cmの円形。

断面形態：深さ約75cmのすり鉢状。

覆土：単層で1-A類に分類する。

遺物出土状況：無頬壺1個体が覆土中程から出土した。

第32号土坑（SK167）（第31図）

位置：P， 13グリッド。

平面形態：直径約120cmの円形。

断面形態：深さ約40cmのすり鉢状。

覆土：3層に細分できた。大きく1層と2、3層の上下2層に分割でき、上層には炭化粒子を含む。一方、下層は粘土ブロックが混入する。2-B類に分類できよう。

遺物出土状況：特に集中する箇所はなく、覆土全体から出土している。

備考：別の土坑と切り合う。

第33号土坑（SK5）（第31図）

位置：M・N， 17グリッド。

平面形態：直径約120cmの円形。

断面形態：深さ約50cmのすり鉢状。

覆土：単層で1-A類に分類される。

第34号土坑（SK50）（第31図）

位置：L， 15・16グリッド。

平面形態：直径約140cmの円形。

断面形態：深さ約60cmのすり鉢状。

覆土：上下2層に分層され、下層には炭、焼土塊が含まれる。2-A類に分類される。

遺物出土状況：特に集中することなく、覆土全体から出土した。

第35号土坑（SK11）（第31図）

位置：V， 5グリッド。

平面形態：直径約160cmの円形。

断面形態：深さ約70cmのすり鉢状。

覆土：4層に細分されるが、1層と2から4層に二大別され、1-C類に分類されようか。

遺物出土状況：2層下面にわずかに含まれる。

第36号土坑（SK36）（第31図）

位置：L， 23・24グリッド。

平面形態：直径約160cmの円形を呈しているが、土坑上半部は調査時の雨水により崩落している。

断面形態：深さ約70cmのすり鉢状。

覆土：上下2層に分層できるが、上層は薄い。1-C類に分類できる。

遺物出土状況：覆土全体から出土したが、土坑底近くからは人頭大の礫が数点含まれていた。

第37号土坑（SK48）（第31図）

位置：M， 17グリッド。

平面形態：直径約160cmの円形、土坑底の不整形は木根によって擾乱されたため。

断面形態：深さ約55cmのすり鉢状。

覆土：5層に細分したが、1層、2・3層、4・5層の3層に大別できる。中層には炭化粒子や焼土が

含まれ、3-A類に分類できる。

遺物出土状況：土坑底部からやや浮いて、人頭大の礫や偏平な礫が検出されている。

第38号土坑（SK41）（第31図）

位置：N, 16グリッド。

平面形態：直径約120cmの円形。

断面形態：深さ約50cmのすり鉢状。

覆土：5層に細分されるが、1から3層の上層と4・5層の下層と大別され、下層には灰、炭化粒子、粘土ブロックが含まれる。2-A類に分類する。

遺物出土状況：遺物は4層に集中する傾向があった。

第39号土坑（SK63）（第32図）

位置：O, 4グリッド。

平面形態：直径約160cmの円形。

断面形態：深さ約74cmのすり鉢状。

覆土：3層に分層したが、1層と2・3層の二層に大別されよう。2-B類に分類。

遺物出土状況：数は多くないが2層に集中していた。

第40号土坑（SK184）（第32図）

位置：N, 13グリッド。

平面形態：直径約160cmの円形。

断面形態：深さ約90cmのすり鉢状。

覆土：4層に分層した。1層は切り合い関係にある溝状造構の覆土。4層内に薄い焼土層が分布していた。

遺物出土状況：4層の上部に1/2個体相当の壺形土器の破片があり、その周辺に土器刃が集中する傾向にあった。

備考：SD58と切り合い、溝が新しいことが確認された。

第41号土坑（SK174）（第32図）

位置：L・M, 13・14グリッド。

平面形態：直径約160cmの不整円形。土坑底に浅いビット（W28×D26×H 8 cm）が存在する。

断面形態：深さ約100cmのすり鉢状。

覆土：3層に細分できるが、1層と2・3層に二分して考えることができよう。1-C類か。

遺物出土状況：土坑底のビットを覆うように偏平な礫が発見され、その下面から1個体分の土器が潰れた状態で出土した。

第42号土坑（SK28）（第32図）

位置：O・P, 26・27グリッド。

平面形態：直径約150cmの円形。

断面形態：深さ約90cmのすり鉢状。

覆土：単層で1-A類に分類される。

遺物出土状況：上部からは大型破片が出土し、土坑底付近では礫が出土した。

(2) B類

第43号土坑（SK16）（第32図）

位置：V, 8グリッド。

平面形態：直径約50cmの円形を呈す。

断面形態：深さ約15cmのすり鉢状。

備考：遺物は出土しない。

第44号土坑（SK103）（第32図）

位置：U, 4グリッド。

平面形態：直径約95cmの円形を呈し、土坑底には径約45cm、深さ約10cmのビットが検出された。

断面形態：深さ約10cmのすり鉢状。

遺物出土状況：3個体の土器が組み合わされるように設置されていた。土坑底のビットに据えられた壺形土器の底部に、壺形土器の胴下半部が覆うように逆位で被される。重ねあわせた土器の内部には小型の壺形土器が検出された。

第45号土坑（SK15）（第32図）

位置：V, 8・9グリッド。

平面形態：直径約45cmの円形。

断面形態：深さ約15cmのすり鉢状。

備考：遺物は出土していない。

第46号土坑（SK108）（第32図）

位置：S, 4グリッド。

平面形態：直径約70cmの円形を呈す。

断面形態：深さ約30cmのすり鉢状。

備考：遺物は出土していない。

第47号土坑（SK140）（第32図）

位置：Q, 3グリッド。

平面形態：約70×50cmの長円形。

断面形態：深さ約12cm。

遺物出土状況：壺形土器の上半部が逆位に埋設されていた。

第48号土坑（SK39）（第32図）

位置：N・M, 21グリッド。

平面形態：直径約20cmの円形を呈す。

断面形態：深さ約15cmのすり鉢状。

遺物出土状況：覆土中より、完形の壺形土器が1個体正位で出土した。土坑底より5cmほど浮いた状態である。

備考：規模からいっても、いわゆる土坑に分類すべきではないが、記載の都合上土坑の類で説明しておく。住居の廃棄に伴う何らかの行為を残した柱穴と判断している。

(3) C類

第49号土坑（SK154）（第32図）

位置：O・P, 10グリッド。

平面形態：約120×70cmの隅丸長方形。

断面形態：深さ約15cmの皿状。

遺物出土状況：頸部以上を欠く小型壺形土器、及び同一個体と考えられる土器片が出土している。

第50号土坑（SK161）（第32図）

位置：E, 19グリッド。

平面形態：直径約70cmの円形。

断面形態：深さ約20cmの皿状。

第51号土坑（SK71）（第32図）

位置：P, 4グリッド。

平面形態：直径約70cmの円形。

断面形態：深さ約15cmの皿状。

第52号土坑（SK14）（第32図）

位置：P, 5グリッド。

平面形態：約70×35cmの長円形。

断面形態：深さ約16cmの皿状。

第53号土坑（SK222）（第32図）

位置：K, 19グリッド。

平面形態：直径約100cmの不整円形。

断面形態：深さ約25cmのタライ状。

覆土：単層。

第54号土坑（SK66）（第32図）

位置：N, 2グリッド。

平面形態：直径約85cmの不整円形。

断面形態：深さ約20cmのタライ状。

覆土：3層に分層される。

第55号土坑（SK168）（第32図）

位置：N・M, 12グリッド。

平面形態：直径約90cmの円形。

断面形態：深さ約65cmのすり鉢状。

覆土：3層に分層される。3-B類に分類できる。

備考：土坑A類に分類する。

第56号土坑（SK 6）（第33図）

位置：N, 24グリッド。

平面形態：直径約80cmの円形。

断面形態：深さ約30cmのタライ状。

第57号土坑（SK40）（第33図）

位置：O, 16グリッド。

平面形態：直径約120cmの円形。

断面形：底部はおおよそ平坦で緩やかに壁が立ち上がる。

備考：土坑底部が比熱を受けていること、覆土内に若干の焼土を含む。竪穴住居の炉跡の可能性もある。

第58号土坑（SK229）（第33図）

位置：G, 11・12グリッド。

平面形態：160×80cmの長円形。

断面形：底部はおおよそ平坦で緩やかに壁が立ち上がる。

(4) D類

第59号土坑（SK170）（第33図）

位置：L・M, 12・13グリッド。

平面形態：直径約180cmの円形。

断面形態：深さ約20cmの皿状。

覆土：単層。

第60号土坑（SK 7）（第33図）

位置：N, 26グリッド。

平面形態：直径約130cmの不整円形。

断面形態：深さ約20cmの皿状。

覆土：単層。

第61号土坑（SK70）（第33図）

位置：P, 4グリッド。

平面形態：直径約150cmの円形。

断面形態：深さ約20cmの皿状。

覆土：単層。

第62号土坑（SK217）（第33図）

位置：G・H, 23グリッド。

平面形態：直径約120cmの円形であるが、底部は約80×40cmの長円形。

断面形：底部はおおよそ平坦で緩やかに壁が立ち上がる。

第63号土坑（SK30）（第33図）

位置：O, 10グリッド。

平面形態：110×70cmの長円形。

断面形：底部はおおよそ平坦で緩やかに壁が立ち上がる。

(5) E類

第64号土坑（SK122）（第33図）

位置：T, 7・8グリッド。

平面形態：110×70cmの長円形。

断面形：底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

第65号土坑（SK44）（第33図）

位置：L・M, 18グリッド。

平面形態：110×70cmの長円形。

断面形：底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

第66号土坑（SK107）（第33図）

位置：W, 8グリッド。

平面形態：110×70cmの長円形。

断面形：底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

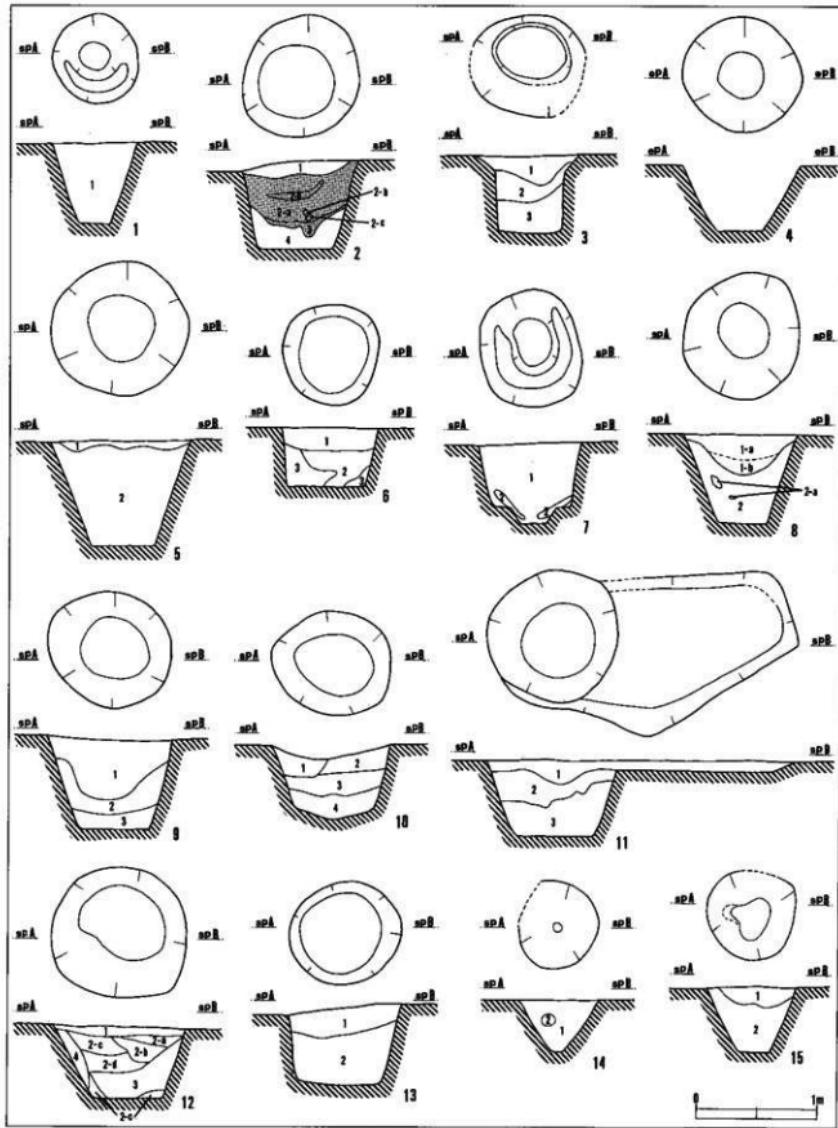
第3節 溝

調査区の中程を東西に何本かの溝が確認された。

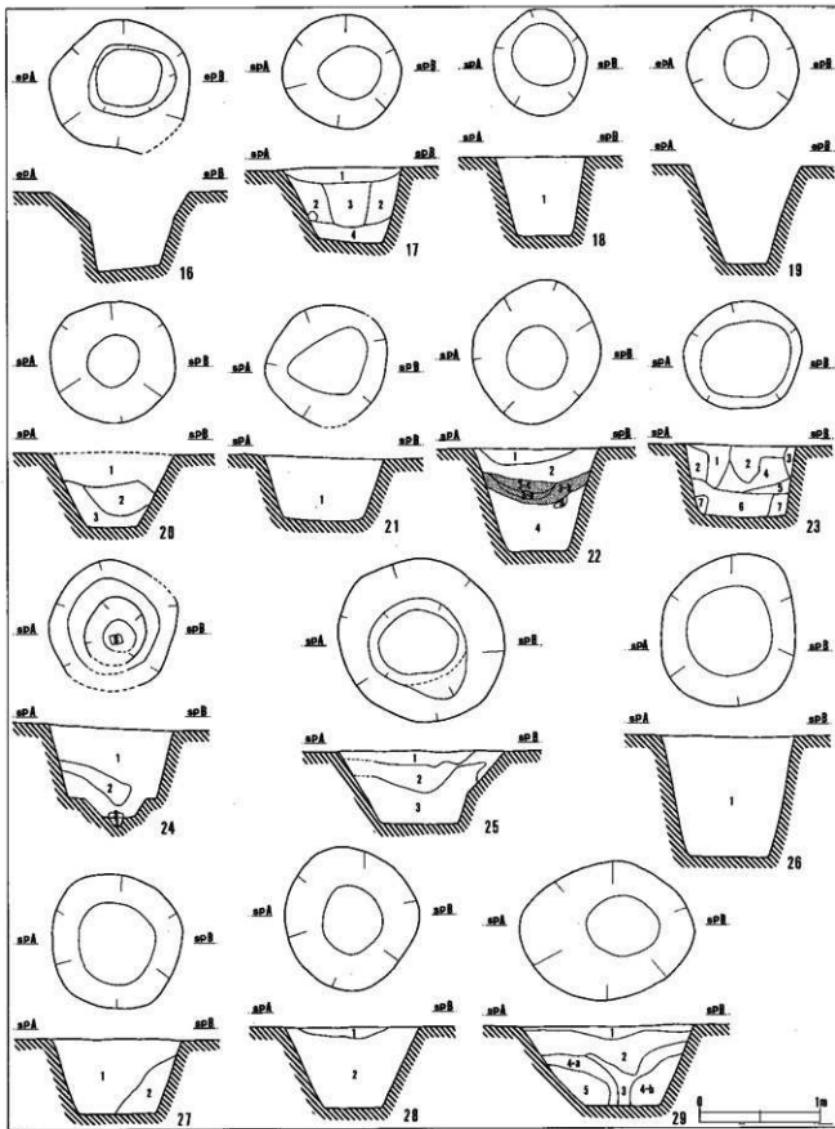
幅約60cm、深さ約40cmの溝を除いた他は幅約30cmにも満たず、深さも約20cm程度の浅いものである。いずれの溝の覆土にも栗林式土器が含まれており、溝は栗林式期に属するものと考えられる。

大型の溝は調査区の東側から延び、小さな蛇行を見せながら西に向かい、確認できなかったが調査区の西側に延びるものと推測される。覆土中には大量の土器が含まれていた。

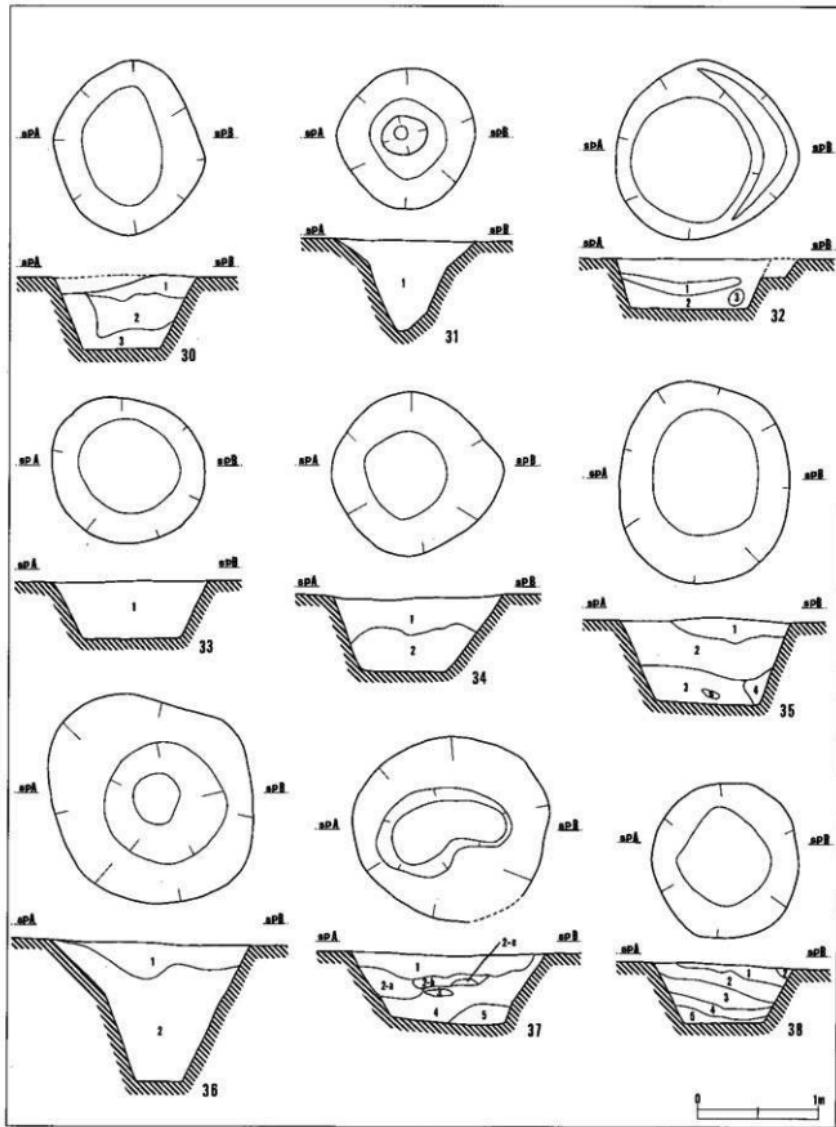
溝の性格については明らかではないが、溝の南側にはほとんど弥生時代の遺構が検出されないに対して、北側には土坑や住居が分布する。こうした点から集落の外部と内部を区画する溝の可能性が高いと考えている。



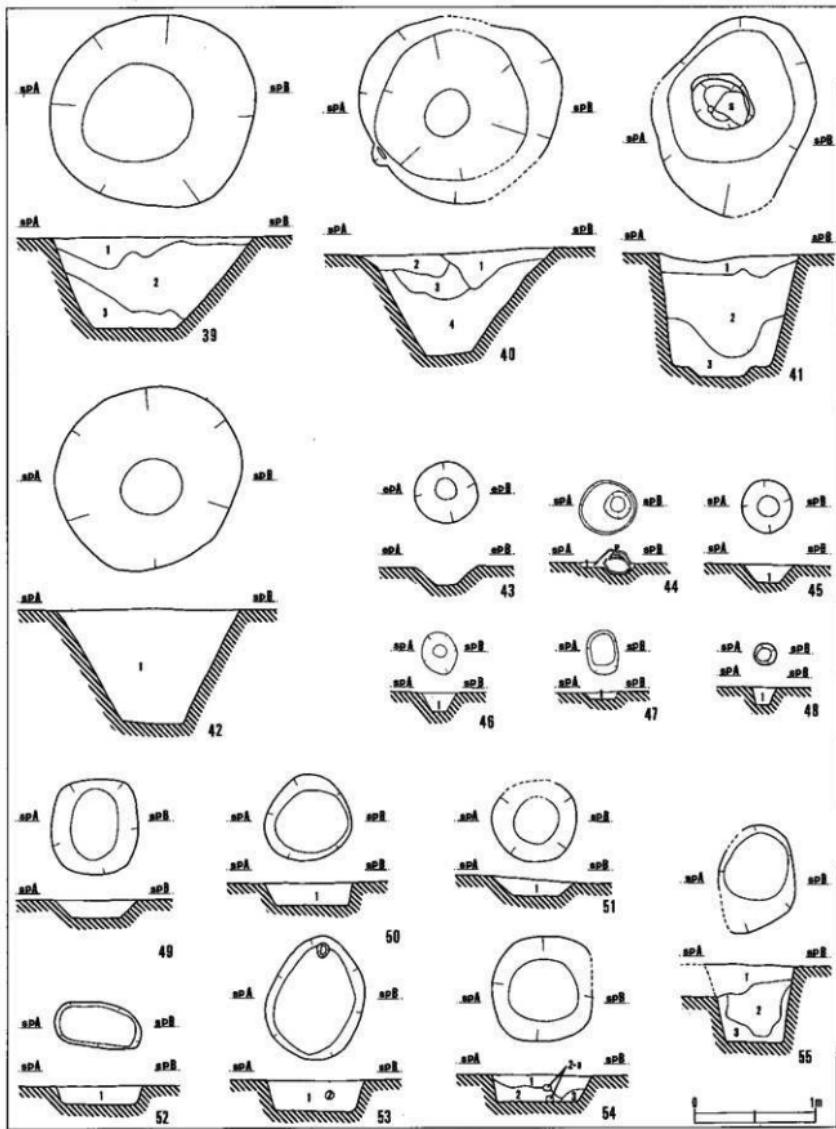
第29図 土 坑(1)



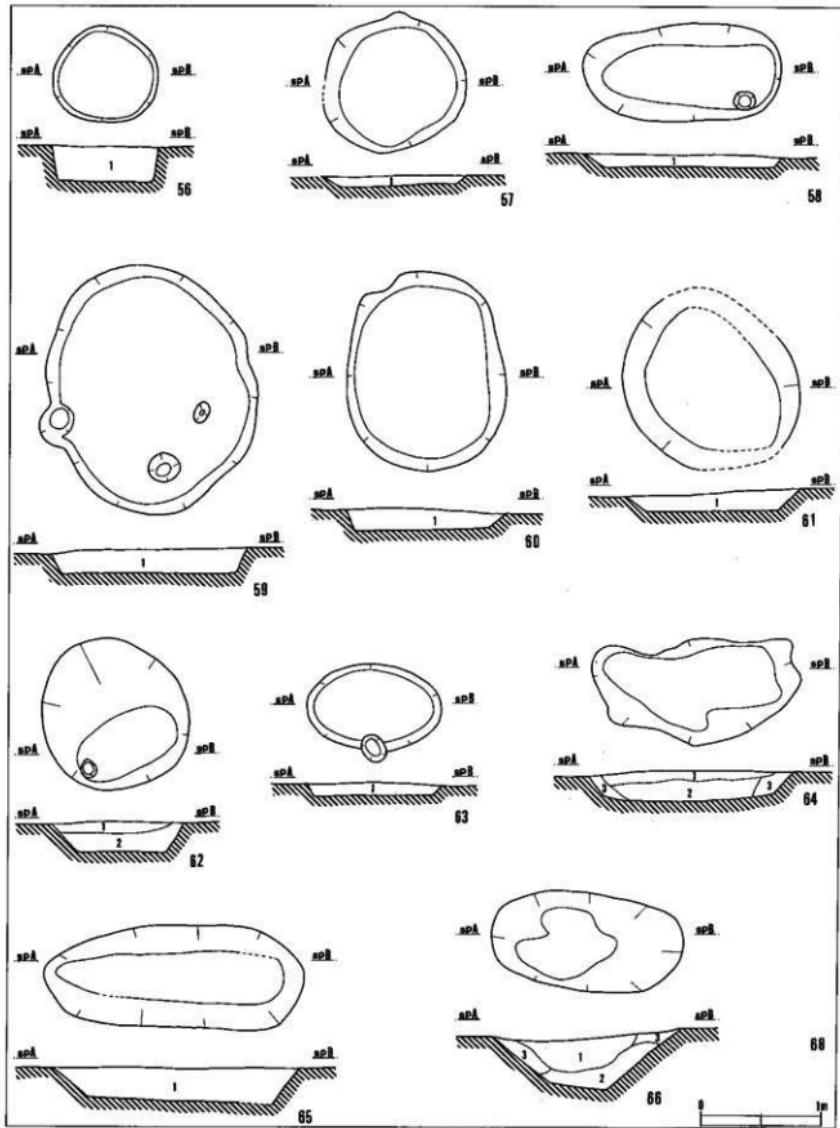
第30圖 土 坑(2)



第31図 土坑(3)



第32図 土 坑(4)



第33図 土坑(5)

細い溝は東から西方向に延び、調査区の西側部分で緩やかに弧を描きながら北の方向に向きを変え、断続的ながら調査区の北側に延びるものと思われる。

さらに、北に方向を変える地点から、新たに同様の溝が弧を描くように西に延び、調査区の外に続いている。

断続的であり、途中で検出不可能になってしまうのが常である。

性格について知る手掛かりはほとんどない。集落を区画する溝との正確な時期区分はできない。ほぼ同時期のものとすれば、集落内部の何らかの区画を示すものであろうか。

第3章 弥生時代の遺物

第1節 土 器

1 分 類

今回の調査区から検出された弥生土器は栗林期から吉田式期にかかるものである。これまで、栗林遺跡では吉田式期の土器は発見されておらず、栗林式期段階で衰退してしまったと考えていたが、遺跡分布地図上の栗林遺跡の一部は吉田式期にまで営まれていることが明らかになった。

ところで、住居形態の変遷過程をみると今回の調査区では栗林式期から吉田式期へ連続的に集落が営まれた可能性が考えられ、土器型式の変遷上でも連続している可能性がある。そこで、栗林式土器と吉田式土器を最初から区分せず、一括して分析することにしたい。なお、栗林式から箱清水式土器の器形分類の概要は既に示してあり、今回の分類もそれに従い、足りない部分を加えたり、誤りは修正することで対応したい。

2 壺形土器の分類

中期から後期の土器を観察すると器形や紋様それにバリエーションがあり、どちらを縦年区分の際に優先させるか判断に迷う。特に中期栗林式の場合は紋様のバリエーションが豊かであり、どちらかといえば紋様に重きを置きがちになる。

しかし、これまで収集された資料を概観すると器形がより有効な目安になると思われる。のである。

そこで、本稿では栗林期と吉田式期、箱清水式期の壺型土器（索口縁壺形土器）と菱形土器の器形に注目して分析を進めたい。

第1類A

全形を知りうるものはない。埋文センター調査の栗林遺跡松原地区の第1号住出土例が中野市では知られるのみである。

1 A				
1 B				
1 C				
2		3		
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				

第34図 塱形土器分類表

1											
2											
3											
4											
4											
5											
5											
6											
7											
8											
9											
10											
11											
12											

第35図 塗形土器分類表

口縁部及び胴下半部を欠いているが、胴部はやや細長い球形を呈し、頸部もやや太く、長めであると推測される。器形を敢えて推測すれば、須和田式土器の壺形土器にちかいものと考えられないだろうか。

紋様は重三角紋である。重三角紋は胴下半部に施紋されるものがあるが、胴部全体がそれであることには希である。また、頸部には細い隆帯が巡る。

第1類B

最も大きな特徴は胴部の最大径が上半部にありややつぶれた球形にちかい胴部となること、頸部がやや太く直立しているかやや短い点にある。

紋様は胴下半部から上半部に施紋され、繩文と半月形刺突紋が併用されるなど、全体的に紋様が丁寧である。頸部には刻目をもつ隆帯が巡る。

第1類C

胴部最大が中位にあり、球形にちかい。頸部は直立気味ではあるが、細くやや長めとなる。全体として無花果型の器形とはならない。口縁部が外反するが口縁部径は相対的に小さい。

紋様は口縁部、頸部、胴上半分部及び下半分部に施紋される。

第2類

胴部最大径が胴下半部にあり、無花果型の器形になる。口縁部の径は小さく、頸部は胴上半部の曲線を引き継ぐように口縁部の外反屈曲点にいたる。

紋様は頸部から胴下半部まで連続するように施紋される。横走櫛描紋が多用される傾向にある。

第3類

無花果型の器形をなすが、胴部上半部のプロポーションが直線的に口縁外反部まで連続し、頸部固有の曲線が失われる。したがって、口縁部の外反は「く」字状になる。

紋様は頸部から胴下半部にまで施紋され、簡素化される傾向が強い。胴上反部の紋様が欠落するものも出現する。

第4類

器形的には第3類とほぼ同様であるが、口縁部の

口径が大きくなり、朝顔状に外反する。紋様は頸部に集約される傾向が強い。

第5類

無花果型の器形であるが、さらに口径が大きくなり、反り返るように外反するものと受け口状を呈するものもある。

紋様は頸部に限定され、横走櫛描直線紋あるいは細い籠描沈線紋が使用される。

第6類

完形のものはないが、胴部最大径が中位に位置し、茄子のような器形になるものと推測され、屈曲しない。口縁部の先端部が内湾するように立ち上がり、端部がつままれるように内湾する。

紋様は頸部に集約され、籠描細沈線紋による平行沈線紋や横走櫛描直線紋が施紋される。また、その下位に三角形のモチーフが施紋される。

第7類

頸部径がやや太くなり、胴中位部分に最大径が形成されるようになる。

頸部紋様は櫛描紋と沈線紋があるが、籠描細沈線や三角形のモチーフは認められない。全体的に寸詰まりの器形となる。

口縁端部に指でつまんだような内湾が特徴的に認められる。

第8類

全形を知りうる資料はない。口縁部や頸部、胴部破片からその器形を推測したものである。口縁部が漏斗状に立ち上がり、頸部は束林式のそれと比較すると太く、胴部最大径は下半部にある。胴部の屈曲は緩やかであり、稜を形成しない。

口縁部端部に特徴的に指でつまんだような内湾が観察される。

紋様は口縁端部と頸部に施紋される。口縁端部外側には櫛描波紋状、頸部に横走する櫛描紋が幅広く施紋され、数条の籠描紋がいわゆるT字条紋のように施紋される。

第9類

漏斗状の口縁部であり、頸部が太く、胴部最大径

が中位よりやや下がると同時に、屈曲部に稜を形成されるが顯著ではない。口縁端部には指でつまんだような内湾が認められるがその度合は弱まる。

紋様は口縁端部外側に櫛描波状紋、頸部には幅の広い横走櫛描直線紋が施紋される。その下位に櫛描波状紋が横走するものもある。また、横走直線紋に直交する櫛描直線紋が施紋されるものもある。

赤色塗彩される傾向が強まる。

第10類

頸部が太く、口縁部が外反する。胴部最大径は胴下半部にあり、稜を形成して底部に至る。口縁部にはつまんだような内湾は痕跡的に残るのみである。

第11類

口縁部が大きく外反し、朝顔状に開く、胴部最大径は下半部にあり、下半部は稜をつくり内側に湾曲しながら底部に至る。

紋様は頸部に横走櫛描直線紋が施紋され、赤色塗彩は一般化する。

第12類

口縁部は朝顔状に大きく開き、頸部はやや細くなり、胴部は球形にちかい形状をなす。

3 壺形土器の変化

素口縁壺形土器は都合12類に分類される。対象とした土器は中野市内出土のものに限定してある。

したがって、他地域から持ち込まれたり、一時に強い影響を受けた特異な存在でない限り、各類は原則的に時間差を反映したものと考えてよいであろうが、一部器種のバリエーションを含む可能性があり、このまま、通時区分の段階とすることはできないと考えている。

1類から5類までの中期後半（栗林式）では地域差に還元される器形のバリエーションが存在する可能性があることは指摘したが、中野市に限定した資料を対象とした時には不鮮明である。

器形は球形にちかい胴部、短く外反する口縁から、無花果形の胴部、大きく朝顔状に外反する口縁へと変化すると考えている。

通時段階を考えるとすれば、1類から2類、3類、4類、5類としておくのが妥当であろうか。

6類から12類は後期に編年されると考えている。中期末の5類から6類へは大きな変化はないと考えている。最も著しい相異は頸部の紋様、口縁端部のつまれたような内湾である。

6類と7類の器形は全体に茄子の形に似ており、胴部上半部と下半部の間に稜が形成されない。口縁端部がつまんだように内湾するという共通性をもっている。これらの類は吉田式の壺形土器と考えてよいであろう。ただし、資料数が少なく、器種的な多样性を確認できないために一括せざる得ないが、若干の時間幅を考えたい。

8類から12類は箱清水式土器として一括されてきたものである。しかし、器形から観察する限り、8類と9類（後期中葉）、11類（後期後葉）、12類（後期末葉）に大別しておきたい。なお10類については器種のバリエーションではないかと思われ、通時区分の分析では保留しておきたい。

大きな器形変化の流れは茄子のような形態から、一度、胴部最大径が胴部中央まであがり、再び下方に下がるものと考える。この間に栗林期のような細頸の壺形土器から頸部口径が大きくなると同時に短くなり、胴上半部と下半部の間に稜のある良く知られているような箱清水式の壺形土器の器形になる。

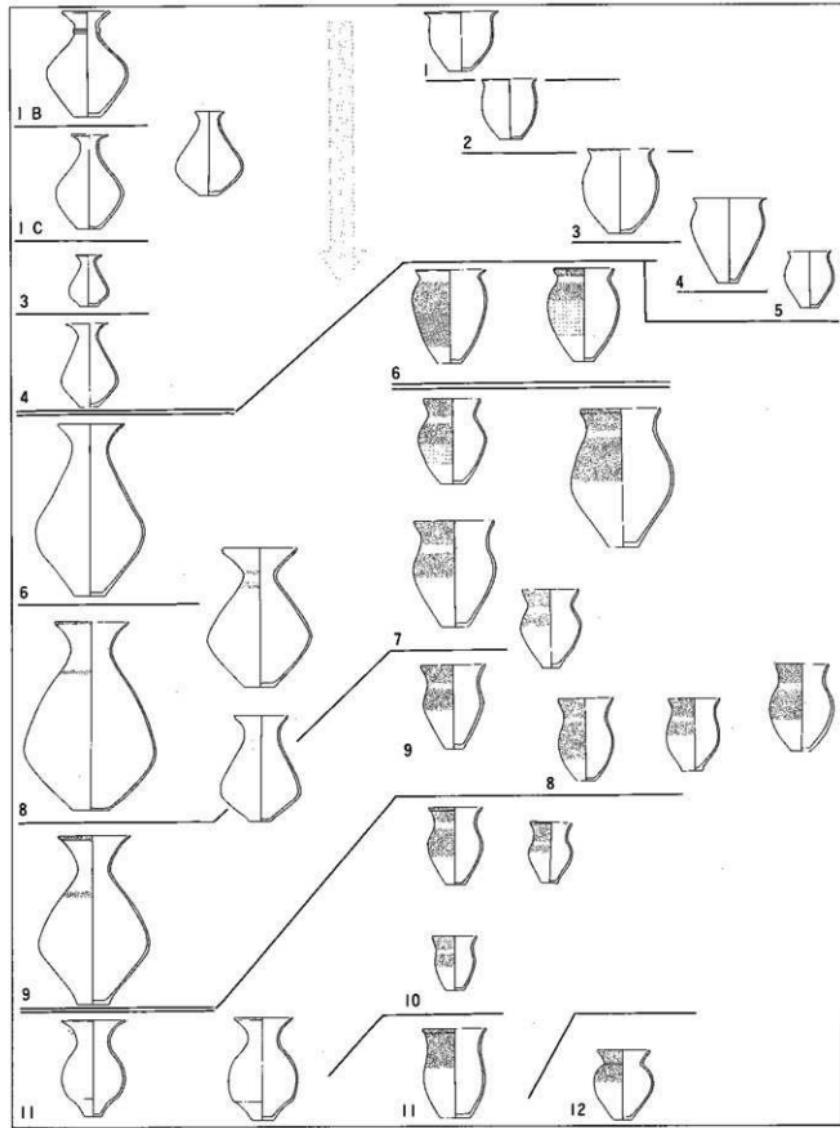
その変化は急激なものではなく、暫定的であるが、中期と後期前葉（吉田式）との間の変化は連続的とはいえ、新しい要素も出現している。また、後期中葉段階での変化頸部径が大きくなり、短くなる変化、末葉段階の球形化などは自立的な変化ではないといふことができるかもしれない。

しかし、仮に壺形土器の変化の要因を外部からの刺激だとしても、それは急激な変化をもたらしていないといえよう。

4 壺形土器の分類

第1類

口縁部が逆「L」字状に外反し、そのまま直線的



第36図 弥生土器の器形変遷図（模式）

な胴部のプロポーションをつくり底部にいたるものである。中野市内の出土例はこの1例のみであり、そのあり方ははっきりしない。

口縁端部に繩文が施紋され、胴上半部には横走構描直線紋が隙間なく施紋される。

第2類

口縁部が逆「L」字状に外反し、頸部がわずかにくびれ、やや胴部が膨らみながら底部にいたる器形である。縦走構描直線紋、横走構描羽状紋が施紋される例が多いと思われる。また、胴部中位に半月形刺突紋が施紋される傾向にある。

第3類

頸部がわずかにくびれ、胴部がやや膨らむ点は、ほぼ第2類と同様であるが、口径に比べて器高が低くややす詰まりになる。

紋様は多様になり、構描波状紋（縦方向の紋様帶に切られていることが多い）、縦走構描羽状紋、頸部に簾状紋が見られるようになる。

第4類A

頸部がくびれ、胴部中位に胴部最大径をもち、全体にすんなりとした器形である。

第4類B

口縁部がやや「く」の字状に外反し、胴部上半部に最大径をもつ。

第5類

口縁部が「く」の字状に強く外反し、胴部最大径が中位にある。胴下半部もやや膨らみをもつ。

紋様のバリエーションは少なくなり、構描波状紋と縦走羽状紋が多用される。頸部には紋様があるものとないものがあり、一般化していない。

第6類

口縁部が「く」の字状に外反するものと、受け口状を呈するものの二者がある。いずれも、胴部最大径が上位にある。4類と胴部全体が膨らむことで区分する。

紋様のバリエーションは少なくなり、頸部に簾状紋、胴部上半部には構描波状紋、その下位の縦走する羽状紋の組み合わされるものが多い。

第7類

口縁部が一度外反し、その後やや内湾するように立ち上がり、胴部最大径は胴部上半にあり、若干の肩をもつ。口縁端部はつまんだように内湾することが特徴であるが、受け口状を呈するものも認められる。

紋様のバリエーションは少くなり、口縁部には構描波状紋、頸部には簾状紋、胴部上半部には構描波状紋が施紋される類型が一般的となる。

第8類

口縁部が内湾するように外反し、胴部最大径が中位に下がり、口縁端部のつまんだような内湾は痕跡的である。

口縁部のつまんだような内湾は7類、8類のマルクマールともすべきもので、9類には認められない。7類と8類の差異は僅かしかなく、その区分は全体の器形に頼るしかない。8類は7類に比して口縁部径が胴部最大径とほぼ等しくなり、開きが小さくなる。これまで箱清水式と呼ばれていた典型的な壺形土器の器形によりちかづく。

第9類

口縁部がやや長くなり、胴部最大径が中位にある。8類との区分は口縁端部のつまんだような内湾の有無による。

第10類

口縁部が緩やかに外反する、口縁部と胴部との境界が明確になり、胴部の膨らみが強い。

第11類

頸部のくびれが弱くなり、全体が筒状になってくる。また、頸部の簾状紋が消滅する。器形の崩れ、紋様の簡素化など、この器形の系譜が衰退していく傾向を示す。

第12類

胴部が球形のもの。他の類と器形的には様相を大きく変える。

5 壺形土器の変化

各類は壺形土器と同様、ほぼ通時的变化を表現し

ていると考えている。器形的には7類以前と以後で大きく区分することができよう。前半は弥生中期後半、後半は弥生後期ということができよう。

中期後半（1から5類）の紋様は多様であるが、基本的には櫛状工具による「横走櫛描直線紋、縦走櫛描直線紋、横走櫛描羽状紋、縦走櫛描羽状紋、櫛描波状紋等」と「繩文あるいは沈線紋」による二者に区分できる。

櫛状工具による紋様は多様であり、どのような変化を見せるのか明らかではない。横走櫛描直線紋、縦走櫛描直線紋、横走櫛描羽状紋が古い段階で多用され、ついで波状紋が加わり、縦走櫛描羽状紋が後出的のように思えるが、判然としない。

古い段階の彫形土器には脣部下半部と上半部の接合部が段状になり、半月形刺突紋が施紋されるものが目立つ。明確なメルクマールには成り得ないが目安として用いることはできるであろう。

後の繩文と沈線を用いて施紋される紋様は「コ」の字重ね紋と呼ばれる紋様に限定されているように見える。土器は櫛目紋土器とは明確に区分されていたと考えるべきであろうか。繩文的色彩の強い紋様が残存する様相は栗林式期の土器のあり方、ひいては栗林期の文化や社会を理解するために重要な糸口を与えてくれるであろう。

6類から12類の彫形土器は弥生時代後期のもとを考えているが、6類と7類のグループ、8類と9類のグループ、10類、11類と12類のグループに大別することができようか。

6類は明らかに栗林期の系譜の中で考えられる器形である。器形的には僅かな差異しかない。しかし、紋様は斎一性が高い。頸部紋様は必ず施紋される。波状紋もあるが、簾状紋が圧倒的である。また、脣部上半部は波状紋、その下位は縦走櫛描羽状紋が施紋される。この組み合わせは栗林期には認められないもので、本類の特徴的なものだと考えている。

7類の脣部器形は6類のそれとほぼ同じであるが、頸部の外反が「く」の字状からやや緩やかなくびれになり、口縁部が長くなる。また、受口状にならな

いものは、口縁端部につまんだような特徴的な内湾が認められ、よい区分の目安となる。

6類と7類は類似性が高いと同時に差異もある。6類から7類へと系譜的に変化したか否かは今後の課題である。しかし、7類は成立以後、系譜的12類にまで連続する。他方、栗林式土器の系譜は6類を最後に消滅する。土器と社会の変化が直接的に結び付くかどうかは問題であるが、弥生中期の終焉と弥生後期の開始がどのような推移の中で生じたかを考えるうえで重要な段階となろう。

7類が成立以後、壺形土器は8類、9類、10類、11類へ僅かづつ変化していく。最も洗練された感じを受けるのは10類であり、11類はこの系譜の衰退を示す感がある。

12類は7類からの系譜の中では考えられない土器であり、外部からの影響を考慮しなければならないであろう。

第2節 各 説

1 中期後半の土器

(1) 竪穴住居出土の土器

第1号竪穴住居出土土器（図版37図1～2）

壺形土器と彫形土器がある。壺形土器は全形を知ることができないが頭部が長く、その外形の曲線が口縁部外反曲点まで緩やかに連続することから、壺形土器第3類に相当するものと考える。彫形土器の外形は口縁部から緩やかにくびれ、直線的に垂下し、底部に至ることから彫形土器第4類に分類できるものと考える。

なお、壺形土器の紋様は横帯紋様と区分されるもので、栗林式土器には普遍的に認められ、横帯紋様と対置的な関係にあるものと考える。器形の違いと結び付く可能性もあるが、全形を知りうる資料が意外に少なく、はっきりしない。しかし、異なる系譜の土器紋様が併存していることは確かであり、今後栗林式土器を考えていく上で重要な様相であると考える。

うか。

第2号竪穴住居出土土器（図版37図3～14）

壺形土器、甕形土器、台付甕形土器、鉢形土器などがある。

甕形土器は何れも完形品でないため、分類するこ
とが難しいが、実測図3や7は櫛描横走直線紋が頸部に施紋され、口縁部が大きく外反することから、壺形土器第5類に相当しよう。4は壺形土器第4類相当と考える。甕形土器第4類は3類に比べて胴部径が小さくなり、細長い印象になるものがあり、や
や新しい様相だと考える。5も壺形土器5類の範疇で捉えておきたい。

甕形土器8は胴部中位に最大径があり、甕形土器5類に相当するものと考える。実測図10の甕形土器は当該地域の栗林式土器の甕形土器の系譜上にはないと考えている。北信地方にも散見するが、中南信地方との関連性の中で考えるべきものであろう。

実測図13も注意しておきたい器形である。甕形土器と呼称するかどうかは別として、口縁部がつまんだように外反し、やや胴部が膨らむ外形をとりながら底部にいたる器形である。「コ」の字重ね紋が施紋されるのが常である。須和田式の新しい段階から続く器形と考えている。また、11のような独特の器形は栗林式土器独特の器形であり、縄文的色彩の強い紋様が施紋されるのが常である。

9はおそらく台付甕形土器だと考えるが、器形的には後期前葉まで引き継がれるが、紋様は別のものとなる。

本住居の出土土器は相対的に見て、栗林式の最も新しい段階のものと思われるが、こうした縄文的要素がこの段階まで続いていることに注意しておきたい。

第3号竪穴住居出土土器（図版37図15～16）

壺形土器、甕形土器、蓋形土器がある。15は壺形土器は受口口縁壺形土器である。この器形も栗林式期に普遍的であるが意外に完形資料が少く、分類できていない。16の甕形土器は台付甕形土器であろ

第4号竪穴住居出土土器（図版38図18～32）

壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高杯形土器、鉢形土器、瓶、蓋形土器がある。

壺形土器を概観するとその器形にかなりのバリエーションがあることに気が付く。実測図20は特殊な器形として省くにしても、18と23の口縁部の開きかたは明らかに異なり、おそらく胴部の器形も異なるもと考えてよいであろう。1996年の栗林遺跡の調査報告書において、予察的にふれておいたが、こうした両者を時間差による器形の違いとは考えずに、地域差あるいは器形差であると考えた。同一住居の覆土出土資料であるから、直ちに共時性を主張することはできないが、両者の関係を示唆しているといえよう。今後、壺形土器における器形差や地域差の検出は重要な検討課題であろう。

壺形土器は何れも胴下半部を欠いているため断言できないが、26、27は最大径が胴部中位にある甕形土器5類に分類できようか。28は先述したように別系譜の甕形土器と捉えておきたい。

第5号竪穴住居出土土器（図版38図33～36）

壺形土器、小型高杯形土器、蓋形土器がある。34の壺形土器は胴下半部の形態から壺形土器第4類に分類できようか。

第6号竪穴住居出土土器（図版39図37～図版40図52）

壺形土器、甕形土器、蓋形土器、瓶がある。

本住居でも壺形土器の器形にはバリエーションがある。40は受口口縁壺形土器であり、明らかに器形の系譜が異なる。ただし、頸部以下の器形は壺形土器第4類と同じである。44は太頸壺形土器であり、やはり器形の系譜が異なる。37は壺形土器第4類であるが、41、42、43は今回の分類中にはない器形である。おそらく、41の胴部は43のようになろう。口縁部は大きく開くと同時に胴部最大径も大きい。1996年の報告ではAとした器形である。

變形土器土器は最大径が胴部中位にあり、變形土器第5類に分類できる。

第7号豊穴住居出土土器（図版40図53・54）

太頸壺形土器と無頸壺形土器がある。どちらも今のところ資料が少なく、全体像が掴めない器種である。

第23号豊穴住居出土土器（図版40図55）

壺形土器の口縁部と思われるが管見によれた類例はない。縦に垂下する棒状突起が2本組みで四単位施紋される。受口口縁の縁下端に小さなこぶ状突起が連続してつけられている。

（2）土坑出土の土器

第40号土坑出土の土器（図版47図125～128）

125は全体的に太く類例を見ない。復元の間違いかも知れない。變形土器126は變形土器第2類に相当しよう。

第42号土坑出土の土器（図版47図129～137）

壺形土器、台付壺形土器、台付變形土器、瓶、鉢形土器、高杯形土器がある。

129は胴部径の広い壺形土器で、胴部下半部に最大径をもつ。先述したように、やや器形の系統を異なるものと考えられる。130は口縁が大きく強く外反することから第5類の壺形土器、131、132は壺形土器第4類に分類でききる。

第1号土器集中の土器（図版48図138～140）

壺形土器が知られる。138、139は胴部最大径が胴下半部にあり、やや細身の感があることから、壺形土器第4類に分類できよう。140は赤色塗彩された無頸壺形土器で口縁部の小穴が二つ穿孔されている。

第44号土坑出土の土器（図版48図141～143）

何れも、變形土器の胴下半部分で分類することはできない。142はわずかに横走彫描羽状紋が施紋が認められる。

められる。

第31号土坑出土の土器（図版48図144・145）

144は太頸壺形土器、145は注口壺形土器である。

第167号土坑出土の土器（図版48図146・147）

壺形土器と鉢形土器がある。147は赤色塗彩され頸部の細く、胴部との境界に段をもつ壺形土器である。おそらく1966年の栗林遺跡の報告でA類に分類したものに相当しよう。

146は鉢形土器とするか無頸壺形土器とするか判断に迷う器形である。赤色塗彩され、口縁部に小孔が穿孔される。

第31号土坑出土の土器（図版48図148・149）

無頸壺形土器2個体がある。148は大きく胴部径も大きい。149は小型で胴部径が小さくやや細身の器形である。両例とも赤色塗彩され、口縁部の小孔が二つ並んで穿孔される。

第25号土坑出土の土器（図版48図150・151）

150は高杯形土器、脚部は短く、杯部は浅い椀状になると思われる。151は壺形土器の底部で穿孔される。

第34号土坑出土の土器（図版48図152・153）

152は口縁部の返りが小さく、頸部の外形が胴部から連続する曲線を描いていることから、壺形土器第3類に分類できようか。

第11号土坑出土の土器（図版48図154・155）

154は大きく外反する受口口縁壺形土器である。口縁が受口状をなす壺形土器には本例のように、頸部が細いものと頸部が太いものがある。この二つの類が時間差なのか、地域差なのか、器種差として捉えるべきものなのか、今後の課題である。なお、受口状の口縁をもつ壺形土器の胴部上半部の紋様は縱方向のもであることが多い。

155はミニチュア土器、頸部に沈線がめぐり、胴部には縄文が施紋される。

第25号土坑出土の土器（図版48図156～158）

156は片口土器、157は蓋形土器、158は小型で無紋である。

第36号土坑出土の土器（図版48図159～161）

いづれも、壺形土器の底部である。161は底部穿孔される。

第2号土器集中の土器（図版49図162・163）

壺形土器と壺形土器がある。壺形土器は頸部のくびれが弱く、わずかに膨らんで底部にいたる器形となる。壺形土器第2類に分類できようか。

163は先述したように、細い頸部をもつタイプの受口口縁壺形土器である。

その他の土坑出土の土器（図版49図164～180）

164は第46号土坑出土、壺形土器第5類に分類する。165は第3号土器集中、注口をもつ壺形土器。166はグリッド出土、口縁部と底部を欠く。頸部には沈線紋がめぐらされ、胴部最大径が下半部にあるが、やや細身であることから、壺形土器第4類に分類される。167はグリッド出土、胴部最大径が下半部があり、口縁部が小さいことから壺形土器第3類に分類する。168は第48号土坑出土、口縁部を欠く壺形土器。169はグリッド出土、頸部以上及び底部を欠く壺形土器。胴部径が大きく算盤玉状の外形であり、1966年報告書のB類に相当しよう。170はグリッド出土、壺形土器3類に分類できようか。171はグリッド出土の壺形土器、口縁部がわずかに二段の開き、頸部紋様が平行沈線文間に縱方向の短い沈線を施紋するなど、栗林式土器に見られないわけではないが、やや特異な土器である。172は第49号土坑出土、赤色塗彩された小型の壺形土器である。胴部上半部と下半部の境界線が段となる。173はグリッド出土、壺形土器の底部である。174は第29号土坑出土、大きな口径をもつ

鉢形土器あるいは無頸壺形土器のような器形の土器である。栗林式土器では希な器形ではないだろうか。175は第55号土坑出土、ミニチュア土器であろうか。176はグリッド出土の壺形土器である。口縁部の口径が大きく、鉢形土器のような器形をしている。いわゆる栗林式土器の壺形土器とは大きく器形をこと異なる。177はグリッド土坑、178は第8号土坑、179は第24号土坑出土の高杯形土器である。三者三様の器形である。177は短い脚部にコップ状に杯部、178は杯部を欠くが長い脚部に大きく聞く杯部が組み合わされるものと思われる、179は短い脚部に口縁部が強く外反する杯部をもつ。

2 後期前葉

第21号竪穴住居出土土器（図版42図70～79）

壺形土器、壺形土器、高杯形土器がある。

壺形土器は全形を知ることができない。70は口縁部と胴下半部を欠き、71は頸部以上を欠いている。両例とも茄子のような形態になると予想される。70の頸部には平行沈線と沈線による波状紋が施紋されている。両例とも壺形土器第6類の範疇で捉えることができよう。

壺形土器も全形を知り得ないが、口縁端部にはつまんだような内湾が観察され、壺形土器第7類と考える。しかし、本住居出土例から明らかなように、器形的なバリエーションがある。

第9号竪穴住居出土土器（図版42図80～83）

壺形土器、壺形土器、握手付土器がある。壺形土器80は頸部以上の破片で全形を知り得ないが、口縁がやや内湾するように立ち上がり、口縁端部につまんだような内湾が観察される。赤色塗彩はされず、頸部には簾状紋が施紋される。壺形土器第7類に分類する。

壺形土器83は最大胴部径が上位にあり、壺形土器第6類に分類したいが、口縁端部に縄文が施紋されている点が気になる。81は無頸壺形土器である。

第8号竪穴住居出土土器（図版41図56～69）

壺形土器、甕形土器、鉢形土器がある。本住居は焼失住居であり、出土した土器は使用時の様相を強く留め、其時の可能性が高い資料である。

56と61は壺形土器第7類に分類できる。57と58は頸部以上の破片で、頸部以下の器形を知ることができない。口縁端部にはつまんだよう内湾がある。59、60は頸部破片であり、全形を知り得ない。頸部には描画直線や波状紋がせ紋される。4例とも赤色塗彩されない。

57の紋様が沈線で施紋される。器形的には壺形土器第8類と同様であろう。沈線による紋様施紋が壺形土器第6類のみに限定されないことを示すのであるか。あるいは器形的には壺形土器第8類とほぼ同様でありながら、沈線をメルクマールとした1類を新たに加えるべきなのであるか。

甕形土器はすべて甕形土器第7類に分類できるが、67例については他の例と比較して違和感があることは否めない。後期の甕形土器にはややす詰まり器形となるものがある。そうしたものとの関連の中で考える必要があるのであるのかも知れない。

第13号竪穴住居出土土器（図版43図84～93）

壺形土器、甕形土器、高杯形土器、鉢形土器がある。84から86は壺形土器であるが何れも全形を知り得ない。84は壺形土器第8類に、85は第6類に分類できよう。86は口縁部径が小さく、頸部が短く緩やかにくびれ、胸部にいたる。刷毛による器面調整痕が顕著に残る。頸部紋様はない。いずれの要素も当地域の壺形土器には認められない異質な土器である。

87から90は甕形土器であるがいづれも全形を知り得ない。88、89の口縁部はややす内湾するように立ち上がるが、端部にはつまんだような内湾は認められない。甕形土器第9類に分類したいが、全体の器形は7類あるいは8類にちかい。分類基準とも関連させ、今後の検討課題としておきたい。

90は頸部に範描細線による得意な紋様が施紋される。範描細線による紋様は壺形土器第6類に顕著な

もので、本住居85の壺形土器型にも認められる。

この範描細線は壺形土器第6類に突然のように出現するもので、三角形のモチーフと強い相関関係をもっている。

第14号竪穴住居出土土器（図版43図94～101）

壺形土器、甕形土器、鉢形土器、蓋形土器がある。何れも全形を知り得ない。94、95は壺形土器第8類、96は壺形土器第9類に分類できよう。

甕形土器97、99は第7類に分類できよう。

第15号竪穴住居出土土器（図版44図102～105）

壺形土器、甕形土器、瓶がある。102は壺形土器第8類とする。甕形土器は第7類に分類できよう。

第16号竪穴住居出土土器（図版44図106～110）

壺形土器、甕形土器がある。壺形土器は頸部以下を欠いているため、はっきりしないが壺形土器第7、8類に相当しよう。110の小型壺は古い段階の器形を強く残しているものと考える。

第17号竪穴住居出土土器（図版45図111～113）

壺形土器が3点実測できた。器形的には胴下半部に最大径をもち、頸部には範描細線文による紋様が施される。壺形土器第6類に分類したい。

第18号竪穴住居出土土器（図版45図114～117）

壺形土器、甕形土器、高杯形土器がある。壺形土器は大型と小型の二者がある。壺形土器第6類から8類のどれかに分類できようか。甕形土器は口縁端部につまんだような内湾が認められる。甕形土器第7類に分類できようか。

第22号竪穴住居出土土器（図版46図118～123）

壺形土器、甕形土器、鉢形土器がある。壺形土器には大型（118）、小型（119）、台付壺形土器（119）がある。壺形土器118は胴部最大径が中位にあり、下半部と上半部の間に稜を形成しない。おそらく、壺

形土器第8類に相当しよう。小型壺形土器119は胴下部に最大径があり、6類の器形となろう。

甕形土器121は口縁端部につまんだような内湾が認められ、甕形土器第7類に分類できよう。甕形土器120は口縁端部が内湾するが頸部がやや直立氣味で、やや長くなることから、第8類に分類したい。

土量が相当数あり、栗林遺跡での生業を考えるうえで、注目すべきであろう。

第20号竪穴住居出土土器（図版46図124）
壺形土器1点が知られる。頸部には沈線による紋様と箒描細沈線で紋様が施紋される。壺形土器第6類に分類する。

第3節 石 器

1 石 器

磨製石斧（蛤刃石斧、偏平片刃石斧）、磨製石鎌、石包丁、打製石斧、打製石鎌、砥石、凹石、叩石、磨石、管玉、マガ玉、剥片石器などが弥生時代の住居の覆土から検出され、弥生時代の石器であると考えられよう。

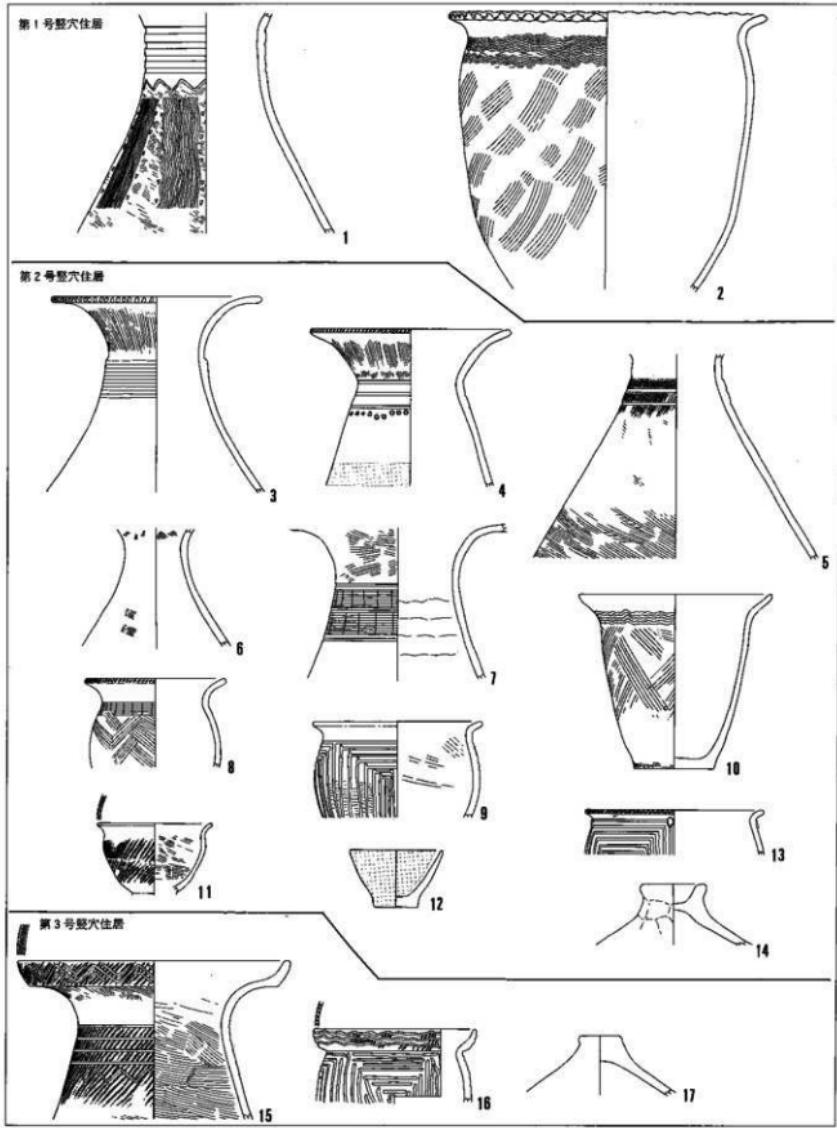
打製石斧、打製石鎌、凹石、叩石、磨石などは縄文文化の石器と区別がつかないほど良く似たものである。縄文時代の各々の石器の系譜上にあると考えて良いのであろうか。

住居覆土から検出された打製石斧は合計4本と數は多くないが、栗林期及び吉田期の住居から検出されている。打製石鎌も同様に栗林期と吉田期の住居から検出されている。

石器の総数も栗林式期と吉田式期の間に差異は認められない。吉田式期に石器が減少する傾向は認められないというべきであろうか。

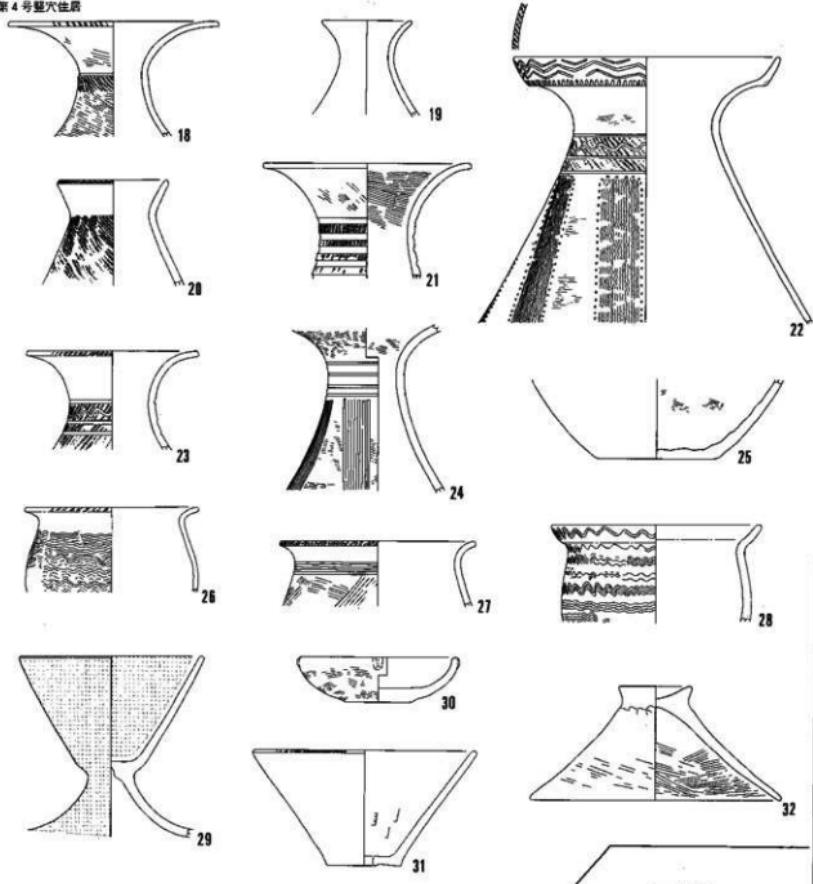
先述したように、本調査区の石器には磨製石斧や磨製石鎌、石包丁に代表される磨製石器群、打製石斧や打製石鎌、凹石などの縄文的石器群、勾玉や管玉といった装飾品。そして、簡単な作りの臨機的な石器と推測される石器群が認められる。

特に縄文的石器群については天竜川水系の弥生遺跡でも注目されて居るが、本遺跡では打製石鎌の出

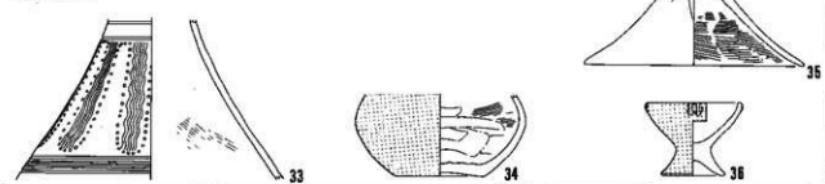


第37図 弥生土器(1)

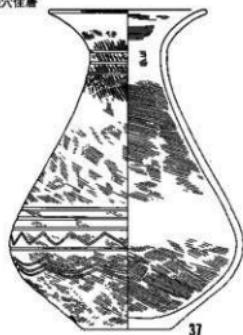
第4号整穴住居



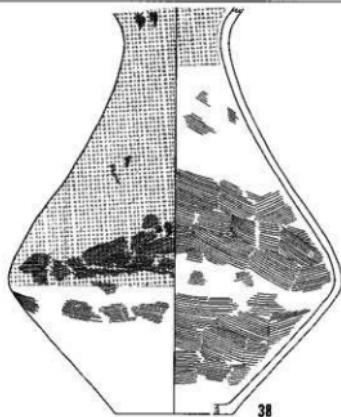
第5号整穴住居



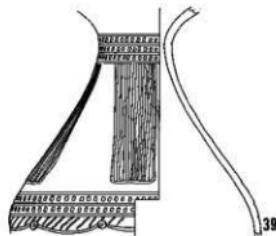
第38図 弥生土器(2)



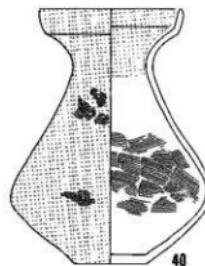
37



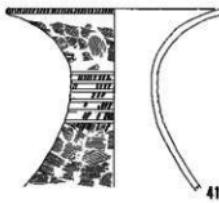
38



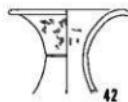
39



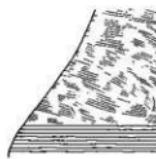
40



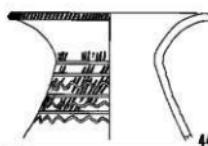
41



42



43



44

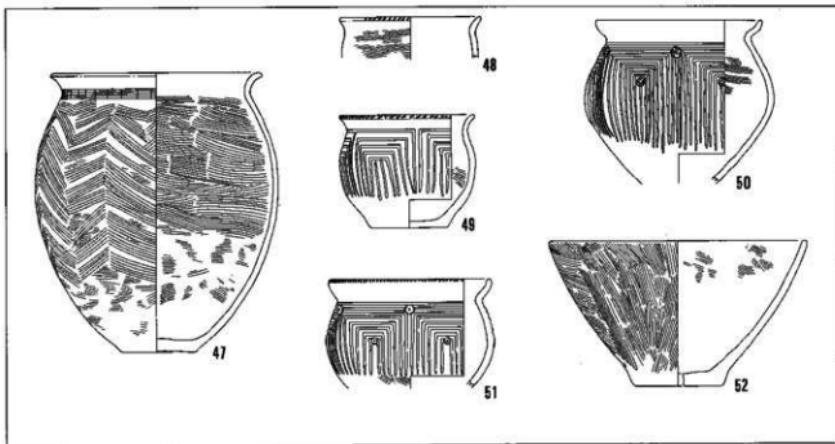


45

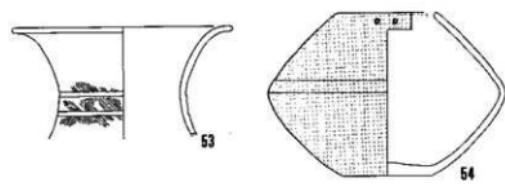


46

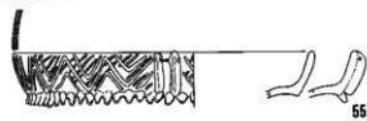
第39図 弥生土器(3)



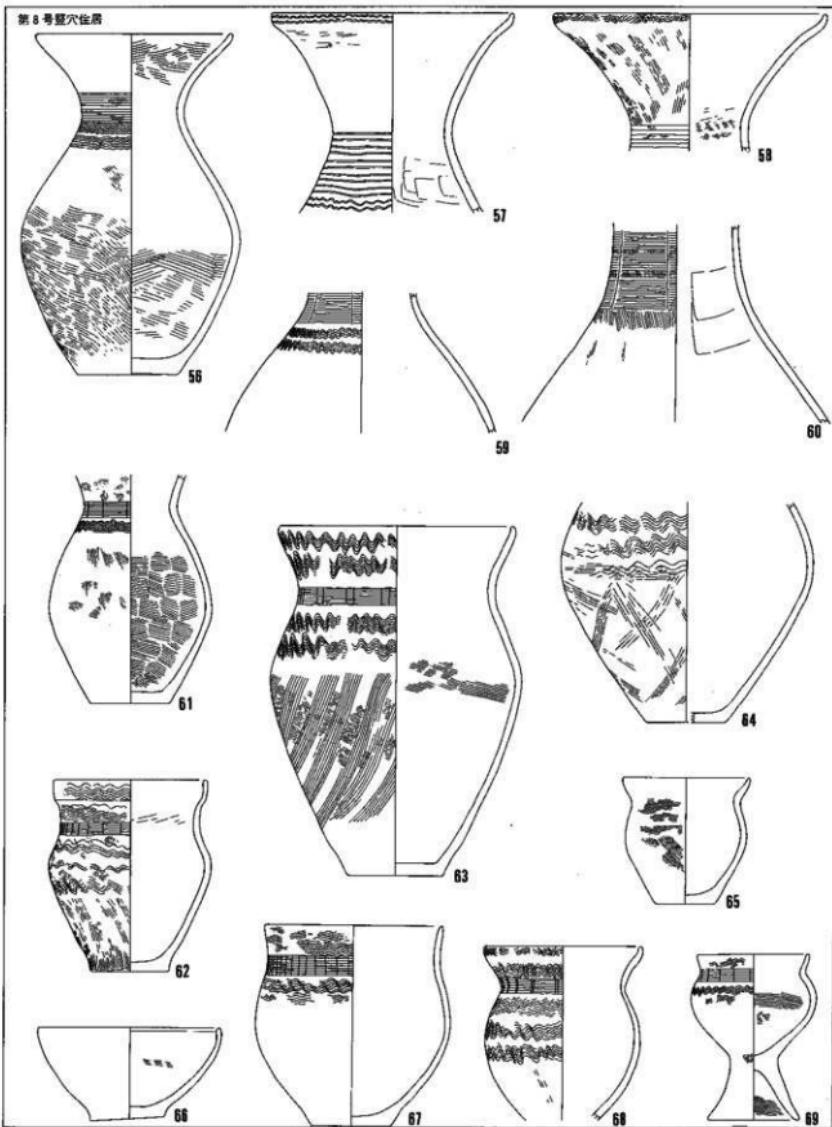
第7号竪穴住居



第23号竪穴住居

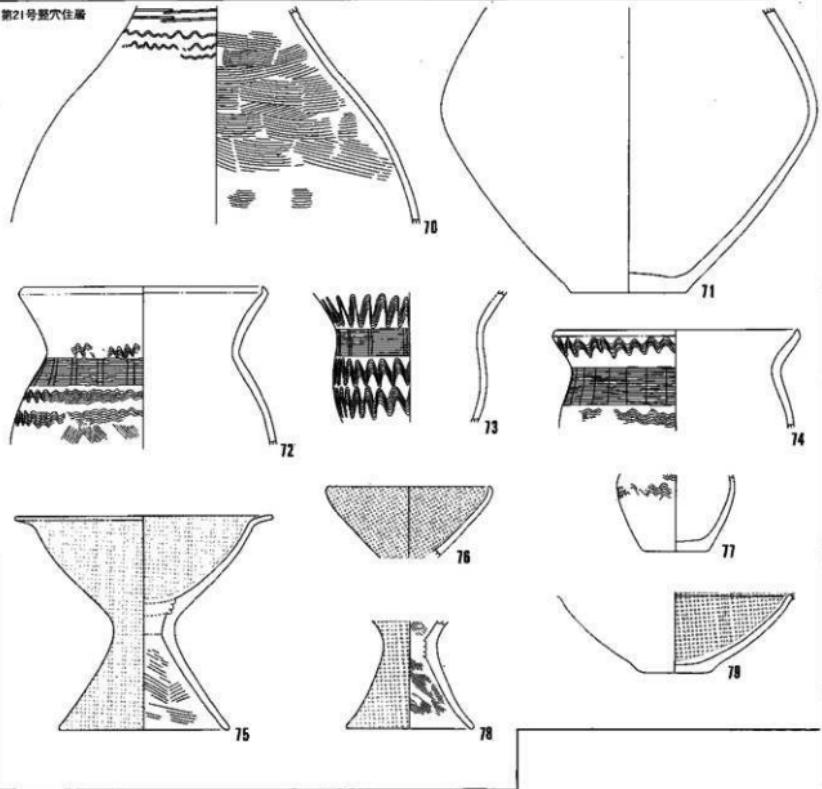


第40図 弥生土器(4)

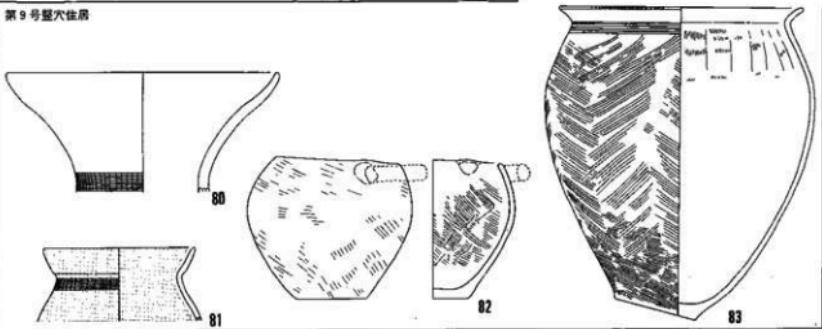


第41図 弥生土器(5)

第21号竪穴住居

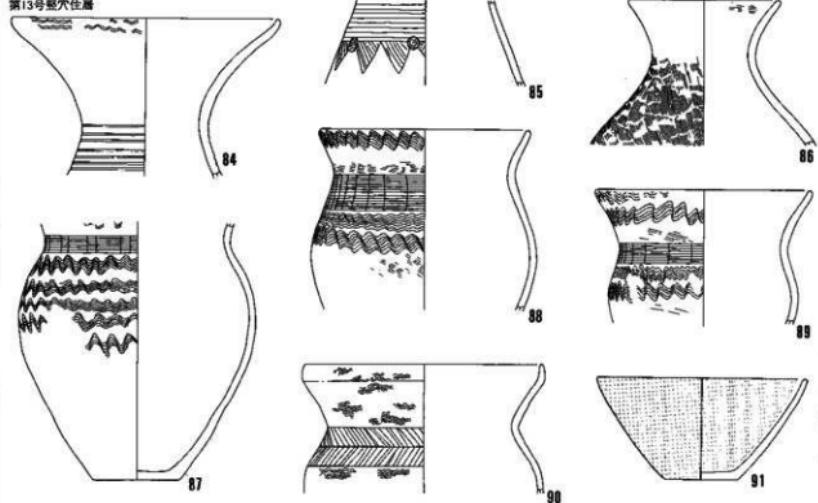


第9号竪穴住居

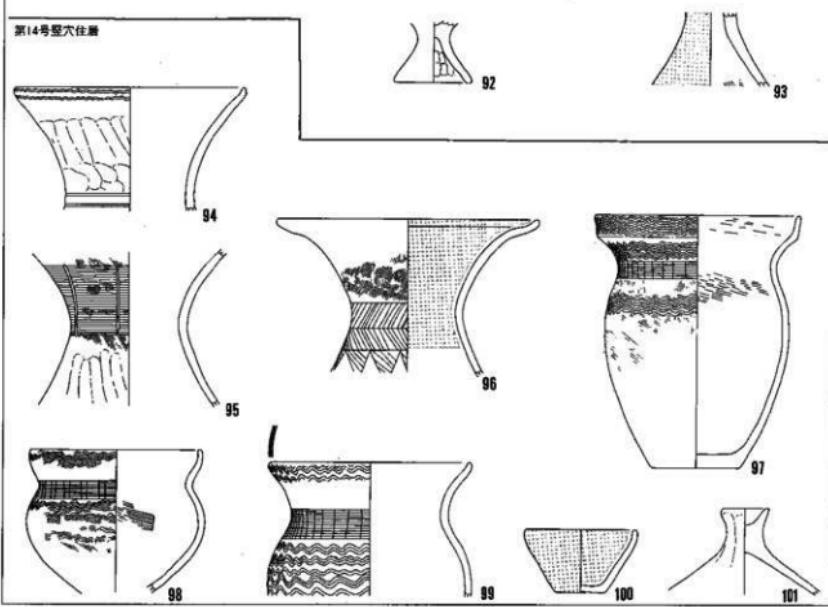


第42図 弥生土器(6)

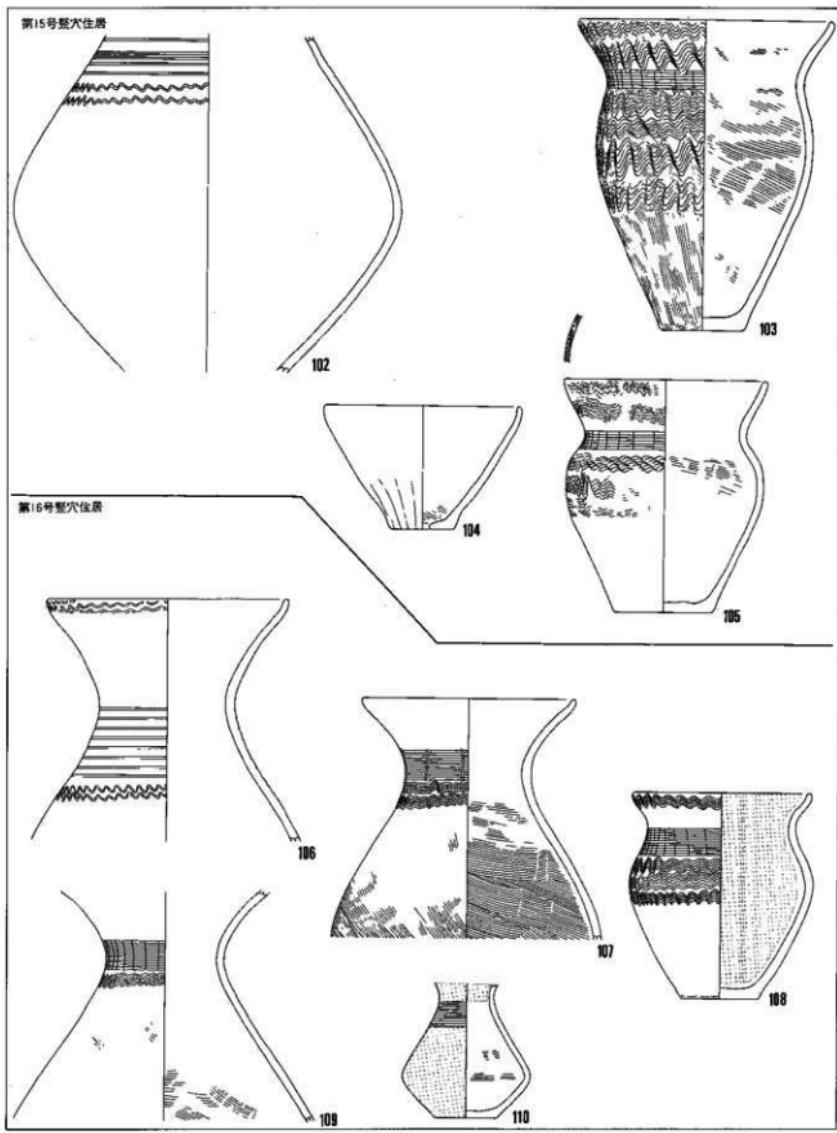
第13号竪穴住居



第14号竪穴住居

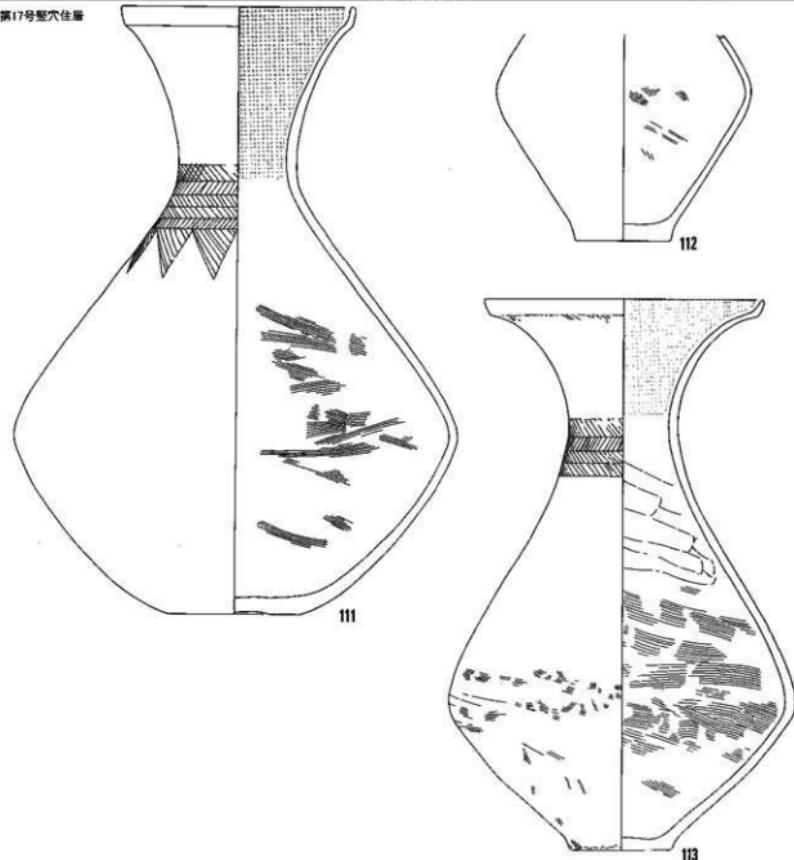


第43図 弥生土器(7)

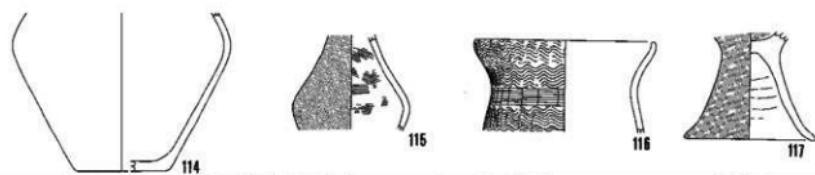


第44図 弥生土器(8)

第17号堅穴住居

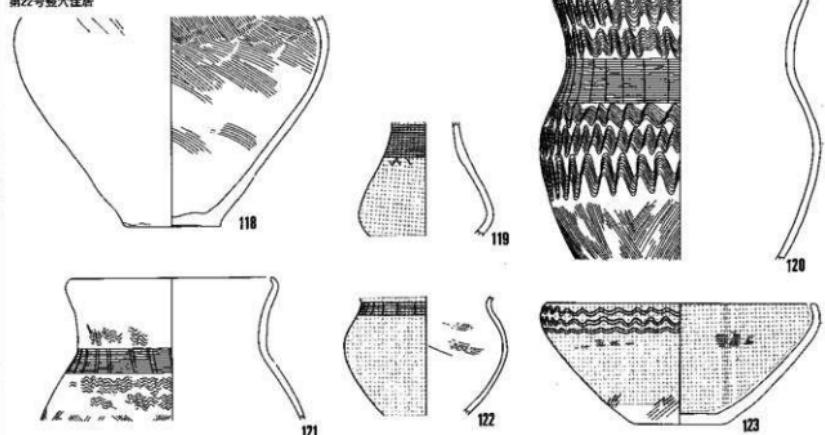


第18号堅穴住居

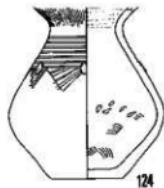


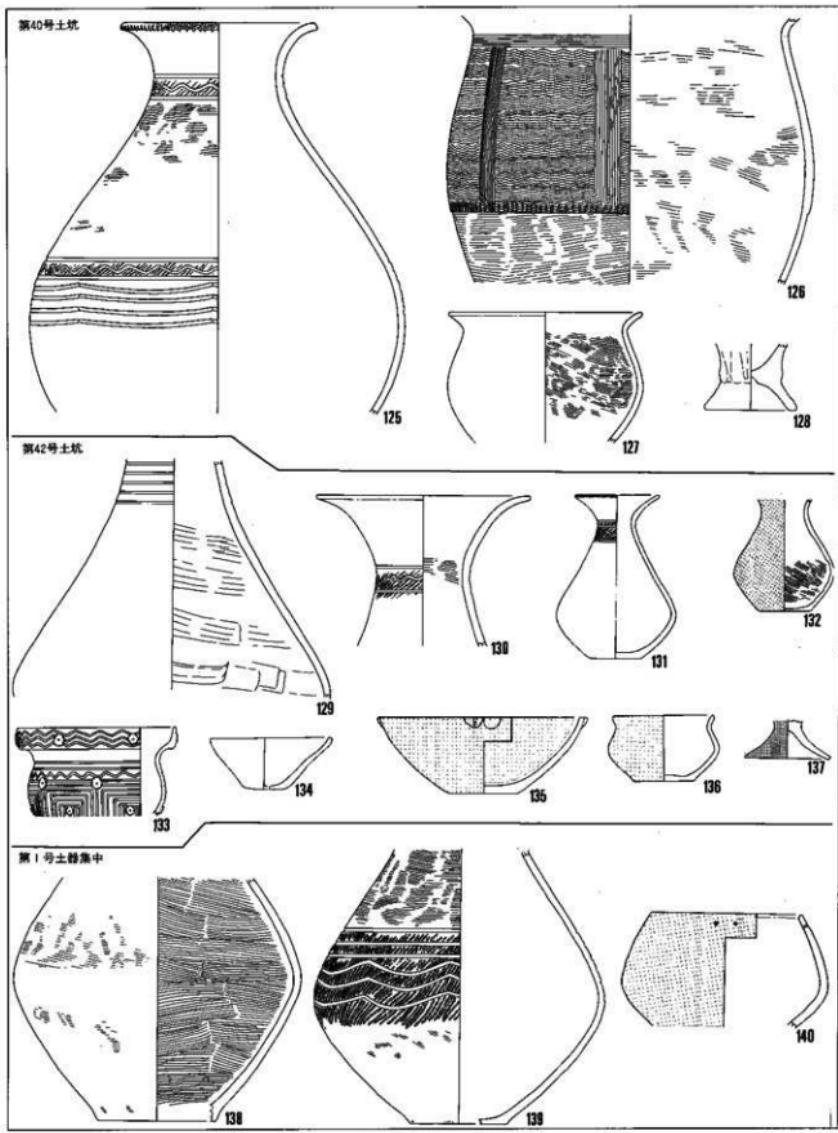
第45図 弥生土器(9)

第22号整穴住居

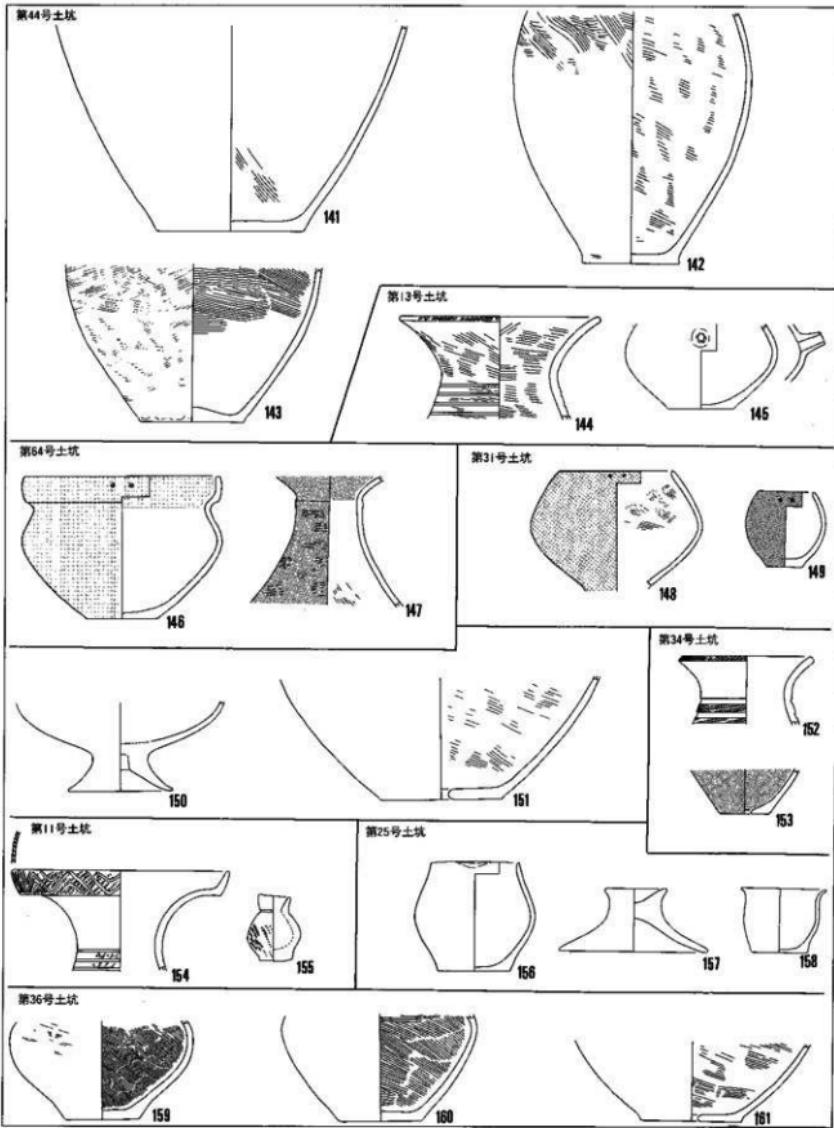


第20号整穴住居

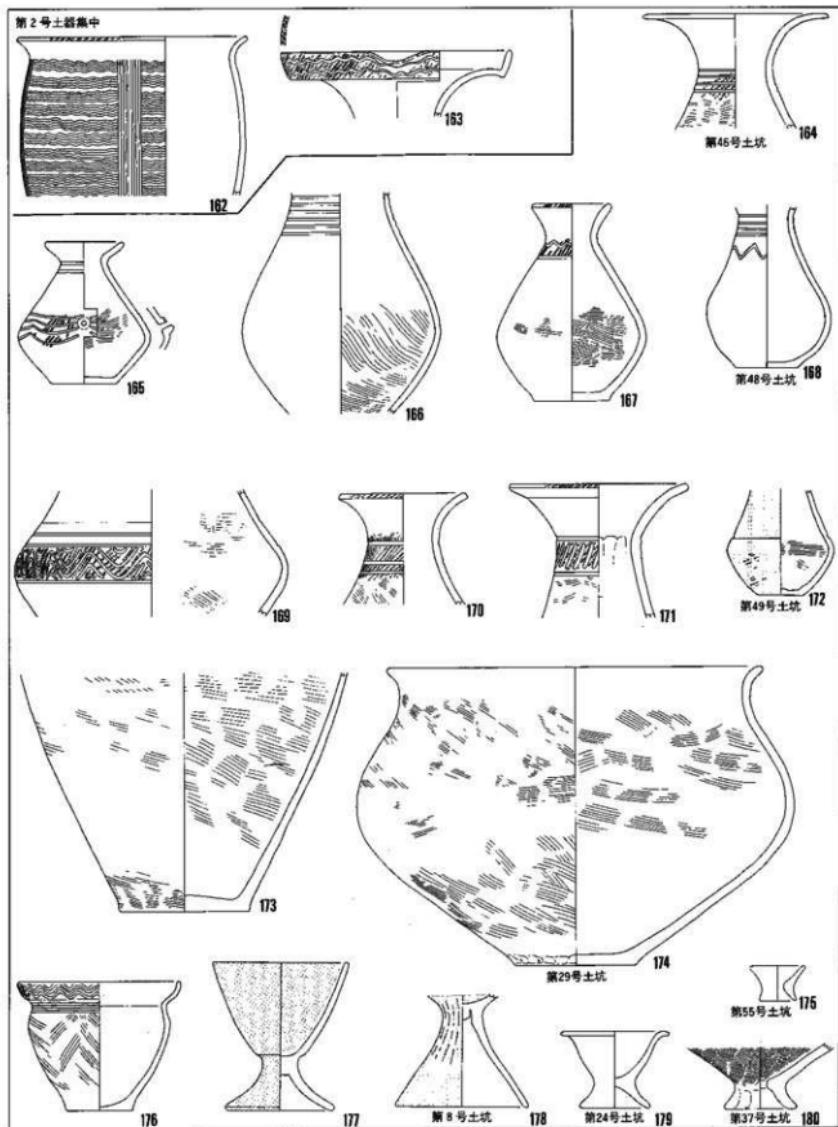




第47図 弥生土器(1)



第48図 弥生土器



第49図 弥生土器03

第4章 まとめ

第1節 弥生土器編年

1 段階区分

ここ数年の弥生時代の資料の集積が著しく進み、従来のように数少ない資料を操作する段階から、ある程度の量が整った資料群を分析する必要性に迫られ、北信地域における弥生土器編年は新たなステップを踏む段階に至っている。

しかしながら、具体的な編年操作となると、確固

たる層位的な事実が少なく、土器の形態変化を予測し、適宜区分するという手法をとらざる得ない。この操作には長いスパンの形態変遷を想定する必要があり、恵まれた遺跡に遭遇する以外、遺跡単位の調査報告を積み上げる調査状況下にあっては、なかなか言及できないのが現実である。外来系土器の伴出関係を基準に北信地域の編年を想定しようとする傾向も生むこともやむ得ないことではあるが、本末転倒の手法であることには違いない。

本遺跡においてもその状況はなんら変わらない。しかしながら、本遺跡の土器群の編年的位置を知るためにも、北信地域における弥生土器の大きな変遷

遺跡名	遺構名	竪1	竪2	竪3	竪4	竪5	かめ1	かめ2	かめ3	かめ4	かめ5	かめ6	かめ7
松原9 1	SB18	有り											
栗林	SB1	有り	有り				有り	有り					
浅川扇状地	SB1	有り						有り					
浅川扇状地	SK1	有り						有り					
浅川扇状地	SB2	有り						有り					
松原9 1	SB6	有り						有り					
籠ノ井	SB14	有り						有り					
栗林	SB3	有り						有り					
栗林	SB5	有り	有り					有り					
七瀬	SD1	有り	有り					有り	有り				
松原9 1	SB16	有り	有り					有り	有り				
仲9 1	SK57		有り						有り				
松原9 1	SB2		有り						有り				
本棚	SBMB		有り						有り				
釜瀬	SK4		有り						有り	有り			
仲9 1	SB7		有り						有り				
篠ノ井(4)	SB10		有り	有り				有り	有り				
県町	SB11		有り	有り					有り				
仲9 1	SK14			有り					有り				
西条	SB14			有り					有り				
栗林	SK25			有り					有り				
松原9 1	SB1			有り					有り				
県町	SB24			有り					有り				
二ツ宮	SKA7				有り				有り				
松原9 1	SB5			有り					有り				
県町	SB16			有り					有り				
県町	SB18			有り					有り				
栗林	SK23			有り					有り	有り			
栗林	SK35				有り				有り	有り			
仲	SB20				有り				有り	有り			
県町	SB7				有り				有り	有り			
栗林	SK24				有り				有り	有り			
百瀬9 3	SB2				有り					有り			
県町	SB8				有り					有り			
栗林	SK38				有り								有り
仲9 1	SB27					有り	有り		有り	有り			
百瀬9 3						有り	有り		有り	有り			
吉田	SB6					有り	有り						有り
塙崎7 9	SK5						有り				有り		

第50図 弥生中期遺構出土の土器

弥生後期類別一覧表	壺形土器5	壺形土器6	壺形土器7	壺形土器8	壺形土器9	壺形土器10	壺形土器11	壺形土器12	カヌ形土器6	カヌ形土器7	カヌ形土器8	カヌ形土器9	カヌ形土器10	カヌ形土器11	カヌ形土器12
長野吉田高校	SB2	○	○						○						
長野吉田高校	SB4		○	○		○				○					
長野吉田高校	SB3		○						○	○					
長野吉田高校	SB5		○						○						
長野吉田高校	SB6		○							○					
塙崎3	SB84	○								○					
二宮	SBA4		○							○					
二宮	SBA6		○	○						○					
長野吉田高校	SB10			○						○					
長野吉田高校	SB7			○						○					
二宮	FM5SB12				○					○					
二宮	SBA1			○						○					
本村東沖	SB61			○						○					
塙崎6	SB41			○						○					
本村東沖	SB19			○						○					
本村東沖	SB87			○			○			○					
塙崎6	SB24				○					○					
本村東沖	SB85			○						○					
塙崎6	SB30				○						○				
中俣	SB6				○						○				
本村東沖	SB77				○						○				
本村東沖	SB67				○						○?				
本村東沖	SB90					○					○				
本村東沖	SB42					○					○				
中俣	SD13						○				○				○
中俣	SB8						○	○							
塙崎6	SB31-イ						○			○					

第51図 弥生後期遺構出土の土器

過程を知ることは急務である。

本稿では中野市の出土資料を中心に弥生中期後半から後期の土器群を分類した。こうすることで、弥生時代全体から見た本遺跡出土土器の縦年の位置をより明確に捉えられると考えたからである。

そこで、本稿ではこの分類を利用して、北信地域の土器変遷過程を概観しておきたいと考える。

しかし、先述したように確固たる層位的な事実が望めないため、勢い古い形態と新しい形態を予測し、いわゆる型式論的操作を試みることになる。

ところで、壺文土器と異なり、弥生土器には器種の系譜が発達しているために、器種組成を分析するために一括資料を重視する傾向にある。

特に、重要な位置を占めているのが、住居覆土一括資料である。しかし、住居出土資料が厳密に共時性を有しているか否かは十分な検討が必要である。

住居からの遺物出土状況は特別な出土状況を除いて、

普通は覆土の堆積と関連した事象であり、厳密な意味で使用時の共時性を表現していないと考えられるからである。

特に、細分が進んだ場合には住居覆土一括資料に複数段階の土器が混在することが考えられ、住居出土の土器組成をそのまま段階区分に編入するとある種の混乱を招くことがある。

そこで、筆者は組合せセリエーション法を用いて各類の消長を観察し、段階区分を設けておきたい。

第50、51図に弥生中期後半及び後期の各遺跡の遺構単位の各類の組合せを表現した。こうしてできた表の各類の距離を最も短くなるように工夫するとどの類とどの類の組合せが強く、どのように変遷するかが明らかになる。第50、51図はすでに調整してあるが、判然としない組合せや、残存する状況を見ることができる。

そして、段階区分は壺形土器を重視するか、甌形

土器を重視するかでやや異なる。それを調整して段階区分を行う。その結果は以下のとおりである。

中期後半（栗林式土器）

第1段階：壺形土器（第1類+第2類）+甕形土器（第1類+第2類）から構成される段階。壺形土器第1類と第2類、甕形土器第1類と2類はそれぞれ、古い様相と新しい様相をもつ二者であり、古段階（壺形土器第1類+甕形土器第1類）と新段階（壺形土器第2類+甕形土器第2類）の細分される可能性もある。

第2段階：壺形土器（第1類+第2類+第3類）+甕形土器（2類）で構成される。壺形土器第2類の出現を区分の目安とする。

第3段階：壺形土器（第3類+第4類）と甕形土器（第3類+第4類）から構成される。壺形土器型第1類と第2類及び甕形土器第2類が消滅し、最古段階の形態が消え、新しい形態が出現する段階である。

第4段階：壺形土器（第4類+第5類）と甕形土器（第4類+第5類）から構成される。壺形土器第5類及び甕形土器第5類の出現を区分の目安としたい。

第5段階：壺形土器（第4類+第6類）+甕形土器（第5類+第6類）から構成される。壺形土器及び甕形土器の第6類の出現を区分の目安とする。

壺形土器と甕形土器第4類は器形的には長く続く系譜の土器で後期前半段階にも小型の壺形土器として残存するようである。

後期前葉

第6段階：壺形土器（第6類）+甕形土器（第6類）から構成される段階。

第7段階：壺形土器（第7類）+甕形土器（第7類）から構成される段階。

第8段階：壺形土器（第7類+第8類）+甕形土器（第7類）から構成される段階。

第9段階：壺形土器（第8類）+甕形土器（第7類+第8類）から構成される段階。

第10段階：壺形土器（第8類）+甕形土器（第8

類）から構成される段階。

第11段階：壺形土器（第9類）+甕形土器（第8類）から構成される段階。

第12段階：壺形土器（第9類）+甕形土器（第9類）から構成される段階。

第13段階：壺形土器（第11類）+甕形土器（第9類）から構成される段階。

第14段階：壺形土器（第11類）+甕形土器（第10類）から構成される段階。

以上のように、各器形を組み合わせセリエーションとして配列するとかなり、細かい段階区分が設定される。しかし、特に後期についてはサンプル数が少なく、このまま確定することは出来ないであろう。また、甕形土器第7類には多様なバリエーションを一括しており、今後細分する必要があることや、壺形土器第6類から第9類までは逆に細分しすぎているくらいがあるなど、分類上の問題も残している。

しかしながら、弥生後期の土器群は単純に吉田式と箱清水式に二区分されるのではないらしいことはこの段階区分をとおして知ることができよう。おそらく、後期前葉（吉田式）、後期中葉（尾崎式？）、後期後葉（従来の箱清水式）、末葉段階（御屋敷式？）の四期に大別されると考えている。後期中葉の段階についてはかって安源寺遺跡の報告において桐原健氏が旨及されているのだが、それ以上の議論は行われなかった経緯がある。その背景には弥生後期の壺形土器や甕形土器の完形品が意外に少ないという事情がある。この完形品の少なさは弥生土器の変遷を考えるうえで、大きな障壁となっている。

吉田式土器は壺形土器に特異な文様が認められ、容易に認識されるためその存在は常に明確に意識されてきた。

ところが、後期中葉以後は壺形土器の頸部に簾状紋が認められれば、箱清水式として認識されていた経緯があり、その全体の器形については余り意識されてこなかったように思える。が、今回の分類をとおして、口縁部の形態や胴部の形態がいわゆる箱清水式と異なる一群の土器が存在していることが明らか

かになったと考える。同様に壺形土器の器形にもバリエーションがあり、横描波状紋が施文されているからといって、単純に箱清水式とすることは出来ないことは明らかであろう。

これらの土器群を箱清水式土器という名称で取り扱うか、別名称を用意するかという問題は別にして、従来の箱清水式とは区別する必要があろう。現段階では資料数が足りないが、今後十分に器形を意識した分類を進めていく必要があろう。

一方、今回の調査で得られた本遺跡の後期前葉の土器群は吉田式の範疇でとらえるべきものである。壺形土器の器形を見ればわかるように、この土器群が直ちに従来の箱清水式の壺形土器の器形に変化したとは考えられず、その間を埋める土器群が必要であろう。また、吉田式として括ることができる土器群においても若干のバリエーションが存在し、地域差や時間差を表象している可能性がある。

第2節 栗林遺跡における集落の階層的構造

すでに触れてきたが、中野市遺跡地図上に示された栗林遺跡は幅約300m、長さ約1,500mに及ぶ大きな面積をもっている。そして、近年の調査から栗林遺跡が一つの大集落を形成しているのではなく、少なくとも三つの集落遺跡（弥生中期後半・栗林式期）が複合化したものであることが明らかにされた。土器編年が十分でないために断言できないが、栗林遺跡を構成する三集落は同時に存在していた可能性も否定できない。

また、隣接する安源寺遺跡においても栗林式期の何らかの遺構が存在することは確かであり、安源寺遺跡を加えれば四つの集落が併存していた可能性がでてきた。

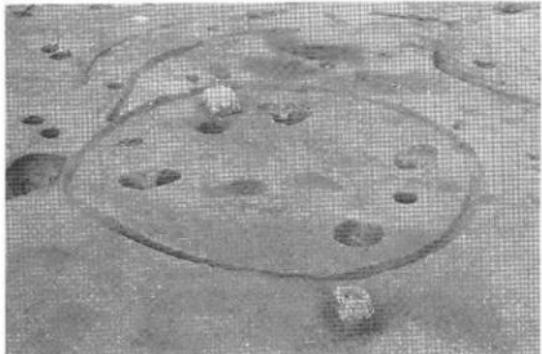
このような遺跡の景観をどのように理解すれば良いのであろうか。筆者はこれまで単純に弥生時代の集落遺跡は一つの集落から構成されるものだと考えてきた。したがって、大規模な集落も單一の集落で構成されており、基本的には通常の集落遺跡と変わ

りないものと考えていた。

ところが、栗林遺跡は独立したかに見える三集落が近接した大規模遺跡である。このようなあり方を単に大規模な集落遺跡と同一のスタンスでみることはできまい。單一集落が何らかの形で連合した上位の集落構造が形成されていたことを栗林遺跡は示していると考えることができようか。

弥生時代には「クニ」と呼ばれる領域の存在が指摘され、土器型式の主たる分布領域がそうした概念に相当すると漠然と考えられている。仮に、そうだとすれば、單一集落と「クニ」の間に、中間的な統合組織が存在していた可能性があろう。

写真図版



第 1 号整穴住居



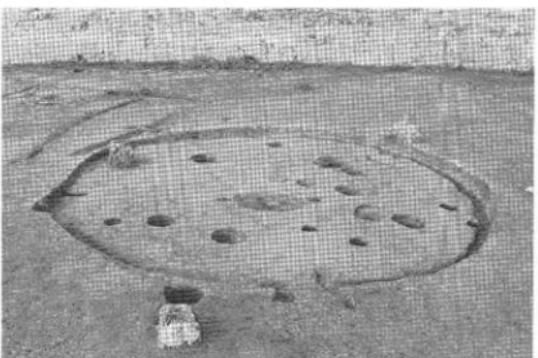
第 2 号整穴住居



第 3 号整穴住居



第4号竖穴住居



第5号竖穴住居



第6A号竖穴住居



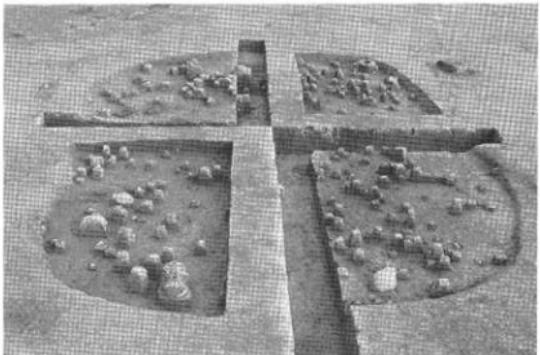
第6B号整穴住居



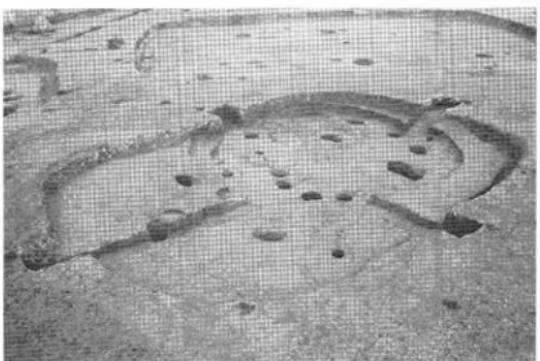
第6B号整穴住居



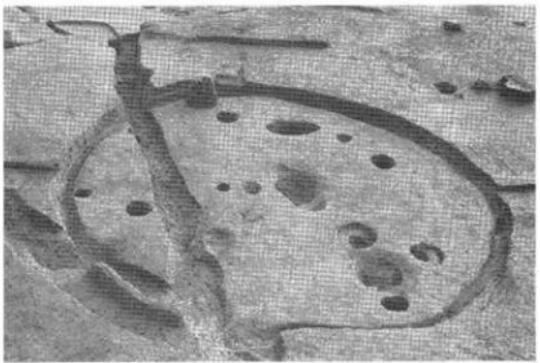
第7号整穴住居



第8 A・B号竪穴住居



第8 A・B号竪穴住居



第9号竪穴住居